

JICA横浜 海外移住資料館

研究紀要

3

平成20年度

論文

日本における出移民研究史概観 — 1990年代以降 —

石川 友紀

在アメリカ日本語新聞と「ララ」
— シアトルの『北米報知』による日本救済報道 1946～1947 —

水野 剛也

Nisei Interpreters/Translators of the U.S. Military

Tomoko OZAWA

研究ノート

日系アメリカ人と日本との絆
— MISとして占領下の日本に駐留した二世 —

増田 直子

資料紹介

「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー
— カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより —

柳澤 幾美

史料翻刻

「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動
— カンピーナス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介 —

柳田 利夫



『研究紀要』第3号の発刊によせて

『研究紀要』第3号が完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が中心となって平成18年度に立ち上げました4つのプロジェクトの3年目（最終年度）の成果が、このような形で多くのかたがたにお届けできますことを大変うれしく思っております。

4つのプロジェクトは以下のとおりです。

- ① JICA アーカイブス・プロジェクト（移民資料研究会と JICA 所蔵資料研究会）
- ② 研究調査プロジェクト「二つの国の絆を結んで——『移民』の日本への貢献を探る」
- ③ 研究調査プロジェクト「海を渡った花嫁たち——日本人女性移民の研究」
- ④ 海外移住資料館を活用した学習支援プログラムと教材の開発

海外移住資料館の目的には「海外移住と日系人社会に関する啓発および教育」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」がありますが、この目的達成に向けての努力のひとつが、展示・広報・教育普及を目指す学術委員会の活動です。2008年度、上記4つのプロジェクトは、それぞれ、国内の調査に加え南米・北米でも資料収集や聞き取り調査を行いました。その成果は、いくつかの公開講座や国際シンポジウムとして発信され、多くの参加者を得ました。今年度は、そのような発信の活動がとくに活発であったと、学術委員会およびプロジェクトメンバーは喜んでおります。上記の活動に加えて、『研究紀要』第3号に掲載された論文等も、海外移住資料館の目的に資することが明らかであり、これも大変、誇らしいことでもあります。このような活動が、移住や日系人社会に関する研究活動の底辺をさらに広げ、奥行きを増すことに貢献すると信じております。

この『研究紀要』が、読者および関係者のみなさまのご支援を得て成長し、海外移住資料館の活動の一部が、より広い分野で認識していただけるよう、願っております。ご意見など、どうぞ、お寄せください。

飯野正子

（津田塾大学学長・海外移住資料館学術委員会委員長）

研究紀要

〈目次〉

『研究紀要』第3号の発刊によせて

飯野 正子

論文

日本における出移民研究史概観 — 1990年代以降— …………… 1

石川 友紀

在アメリカ日本語新聞と「ララ」

—シアトルの『北米報知』による日本救済報道 1946～1947— …………… 15

水野 剛也

Nisei Interpreters/Translators of the U.S. Military …………… 37

Tomoko OZAWA

研究ノート

日系アメリカ人と日本との絆

—MISとして占領下の日本に駐留した二世— …………… 51

増田 直子

資料紹介

「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー

—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより—

…………… 61

柳澤 幾美

史料翻刻

「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動

—カンピーナス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介— …………… 75

柳田 利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface

Masako IINO

Articles —————

**A Historical General Survey of the Immigration Studies
in Japan after the 1990s** 1
Tomonori ISHIKAWA

**The Japanese-Language Press in the United States and LARA :
The Seattle *Hokubei Hochi*'s Coverage of Relief in Post-War Japan,
1946–1947** 15
Takeya MIZUNO

Nisei Interpreters / Translators of the U.S. Military 37
Tomoko OZAWA

Research Notes —————

**The Ties between Japanese Americans and Japan: MIS Nisei Who
Were Stationed in Occupied Japan** 51
Naoko MASUDA

Oral History Notes —————

**Oral Histories of "Picture Brides" :
From the Issei Oral History Project, Japanese American Archival
Collection, at California State University, Sacramento** 61
Ikumi T.YANAGISAWA

Research Document Reprints —————

**"Diario da Fazenda Monte d'Este" y el movimiento constitucionalista
de 1932** 75
Toshio YANAGIDA

日本における出移民研究史概観 — 1990年代以降 —

石川友紀（琉球大学・名誉教授）

〈目次〉

はじめに

1. 世界における出移民研究史概観

2. 日本における出移民研究史概観

おわりに

キーワード：世界、日本、出移民、研究史、1990年代以降

はじめに

近年、日本における出移民の研究は量的に少ない。それに代わって、入移民としての南米の日系人、二世・三世等の日本への「デカセギ」の研究が急増している。しかし、日本人移民の子孫である二世・三世等の原点は、日本から海外へ渡航した一世であることからして、その出移民の基礎研究が十分にあってしかるべきであると考ええる。

筆者はこれまで日本出移民研究史に関し、「日本出移民研究のための基礎試論」（1986）と「移民研究の現状と課題——移民送出側の視点から——」（1998）の2論文を発表した。本稿では1990年代以降2008年までに刊行された単行本や論文のなかから、移民研究では総論に属する日本における出移民研究史を、世界のそれを含めて概観する。そのため、各論に相当する事例研究主体の出移民研究刊行物は取り上げていない。なお、本稿では筆者が入手した日本語文献のみを対象としている。そのため、それ以外にも関連文献が少なからず存在すると考えられるので、ご教示願いたい。

1. 世界における出移民研究史概観

S. カースルズ、M. J. ミラー著、関根政美・関根薫訳の『国際移民の時代』（1996）はいずれの章も地図や表が呈示され、理論と具体的な事例を取り上げてあり、内容が充実している。なかでも第2章の1. 移民と定住の説明要因のなかで、つぎの記述は注目に値する。

国際移民を説明する理論的アプローチにはいろいろある。その理由の第1は、移民現象は複雑でその研究は多数の社会科学の研究領域にまたがるからであり、地理学者、人口統計学者、経済学者、社会学者、政治学者によって提出される説明は、しばしばそれぞれ異なった前提や方法論から引きだされているからである。第2の理由としては、大量の個々のケースから量的分析に基づく一般的理論を得ようとするアプローチと、世界経済出現の歴史的な脈のなかで移民現象を検討しようとする全体的で制度的なアプローチの二つのパラダイムが根本的に異なっていることから生じている。（S. カースルズほか 1996：20）

第2章において、その後2. エスニック・マイノリティの形成、3. エスニシティ、4. 人種差別、5. エスニシティ・階級・ジェンダー・およびライフサイクル、6. 文化・アイデンティティ・コミュニ

ティ、7. 国家・国民・および市民権、8. 結論とつづくが、これらの項目はひとつひとつが移民研究の大きなテーマとなりうる。

最後の第10章結論：新世界無秩序における移民は、1. 合法移民と統合、2. 「望まれていない」移民の規制、3. 永続的な解決と国際関係、4. エスニシティの多様性・社会変化そして国民国家、で構成されている。このなかで、移民研究にとってつぎのような記述は示唆に富む。

もし外国人労働者を認めようと一度決定したなら、政府は最初から、入国者のうち何割かの人々が確実に永住して居残ることを見越して、彼らの合法的定住の可能性を考慮しなければならないが、こうした対応こそ日本、マレーシア、イタリアおよびギリシアなどの多くの国々の政府も採用しなければならないものと考えられはじめていたのである。(291 - 292)

移民の時代はすでに世界と多くの社会を変えてきた。大部分の先進国と多くの開発途上国はたった1世代前と比べてもはるかに文化的に多様になった。国民国家の大部分が、実際大多数が、エスニシティの多元性に直面しなければならなくなった。現実には、エスニック的同質性を守り続けている近代国家はほとんどない。(中略) 今日大部分の国が受け入れなければならない現実、新しいタイプの多元主義との共存を喜んで受け入れなければならないということで、それはたとえ移民が明日急に停止されるようなこととなっても、社会の多様性は何世代にもわたって残るからである。しかも、本書で論述してきたように、移民現象はなくなりそうもないし、実際、21世紀に入ってもっと多くなりそうである。(302 - 303)

ほとんどの国でエスニシティないしは文化的多様性が増大し、移民送出国と受入国を結びつけるネットワークが出現し、そのことによって文化交流が拡大するという傾向は、今後とも逃れなくとも逃れられない大きな趨勢となっていくであろう。移民の世界規模化は我々に楽観的な期待を強める土台を提供するといえよう。なぜならば、小さな地球を取り巻く様々な緊急の問題に対処するために必要な、地球上に住む人間全体の統一を進める希望をあたえてくれるからである。(307)

望田幸男・村岡健次監修の「近代ヨーロッパの探究①」としての山田史郎ほか著『移民』(1998)は、序章. 移住と越境の近代史、でつぎのように刊行意図を記している。

本書は、一九世紀前半から第一次世界大戦後までのおよそ100年間にヨーロッパ世界で生じた移民をテーマとする六編の考察によって構成されている。一八一五年にナポレオン戦争が終結すると、ヨーロッパ内部の移動に加えて、大西洋を越える移住が本格的に始動し、以後第一次世界大戦に至るまで、多少の波はあるものの、大規模な労働力の国際移動が展開した。本章の目的は、近年の研究成果を手がかりとして、この近代ヨーロッパ人の大移動が生起した歴史的な文脈を確認しておくことにある。(山田ほか1998:2)

本書の構成と執筆者は以下のとおりである。序章. 移住と越境の近代史(山田史郎)、第1章. ヴェーネトからブラジルへ——世紀転換期におけるイタリア移民の様態(北村暁夫)、第2章. ガリツィア・ユダヤ人のアメリカ(大津留厚)、第3章. 大洋を渡る女たち——一九世紀オーストラリアへの移民(藤川隆男)、第4章. 第二帝政期ドイツにおける外国人労働者(柴田英樹)、第5章. ホワイト・エスニックへの道——ヨーロッパ移民のアメリカ化(山田史郎)、第6章. 約束の大地ラテンアメリカとメノナイト——プロテスタント再洗礼派メノナイトの流転と転住(国本伊代)。

表紙カバー表の絵は1930年代に活躍したベン・シャーン作品で、ニューヨークのエリス島に到着した移民たちで、その前列には物理学者アインシュタインの姿もみえる。

山田は序章のなかで、以下の構成で近代ヨーロッパ移民を捉えている。18世紀の人口・家族・移動、7つの移住システム、移住と産業、19世紀の諸変化、資本主義世界システム、大洋を越える移住、ヨーロッパ内部の国際労働力移動、国内の移動、第一次世界大戦後の移民。また、彼は本書の視座として、従来の古典的なプッシュ・プル要因では捉えきれない移民現象を送出国と受入国の双方から研究し、移民を移住戦略の主体として描くため、越境の軌跡、越境者と国家の概念を取り入れ記述している。

重松伸司の『国際移動の歴史社会学』（1999）は3部で構成されている。その第1部が国際移民研究の現状で、「近代における国際移動・国際移民について、主として1960年以降に刊行された主要な研究を概観し、その歴史的背景、共時的課題、および移民研究の現代的意義を考察する。」（重松：5）。第1章の国際移民研究の課題と動向は理論面の成果を要領よくまとめてあり、日本移民研究にとっても役立つことが多いので、つぎに取り上げる。

人口移動論の研究は、これまでに人口学、社会学、地理学、経済学、国際政治学などの社会科学の諸領域、更に、歴史学、歴史人口学、文化人類学の人文諸科学の領域から様々なアプローチが試みられ、人間の空間移動が示す多面的かつ複合的意味を明らかにした。これらの研究蓄積に加えて、近年にはエスニシティ論、多文化社会のパラダイム試論、および一国・一民族をこえた比較研究の理論構築を目指す国際社会学からの接近も見られる。精密化・細分化する研究傾向に伴って、文学や言語民族学、伝承学、エスノ心理学、民族音楽学などの研究アプローチも試みられている。（重松1999：13）

「本書ではこのような研究動向を踏まえ、主として社会科学の分野に絞って、古典的な理論モデルから、近代世界システムの一環としての国際人口移動論にいたる最近の研究成果への主な潮流を要約する」（13）、として以下のような項目を立てて論を進める。

一、国際人口移動とは、(1) 国際移動の定義と問題、(2) 仮説的前提条件、二、エコノス移民論とエトノス移民論、三、国際労働市場論——エコノス移民論 (1)、(1) 二単位間均衡論、(2) 世界システムと国際労働力移動論、(3) 世界資本主義展開過程と国際労働分業論、四、移民政策論——エコノス移民論 (2)、五、移動契機・社会変容論——エトノス移民試論、(1) 移動契機の任意性、(2) 都市移住・複次移動。(14 - 28)。「小結」として、重松はつぎのような自説を展開する。

これまでの移民研究の概観から明らかなように、人口の国際移動には二つのアプローチがある。筆者はそれを「エコノス移民論」と「エトノス移民論」と呼ぶことにした。すなわち、前者は国際的な経済システムを維持する労働資源（エコノス＝経済力）として移民を理解する視点、そしてもう一つは、国家あるいは特定の社会集団を構成する社会・文化的主体（エトノス）としての移民に対する視点である。二つのアプローチは、経済学的領域と、社会学、政治学あるいは歴史学の諸領域とに分離している。それが、旧来の諸研究の通例であった。そうした傾向が、同じ移民を経済的機能と文化的存在との二つに乖離し、移民研究者に対して別々の角度から理解させようとしてきた。両側面を統合的にとらえる移民研究の方法論と理論の枠組みをインド系移民を対象として次章で概観し、更にその実態を第Ⅱ部、第Ⅲ部で検討したい。(28)

2. 日本における出移民研究史概観

舟橋和夫は『出移民 100 年間の地域的特徴とその生活史的研究』（1992）のなかで、外務省外交史料館所蔵の「海外旅券下付表」等の資料を利用して、膨大なデータより 1868（明治元）年から第二次世界大戦前までの日本の出移民数を明らかにした。すなわち、「海外旅券下付返納表申達一件」のデータを使用して、日本の出移民数が 1868 年から 1897（明治 30）年までの空白期間を埋め、1898（明治 31）年以降 100 年間の道府県別出移民数を把握した。ちなみに、日本出移民数の合計は 1868 年から 1897 年までが 9 万 2,320 人、1898 年から 1941（昭和 16）年までが 65 万 5,661 人であり、第二次世界大戦前までの総数が 74 万 7,981 人となっている。（舟橋 1992：82）

同書で舟橋は新たな事実が認められたとして、以下の 3 点を指摘し結論づけている。

第 1 は、明治元年以降明治 18 年までなかったとされる集団移民が、今回の旅券発給データベースの研究で明治 4 年にその形跡が見つかったことである。これまで一度も指摘がなかったため、まだ詳しいことは不明である。しかし、今後の集団移民の研究において無視できない事実であろう。

2 点目の指摘は以下のとおりである。従来の研究は、どちらかといえばハワイ、アメリカ本土、カナダといった北アメリカへの移民研究が中心であった。しかし、明治元年から明治 30 年までの今回の年次別の実態研究でも明らかなように、極東ロシアや朝鮮半島、中国への移民がかなりの数に上るので、今後はこれらアジア地域への移民を北アメリカへの移民を考察する際にも平行に検討する必要があるであろう。それは、またペルーやブラジルといった南アメリカへの移民が多くみられる時期においても、アジアへの移民という視野を確保しておくことが重要であることを意味している。

3 点目は、従来の研究が広島、山口、和歌山、沖縄などいわゆる「移民県」といわれる県を中心に研究が進展してきたことである。ここでも明らかなように、上記の移民県以外に、北海道、福島、熊本、長崎、福岡、滋賀などいままでも研究が進んでいない実質的な移民県の研究を早急にはじめる必要があることである。（83）

上記の結論から日本における出移民地域は西日本に偏在しているが、北海道や東北日本にも及び、全国的規模での出移民研究の重要性を指摘していることがうかがえる。

木村健二は「近代日本の移殖民研究における諸論点」（1993）のなかで、「日本における移殖民研究は、近年において、その範囲を拡大させつつ隆盛の一途をたどっている。しかしそれらの研究成果を相互に比較対照したり、あるいは論点を整理するという面では、まだまだ非常に遅れた段階にあるといえる。」（木村 1993：2）と指摘している。本論文は 1. 移殖民研究の問題意識について、2. 移殖民の用語について、3. 統計数値の掌握と相互比較の必要、の項目で構成され、従来の日本出移民研究の論点を整理し、多くの文献資料を挙げている。そして、最後につきのような移民研究の意義を述べているが、筆者も賛同するものである。

いずれにしろ移民研究は、その相互比較を深化させることによって、民衆生活のあり方の相対的把握にはじまり、国家と民衆の関係、国家間関係をさらに鋭く照射し、歴史発展のダイナミズムをも豊富化し得るような内容を有するものであるといえよう。（15）

岡部牧夫の『海を渡った日本人』（2002）は日本出移民の通史として新視点からまとめたものとし

て高く評価したい。冒頭で本書発刊の意図をつぎのように記述している。

日本の近代史は、移民活動をぬきにしては語れません。中国人ほどの数ではありませんが、ハワイ、アメリカ本土やカナダをはじめ、メキシコ、ブラジルなどの中南米、朝鮮、満州、中国本土、ロシア極東、樺太、南洋群島、東南アジア、オセアニアと、日本人の移住先はひろい範囲におよんでいます。日本人は、いつ、どこへ移住し、どんな仕事についたか、移住先の地域の性格にどのような違いがあったか、また異民族の社会でどのような苦勞をし、いかに努力して人生をきりひらいたか……。そうした関心にそって、近代日本の移民活動を全体的に見ようところがけました。(岡部 2002：表紙の裏)

本書の内容構成は、移民からみる近現代の日本社会と題して、①海を渡った日本人、②近代日本の移民活動、③職業と個人史、④地域・民族・国際関係となっている。このうち①と②と④がおもに日本における出移民研究とみなされるので、以下取り上げてみる。

①海を渡った日本人の内容をみると、移民とはなにか、で岡部は「ある民族や国家の成員が、就業の機会をもとめ、もとの居住地のそとに移住するのが移民である。移民という日本語は、移住する人自身を意味するとともに、移住という社会現象をもさす。」(5)と指摘する。

また、移住先の3類型として、つぎのように大別できるとしている。

- (1) 独立の主権国家（アメリカ、ブラジルなど）やその自治領（カナダ、オーストラリアなど）。
- (2) 独立の主権国家の植民地・勢力圏（ハワイ、フィリピン、マラヤ・シンガポール、東インドなど）のように、日本の主権がおよばない地域。
- (3) 日本自身が植民地・勢力圏としている地域（台湾、朝鮮、関東州、満州、樺太、南洋群島など）。
- (8)

その解説後に、移民の数、移民の出身地を実証的に記述する。出移民の要因について、つぎのように捉えていることは、筆者も主張する移住の動機・要因の複合的要因論と一致する。

ある地域がいつ、どこに移民を送りだしたかは、その地域での移住要因がいつ発生し、その時期に世界のどの地域に送付が可能だったか、また、伝統的な共同体社会の静止性がどれほど流動化し、先駆的移民の経験談や移民のための諸制度の情報がどのように普及していたかなど、さまざまな社会的・経済的要素が複雑にからんで決まってくる。(21)

②近代日本の移民活動では、移民史の時期区分として、つぎの4つの時期を設定し、各時期の特徴を解説している。

- | | | |
|-----|------------|----------------------|
| 第1期 | 1884年まで | 端緒的移民期 |
| 第2期 | 1885～1904年 | 移民活動の成立期 |
| 第3期 | 1905～1924年 | 移民活動の社会化の時期 |
| 第4期 | 1925～1945年 | 移民活動の国策化と戦時化の時期 (23) |

④地域・民族・国際関係では、移民をめぐる思想と組織、長野県と移民活動、摩擦と対立、戦後

の移民、の項目で具体的に解説する。最後に、岡部は最近の日本の出移民現象について、つぎのような見方をしている。

母国の社会をはなれ、海外に新天地をもとめる若者はいまもなくなるらない。日本の教育体制になじめず、外国に出る中学・高校生は著者の身边にも少なくない。定職、出世といった人生の価値観が流動化し、「フリーター」や奉仕活動の領域がひろがる現代では、むしろ海外移住の機会はひろがり、以前のような覚悟や気おいても消えつつあるようだ。かぎられた年金を有効に生かすため、余生を外国ですごしたいという高齢者の欲求も年々高まっている。

従来の移民が多かれ少なかれ国家の政策と密接にかかわり、あるいはそれに左右されて展開されたのに対し、こうした新しいタイプの移民は、いまのところ国家の枠のそとにある。しかしそのような人々が、じつは草の根のレベルで新しい国際関係をになっているのである。

日本社会の移民現象は、単に衰退したとみるより、大きく変質しつつあるととらえるべきだろう。(93 - 94)

東栄一郎の「日本人海外渡航史」(2002)は1868(明治元)年以降現在までの長期にわたる日本出移民通史としての概説ではあるが、実証的で全体像が把握できる労作である。東はつぎのように、日本出移民の開始を1868年と捉え、本格的な海外移民の始まりを1885(明治18)年として論を進める。

日本人の海外渡航は、1868年の開国、明治維新とともに始まりました。孤立した島国であった日本が資本、労働力、そして交通の面で世界の一部となる過程で、日本人は急激な社会経済の変化の渦に飲み込まれ、特にこれまで封建制のもとで土地に縛られていた農村人口が、国内のみならず国際的規模で移動するようになったのです。また近代医学と衛生概念の導入が、明治期の急激な人口増加へとつながって、国内資源の少ない日本から余剰人口が海外流出する下地となったのです。(東2002:64)

以下、本論文の内容構成をみると、海外移民の始まり、北アメリカへの日本人渡航、ラテンアメリカへの日本人渡航、国策移民事業と排日運動の激化、太平洋戦争と海外在留民の帰還、戦後の海外移民再開、ラテンアメリカ移住の終焉とその後、の項目の順となっている。最後に、東は最近の海外の日本人移民の実態を、つぎのように捉えている。

経済の国際化が進み、さらにテクノロジーの発達で世界が急速に狭くなりつつある現在、ただ単に経済的な観点からだけでは、日本人の海外渡航の意味は定義できなくなっています。国境を越えた日本人と日系人の経済、文化、社会活動はますます拡大しており、1993年の時点で総計165万人以上の日本人・日系人が海外に居住しています。その内訳は、81万以上が北アメリカ、73万以上がラテンアメリカ、続いてアジアの5万8000、ヨーロッパの2万1000、オセアニアの1万6000、そしてアフリカ・中近東796人となっています。しかしどこに住んでいても、海外在留の日本人や日系人は、居住国の一員としてそれぞれの社会と文化の多様性を促進し、また日本国内においても、海外生活で培ったビジョンでもって日本社会の多様性に貢献しているのです。(84 - 85)

ハルミ・ベフの「第1章 グローバルに拡散する日本人・日系人の歴史とその多様性」(2006)は日本の出移民を近世15世紀・16世紀以降の日本のグローバル化と関連づけ、マクロな観点から通史として取り扱い、実証的な裏付けを行っている。ベフの本論文の視点をまず記す。

グローバル化を論じる者の中には、ウォラステインなど少数を除くと、残念ながら歴史的観点に欠けているものが多い。大多数の論者は通時的考察を無視し、せいぜいがここ二、三〇年の現代の問題のみに焦点を当てるだけである。ウォラステインは、西欧のグローバル化は十五世紀に始まったと早くから論じている。これはスペイン、ポルトガルをはじめとする西欧諸国が探検家を世界中に送り出した、いわゆる「大航海時代」、「大発見時代」にグローバル化が始まったということである。本章では日本のグローバル化も西欧とほぼ同時期に始まったことを、人的拡散の立場から通時的に考えていきたい。(中略)十六世紀以来の日本のグローバル化を冷静に眺め、それがどのような形で、またどのようなプロセスで続いてきたのかを分析することによって、日本史の新しい視点を把握することが本章の意図である。グローバル化の功罪の判断は別の次元の問題である。(ハルミ・ベフ2006:28)

本章の内容構成は第一期、第二期、残留日系人、第三期、移民、国際結婚(「戦争花嫁」、もう一つの国際結婚)、多国籍企業駐在員とその家族、シルバ作戦、戦後定住者、日本を棄てた日本人、風来坊、結語(頭脳流出、文化的資本、日本経済への貢献、人的拡散の日本社会への「罪(負)」)の項目となっている。

ベフは「人的拡散に焦点を合わせた日本のグローバル化は三期に分けられる。」(48)として、歴史上以下のように時期区分を行っている。

第一期は一五——一六世紀の和寇の中国(明)沿岸での出没、また日明交易に始まり、一六——一七世紀の東南アジアへの進出、移住へと続いた。

第二期は一九世紀の中葉、徳川末期に鎖国が解禁となった時点から始まるのだが、本格的に移住が見られるようになるのは明治元年からである。この時期の日本のグローバル化は、自主的に行われた第一期と違い、西欧のグローバル化を模倣し、それに追いつく意図で始まった。それは資本主義と領土の獲得・搾取と相互依存の二本立ての政策だった。人的拡散は一方では資本主義をより効果的にするための失業対策・人口問題解決に結びつき、他方では植民地・占領地に民族的基盤を作ることだったのである。第二次大戦終末期には明治以前の日本領土の外に約六〇〇万の日本人が数えられ、敗戦により本土への引き揚げを余儀なくされたのだ。(48-49)

第二期と第三期との間には時間的断絶がほとんどなく、第二期末期の海外日本人の引き揚げが終わるか終わらないときに、第三期のグローバル化が、移民、「戦争花嫁」、留学生などの形で開始することになる。(36)

坂口満宏の「新しい移民史研究にむけて」(2007)は最初に「1. 日本人移民史の全体像を探る研究」と題して、つぎのような研究意識をもつ。

近年、移民事象を積極的に歴史研究の対象にすえようとする課題意識が高まっている。研究の裾野は広がり、従来からの南北アメリカへの移民史はもとより、ヨーロッパ各地での移民事象、中国、東南アジア各地に広がる華人・華僑の歴史と現状、南アジア・インドにおける移民の存在、

日本が領有した植民地地域への移住問題に対しても関心が高まり、研究動向の整理も進み、新たな成果と課題が示されてきている。ここでは日本人移民史の全体像を探ろうとする研究動向を三つに分けて示そうと思う。(坂口 2007:240)

その3つの研究動向とは、「勢力圏」・植民地研究、「非勢力圏」へ移住した日本人移民の研究、2つの領域を結びつけた新しい研究であり、関連文献を挙げて解説する。そして、坂口はつぎのように結論づける。

これまでの移民史研究といえば、日本からの送出過程や移住地に形成された日系社会の構造と日本とのつながり、日系人の日系たる由縁やエスニック・アイデンティティの解明等に向けられることが多かった。そうした研究が可能であったのは、移民とみなされた集団が特定の移住地域にある程度の規模で集住するという特徴をもっていたからである。とりわけ国策移住時代にはこうした傾向が顕著であった。

しかしながら近年ではこうした旧来型の移住形態とは異なり、さまざまな理由を背景にして個人として海外へと拡散する日本人が増大している。こうした人々は既存の日系コミュニティとの接点も少なく、それでいて独自の集団を形成することも少ないため、旧来の視点や方法ではとらえきれなくなっている。近年ますます加速する多様な人的拡散状況をいかに把握し、分析の対象とするのか——ここにも移民史研究の今日的な課題がある。(245 - 246)

坂口は以下、「移民史研究の課題——移住者送出の構造」として、人の移転システムにみる「裏日本」状況、国策移民史の政策研究、「移民史研究の課題——安価な労働力移動の連鎖」として、移民受け入れ側の労働力編成とエスニック・グループ、日本人の移動、中国・朝鮮人の移住、の項目などで論を進める。

なお、上記坂口論文を掲載している『日系人の経験と国際移動』(2007)のなかで編者の米山裕が「環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する」(9 - 23)で、日本人の海外体験のまとめと、新しい移民研究の方向性を打ち出しているのは注目に値する。

森本豊富の「日本における移民研究の動向と展望——『移住研究』と『移民研究年報』の分析を中心に——」(2008)は、第二次世界大戦後の日本の移民研究史として、領域横断的な移民研究の動向について、国立情報学研究所や国立国会図書館などの書誌検索結果と関連する諸学会の学術誌等を検証することによって概観する。その上で『移住研究』『移民研究年報』の論文等や、日本移民学会の年次大会(1991 ~ 2006年)における自由論題報告を研究の地域・分野・対象・内容別に分類し、1950年代以降の日本の移民研究の動向をまとめ、学際的な分野としての移民研究の展望と課題について解説する。(23)

森本は「はじめに」で、つぎのように日本における移民研究が、日本移民学会設立を契機に、1990年代以降発展が目覚ましいと説く。

日本移民学会が1991年に発足してから16年余りが経過した。この間の日本そして世界における移民研究は大きな変化を見せている。人の国際移動は1990年代以降とくにめざましくなり、時空の「圧縮」と言われる時間的な加速と空間的な拡がりに連動するかたちで、移民研究が注目されるようになってきた。(森本 2008:23)

そして、「むすび」で森本は現在の移民研究をつぎのように分類できるとしている。

移民研究は、古くて新しく、様々な地域を取り込んだ無限の可能性を秘めた研究分野である。しかし、「移民」の定義は、日本移民学会においては、正面から議論されたことはなかった。多くの研究者は自明のこととして議論を先送りしてきた。難民や奴隷などの強制移動を強いられた人々を研究対象とするのか、国家の政策で勢力圏内に移動した植民の扱いはどうするのか。自主的に国境を越えて移動し定住した者のみを「移民」と称すると、現在の移民研究の多くは除外されてしまうことになる。

自らの意志で国境を越えて滞在する出稼ぎ労働者、留学生、駐在員などを「在留民」、異国への定住を意図して移り住む者を「移民」、強制的に国際移動させられた人々を「難民」、そしてこれらの総称として「移ろう民」という言葉を仮に命名するとすれば、図2（省略）のような関係性を描くことができる。(37 - 38)

森本は最近の移民研究の動向を見据え、本論文のデータの分析結果をもとに、課題と展望を以下の6つにまとめている。

第一に、日本人移民と日系人に研究が集中しがちであることは否めない。日系に限っただけでも、調査すべき点はまだまだあるが、国内においては多様な文化的背景をもつ外国籍の人々を出来るだけ多く網羅することと、海外ではアジア系、アフリカ系、イスラーム系などの人々についてさらに調査が必要であろう。

第二に、研究対象地域も北南米やハワイに限らず、その他の五大州と環太平洋地域に広げ、それぞれの地域に関する研究者が得た知見を移民研究という観点から関連づけることが求められる。

第三に、出移民研究については、いくつかの移民県に関する詳細な調査は存在するものの、その数は非常に限られている。未踏査の県や地域についての調査が若手研究者から出て活性化されることが望ましい。そのためには各県に埋没している資料の発掘を、県や市町村の関係者や郷土研究者の協力を得ながら進めていくことが必要となろう。

第四に、関連する研究分野とその学術団体との情報交換と連携が必要である。とくに歴史地理学、国際社会学、人口学、異文化間教育学などの学問領域とは、研究対象に関して密接な関係があることは明らかである。各学会の会長をはじめとする中心的なメンバーが積極的に他学会に呼びかけ、何らかの形で共同研究や研究会、連合大会などの機会が作られることを期待したい。

第五に、海外の移民研究者の唱える理論あるいは概念的な枠組みの応用と、日本を起点とした移民研究の理論構築も必要である。併せて、研究手法についても他の研究領域の量的、質的な調査研究法をどのように活用していくのかについて情報交換が望まれる。そのためには、移民研究者個人個人の研鑽が必要であることは当然であるが、欧米に限らず環太平洋地域やアジア諸国などの移民研究者との国際共同研究が求められる。

最後に、日本における移民研究の蓄積を海外に情報発信することである。英語やその他の言語による成果の発表を通じて相互理解が深まり、日本の移民研究全体の底上げが期待できる。(39 - 40)

最後に、個人論文ではなく共同研究による日本における出移民研究史の集大成ともみなされる移民研究会編の『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅱ 1992年10月—2005年9月』(2008年)を

取り上げる。

本書は上記の移民研究会の編集による旧版『日本の移民研究 動向と目録』（日外アソシエーツ株式会社、1994）と、新版『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅰ 明治初期——1992年9月』（明石書店、2008）につづくものである。内容は第1部、研究の動向と展望、第2部、文献目録、に分かれ、第1部ではPart1、移民と国家、Part2、コミュニティ、Part3、アジア、オセアニア、中南米で、合計14章の項目より成り立つ。本稿では日本の出移民関連項目に絞って取り上げる。

飯野正子は「まえがき」で、つぎのように日本人移民・日系人研究の増加と多様性による研究の進展をあげ、その研究内容と研究視座の検討も早急に行う必要があると解説する。

最近の日本人移民・日系人に関する研究は、日本国内においても海外（とくに北米および南米）においても、大きな進展を見せている。その進展の顕著な特徴は、研究量の増加と、研究の多様化である。研究量の増加は、「移民」や「移住」という現象に関心を持つ研究者の数が増加したことだけではなく、一般の人々の間でも移民や日系人への関心が深まっていることをも示している。日本においては、1980年以降、外国人労働者として入国した南米出身の日系人の存在が、この分野の研究増加に寄与している。また、海外、ことにアメリカ合衆国では、1965年移民法成立以降に見られるアジアやメキシコからの移民の急増や不法移民問題などが政府および社会の注目を浴びており、その研究が増加したのである。

研究の多様化は、日本国内・国外いずれにおいても、日本人移民および日系人が、歴史学、社会学、人類学、経済学、地理学、文学、教育学、言語学、女性学、医学などにとどまらず、表象研究といった分野でも扱われるようになったことに、明確に示されている。加えて、一つの分野における研究ではなく複数の分野にまたがった学際的研究の増加も著しい。研究分野の広がりや学際的研究の増加の基盤には、当然のことながら、新しい研究分野が生まれ確立してきたという事実があるが、移民研究あるいはエスニック集団研究のなかでもとくに日系人研究に関しては、広い分野での日系人の活躍も、この現象に寄与していると思われる。たとえば、これまでは日系人の顕著な活動といえば経済や労働の分野あるいは政治や学問の世界というステレオタイプの認識が受け入れられていたが、最近では、作家や映画制作者、スポーツ選手として名を馳せる日系人も増えているのである。必然的に研究の分野は広がってきた。こうした移民研究の進展と裾野の広がりには目を見張るものがあり、膨大な量の研究が新たに出現しているのである。

本書は、このように多様化し豊かになった研究内容とその研究視座の検討・再検討が早急に必要であるという認識から始まった共同研究の成果である。（移民研究会 2008：3）

長谷川寿美は同書の「第1章、出移民」の「はじめに」で、つぎのように日本の出移民研究史の流れをみる。

日本の移民研究において、「出移民」の研究は歴史が古く確立された研究分野であるが、近年は論文数減少の傾向にあり、また内容的には多様化・細分化が進んでいる。「出移民」に関しては、1992年前半までの研究を対象とした『日本の移民研究 動向と目録』（日外アソシエーツ、1994年）出版までに研究の地盤がほぼできあがっていたように思われる。近年は、そうした研究を土台としてさらに踏み込んだ研究や、新しい切り口による研究が増えている。1994年版との比較において近年の研究を概括すると、近年の「出移民」の研究は次のように分類される。①数的には少ないが、「通史」として今後の研究の基盤となるもの、②移民を送り出した県や市町村などで着々と

編纂が進められている「移民史」などの一次資料と「地域における個別研究」からなる「地域的背景」、③1994年版の項目に挙げられた「移民政策」「移民斡旋」「移民思想」に関するさらなる研究、そして④新しいテーマによる研究である。(12)

そして、以下1. 通史、2. 地域的背景（県史および県人海外発展史、個別研究：沖縄県、個別研究：その他の県）、3. 移民政策、4. 移民斡旋、5. 移民思想、6. 近年見られる研究テーマ、の項目順に文献の解題を行っている。7. 展望で長谷川はつぎのように総括する。

以上見てきたように、日本の移民研究における「出移民・国内事情」の研究に関しては、総体的に論文数が減少する傾向にあるなか、出移民を多出した地域から発信される資料の編纂、地域を限定した個別研究は着々と続けられている。また、本章の冒頭で挙げた『日本の移民研究 動向と目録』（1994年）には見られなかった新しい多様な視点による研究、移民史以外の研究領域からの参入も増えており、今後のさらなる進展が期待できる。一方で、出移民の基本的資料となりうる研究も含めて、「移民政策」「移民斡旋」「移民思想」といった従来から続けられている研究分野は、おもに少数のベテラン研究者の貢献への依存度が非常に高く、活発に研究が進んでいるとはいえない。今後は、特定地域に特化した研究や多様な視点によるさらなる研究を奨励しつつも、基礎的研究をさらに堅実なものとする努力が期待される。(20)

おわりに

月日のたつのは早いもので、21世紀もすでに8年余を経過した。日本は海外へ移民を送り出さなくなってから13年が過ぎ、逆に移民の受け入れ国になりつつある。かつて20世紀は「移民の世紀」と称されるほど、世界的には旧大陸から新大陸や太平洋の島々へ多くの移民が出て行った。ちなみに、第二次世界大戦前日本から海外へ送り出された移民は、外務省の統計によると、1899（明治32）年から1941（昭和16）年までの43年間に65万5,661人となっている。

ここで、120年余に及ぶ日本人移民の歴史を振り返ってみよう。今年（2018年）は日本出移民の開始を1868（明治元）年のハワイ移民にとると140周年、その後継続して多数の移民を送り出した1885（明治18）年のハワイ官約移民を基準とすると、123周年を迎えることになる。1991年に日本移民学会も設立され、日本人移民の研究が数多くなされてきているが、いまだ十分とは言えない。移民研究は自然・人文・社会科学の多くの分野からアプローチが可能だけに、基礎的な研究をもっと重視する必要があると考える。そこで試案として以下に日本移民研究に関する7つのテーマを挙げ、筆者の提言としたい。

(1) 日本における移民送出地域・移民母村に関する基礎（基盤）的研究、(2) 日本における都道府県別郡市町村別出移民現象の歴史地理学的研究、(3) 海外における日系人に関する基礎的研究、(4) 海外における日系人の移民先国別移住者の歴史と実態の研究、(5) 一世・二世移民のライフヒストリー記録のための現地実態調査研究、(6) ラテンアメリカにおける日系人の日本への出稼ぎ（デカセギ）に関する基礎的研究、(7) ブラジル・アルゼンチン等日本人移民100周年などのような周年関連の移民研究。

つぎに、日本人移民研究の方法論について、ひとつの思考法・考え方を提示してみる。日本人移民の全体像を見るには、大空を飛ぶ鳥の眼のようなマクロな、また、地を這う虫の眼のようなミクロな、両方を兼ね備えた複眼的・総合的な視点からの理論と、現場を重視する実証的な分析・考察

を心がけるべきである。また、日本人移民を世界のなか、アジアのなかに位置づけながら、日本国全体として、ついで都道府県単位の地方の段階まで精細な地道な研究に邁進すべきであろう。その際、現実のみならず歴史と伝統を重んずべきである。

移民研究の具体的な研究施設を、日本人としての移民送出側から挙げてみると、国単位としては外務省外交史料館・国立国会図書館・国立公文書館・国際協力機構・大学附属図書館等、都道府県単位では都道府県庁とその関連施設、区郡市町村単位では区・市町村役所・役場とその関連施設等がある。字・区単位としては字・区公民館や集落等の施設がある。このような地域の広さの規模別でもって、上記の移民研究テーマの取り上げが可能であるが、なかでも都道府県単位以下のものとしての地方史誌が充実すれば、大きな研究成果が得られよう。

最後に、2006（平成18）年度から3年間計画で実施してきているJICA横浜・海外移住資料館の学術委員会のアーカイブズプロジェクトについて紹介したい。その研究目的とプロジェクト委員および研究計画は以下のとおりである。

(1) 研究目的：これまで、日本における移民送出地域・移民母村に関する研究は十分に行われてこなかった。明治・大正・昭和・平成各時代を通した19世紀末から20世紀にかけて、100年余にわたる日本の移民送出地域・移民母村の歴史資料を発掘し、整理し、データベース化しておくことは「移民」を知らない世代に、財産として残しておくことができると考える。そのため、海外移住資料館所蔵の移民に関するすべての資料、また国・地方の図書館・文書館・資（史）料館等に所蔵されている移民資料の利用・活用を考えるためのプロジェクトを立ち上げる。その手始めにJICA横浜の海外移住資料館に、かつての海外協会連合会・海外移住事業団・琉球政府等を通じて実施されてきた、戦後海外移住に関する基礎資料を収集・整理・保管・公開するためのアーカイブズとしての機能を充実させる。

(2) アーカイブズプロジェクト委員：兒玉正昭（前鈴峯女子短期大学長）、木村健二（下関市立大学教授）、原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）、柳田利夫（慶応義塾大学教授）、糸井輝子（白百合女子大学教授）、石川友紀（琉球大学名誉教授）

(3) 研究計画：第1は地方所在史資料調査として、委員がそれぞれ担当する地域・機関における移民関係史資料収集のため現地調査を実施する。第2は研究会を開催して、各自の史資料の調査結果を持ち寄り、分析・検討し、日本における移民研究と移民史資料の関係について総合的な議論を深める。第3は2008年12月中旬をめどに、各自の史資料調査と研究会での議論をもとに、研究者および一般向けに、日本における移民研究と移民史資料についての公開講座を開催する。第4は移住申込書等関係資料整理として、JICA横浜・海外移住資料館所蔵の戦後移住申込関係資料の整理と作業を行う。整理作業の必要に応じて、各県公文書館等における所属資料の調査と収集作業を実施する。第5は外務省等国家レベル、都道府県・市町村等地方レベルのアーカイブズ（公文書館）における資料調査を実施し、また、JICAを通じて実施された海外移民・移住者送出事業に関する一次資料を悉皆調査し、可能な限りの資料を収集し、データベース化する。

上記のアーカイブズプロジェクトは現在進行中であり、2008年12月13日にJICA横浜・海外移住資料館で、「日本の移民研究と史料」と題して公開講座を開催したところである。

近年日本の出移民研究が少なくなり、出移民事象を知らない世代も多くなりつつあるので、上記のような基礎あるいは基盤研究は今後継続してほしいし、これを土台になお一層の研究の進展と、若手移民研究者の輩出を強く望むものである。

引用文献リスト

東栄一郎

2002「日本人海外渡航史」アケミ・キタムラ＝ヤノ編、小原雅代ほか訳『アメリカ大陸日系人百科事典 写真と絵で見る日系人の歴史』東京：明石書店、64－85。

石川友紀

1986「日本移民研究のための基礎試論」『汎』1、36－54、東京：PMC出版。1998「移民研究の現状と課題——移民送出側の視点から——」『移民研究年報』5、53－67。

移民研究会編

2008『日本の移民研究 動向と文献目録Ⅱ 1992年10月—2005年9月』東京：明石書店。

S. カースルズ、M.J. ミラー著、関根政美・関根薫訳

1996『国際移民の時代』名古屋：名古屋大学出版会。原典は1993年発行のThe Macmillan Press Ltd. 発行の*THE AGE OF MIGRATION*。

岡部牧夫

2002『海を渡った日本人』日本史リブレット56、東京：山川出版社。

木村健二

1993「近代日本の移殖民研究における諸論点」『歴史評論』513、2－15。

坂口満宏

2007「新しい移民史研究にむけて」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動 在外日本人・移民の近現代史』京都：人文書院、239－261。

重松伸司

1999『国際移動の歴史社会学——近代タミル移民研究——』名古屋：名古屋大学出版会。

ハルミ・ベフ

2006「第1章 グローバルに拡散する日本人・日系人の歴史とその多様性」レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キタムラ＝ヤノ、ジェイムズ・A・ヒラバヤシ編、移民研究会訳『日系人とグローバル化——北米、南米、日本』京都：人文書院、28－56。

舟橋和夫

1992『出移民100年間の地域的特徴とその生活史的研究』平成3年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書、京都：京都女子大学。

森本豊富

2008「日本における移民研究の動向と展望——『移住研究』と『移民研究年報』の分析を中心に——」『移民研究年報』14、23－45。

山田史郎・北村暁夫・大津留厚・藤川隆男・柴田英樹・国本伊代

1998『移民』近代ヨーロッパの探究①、京都：ミネルヴァ書房。

A Historical General Survey of the Immigration Studies in Japan after the 1990s

Tomonori Ishikawa (University of the Ryukyus)

In recent years, immigration studies in Japan have been less significant and the number of publications so far has not flourished. On the other hand, “Dekasegi” immigrants, the Japanese descended citizens, Niseis and Sanseis have shown rapid increase. While those dekasegi people are descendants of the Issei immigrants, it is my ardent view that further fundamental studies in Latin American countries should be thoroughly comprehended to make clear characteristics of the Dekasegi communities in Japan. In this paper, monographs and articles dealing with generalized aspects of the immigrants published until 2008 from the late 1990s, were selected and which will be overviewed from historical view point. To do so, 3 monographs and 3 researchers on the world scale were selected. For in Japan, 9 researchers, 3 monographs, and 5 articles were selected for historical immigration studies. Then, I proposed 7 themes for migration studies in Japan. Finally, the “Archives Projects ”proposed by the committee of the Japanese Overseas Migration Museum, JICA Yokohama will be presented.

Keywords: World, Japan, Immigration, History of Immigration Studies, After the 1990s

在アメリカ日本語新聞と「ララ」 —シアトルの『北米報知』による日本救済報道 1946～1947—

水野剛也（東洋大学・准教授）

〈目次〉

1. 本論文の目的、意義、および方法
2. 『北米報知』に関する基本的事実
3. 『北米報知』による日本救済報道
4. 結論

キーワード：シアトル、日系アメリカ人、ララ、日本語新聞、『北米報知』、戦後復興、広報（パブリシティ）

筆の力、新聞の威力を決して軽視してはならない。されば先輩も、新聞記者は社会の木鐸なりと宣言したではないか……。

三太郎「新聞と大衆（二）」『北米報知』1947年3月19日。

日本語新聞は常に日本国内の動きを報道しており、移民社会内の情報紙、弁論・創作活動の公表の場であるとともに、日本人意識を喚起するオピニオン・リーダーとして機能していた。こうして言論活動は移民社会での一体感をつくりだしたのである。

坂口満宏¹

1. 本論文の目的、意義、および方法

本論文の主要テーマである「ララ」(LARA = Licensed Agencies for Relief in Asia・アジア救済公認団体、以後、ララ)とは、戦後のアジア(とくに日本と朝鮮)の復興を促進・援助したアメリカの慈善活動組織群のことである。第2次世界大戦の終結後、宗教団体・奉仕団体・労働団体など13の民間加盟団体からなるララを通して、飲食料・衣類・医薬品・雑貨など大量の物資が日本に寄贈された。それら物資は一般的に、「ララ救援物資」・「ララ物資」とよばれる²。

1945年夏の敗戦後、文字どおり焼け野原から再出発した日本は、ララに物質的、かつ精神的に大いに助けられた。1946年11月から1952年6月までつづいたララの救援活動では、総計458隻の輸送船が日本に物資を運び入れ、その総額は約1,100万ドル(当時の円に換算して400億円強ともいわれる)に及んだという。ララ物資の恩恵を受けた日本人は約1,400万人で、これは当時の日本の総人口の約15%を占めた³。

ところで、ララの日本救済活動には、海外に移り住んでいた日本人移民やその子孫(以後、日系人)が多大な貢献をしていた。この事実について調査した数少ない研究者の1人、飯野正子によれば、日本に供給されたララ救援物資の約20%は、北米・南米の日系人が集めたという。もう1人の希有なララ研究者である多々良紀夫によれば、主要公認団体の1つであるアメリカ・フレンズ(フレンド派)奉仕団(The American Friends Service Committee)が当初の数ヶ月間に集めた物資の約3分

の1は、日系人が提供したものであった⁴。

このような歴史的事実をふまえ本論文は、ララの活動を影で支えていた日系人にとっての指導機関であった日本語新聞に焦点を絞り、日本の救済に関する報道の質的な内容分析を試みる。より具体的には、シアトルで発行されていた週刊日本語新聞『北米報知』（英文題字は *The North American Post*）をとりあげ、同紙が日系人による戦後日本の救済運動をどのように報道していたかを、1946年6月5日の創刊号から1947年いっぱいまでの約1年半を時間枠として、紙面の質的な分析を通し、努めて実証的に明らかにする。

本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の3点をあげることができる。

第1は、先行研究でほとんど扱われていないシアトル周辺の日系人とララとの関係の解明に、あくまで新聞紙面の分析を通してではあるが、貢献できるということである。それがはたした功績の大きさにもかかわらず、ララの活動の実態、および日系人のララへの協力を体系的に検証した研究は多くない。まして、シアトル周辺の日系人による日本救済への取り組みに目をむけた先行研究は、皆無に近い。たとえば、日系人の貢献に光をあてた数少ない研究者である前述の飯野は、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルス、シカゴ、トロントなどの日系人の救援活動については論じているものの、シアトルのそれについてはほとんど触れていない。ララ公認団体が所蔵する一次史料を駆使してララの成立過程などを明らかにした多々良も、「ニューヨーク、サンフランシスコ、シカゴに関するかぎり、資料はかなり存在するが、そのほかの都市の日本救済グループについての資料は、ほんのわずかししか発見されなかった」と認め、シアトルの日系人についてはわずか1ページをさいて記述しているにすぎない。本論文は、この大きな研究の空白を埋める一助となりえる⁵。

第2に、日系人のマス・メディアとララとの関連・連携という研究課題に対しても、これまでまったく手つかずであったシアトルの『北米新報』を事例とすることで、新たな知見をつけ加えることができる。当時、日系人独自のマス・メディアとしてはほぼ唯一の存在であった日本語新聞が、日本救済の推進役として無視できない力を発揮していたことは、これまでも指摘されてきた。たとえば、田村紀雄は、1945年11月15日にニューヨークで創刊された『北米新報』（その後、『ニューヨーク日米』に改題）が、ララを通じた日本救済に関する「情報の伝達者、運動の組織者としての役割を果たしていた」と論じている。上坂冬子、多々良、飯野も、1946年5月18日にサンフランシスコで『日米時事』を創刊した浅野七之助が、戦後日本の救援活動に深く関わっていた事実について記述している。しかし、いずれの論者も、シアトルの日本語新聞にはまったく言及していない。そもそも、田村が指摘するように、「シアトル、タコマ、ポートランドなど、アメリカ西北部での日本語新聞の研究はサンフランシスコ、ロサンゼルス、ハワイなどに比して、これまで著しく遅れていた」。本論文は、これまで注目されてこなかったシアトルの『北米報知』をとりあげ、さらにどの先行研究よりも長期間にわたり、詳細に、かつ体系的な内容分析をおこなうことで、日系人のマス・メディアとララの日本救済運動との関係について新たな知見をもたらすことができる⁶。

関連して第3に、当時の日系人社会の指導機関であった日本語新聞を分析する本論文には、「広報活動」（パブリシティ＝publicity）という新たな視角からララ、および日系人による日本救援活動を照射する意義がある。いくら有意義な慈善活動も、それを社会の構成員に広く知らしめ、協力をよびかけることができなければ、つまり、有効な広報活動がなされなければ、十分な効果をあげることは難しい。実際に、前述の浅野がサンフランシスコで『日米時事』を発刊したのは、戦後の日系人の権利擁護と日本の救済運動を進展させるという具体的な目的があったからであり、創刊当初からララの活動に関する記事を多く掲載し、その重要性の周知に努めたという。シアトルでララの活動を支えていた日系人指導者も、以下で本論文が明らかにするように、より多くの人々から協力を

取りつけるために意識的に日本語新聞を活用し、新聞社の側も協力を惜しなかつた。日系人が積極的にララの運動を後援した背景には、単に善意・同情・愛郷心・ナショナリズムといった道義的・情緒的な要素だけでなく、新聞を通じた意識的な広報活動という実務的な要素も作用していた可能性が高い。当時、アメリカの日系人社会でもっとも有力な情報源、かつ指導機関の1つであった日本語新聞がララの日本救済に寄与した役割を広報の側面から裏づけることも、本論文の重要な意義である⁷。

なお、戦後のシアトルでは『北米報知』以外にも日系人むけの新聞が発刊されているが、いくつかの理由から、本論文の研究対象としては『北米報知』が最適であると結論づけられる。もっとも重要な点として、『北米報知』は戦後シアトルではじめて発行（1946年6月5日に創刊）された日本語新聞である。後発の準日刊『西北日報』（英文題字は *The Northwest Daily*）が発刊されたのは、それから約2年半後の1948年11月17日のことで、その時点ですでにララの救援活動が2年以上も進行してしまっている。しかも、『西北日報』はシアトルの日系人社会には定着できず、創刊から4年ももたず1952年9月12日号を最後に廃刊してしまった。他方、『北米報知』は本論文執筆時点（2009年2月）でも、紆余曲折を経ながら、なお発行継続中である。また、シアトルでは1947年1月1日から1955年3月30日まで *Northwest Times* という週2回刊の英字紙が発行されているが、これは英語のみで書かれた日本人移民の第二世代（以後、二世）むけの新聞である。同紙にも取りあげる価値はあろうが、ララの活動を積極的に支援したのが主として第一世代の日系人（以後、一世）であった事実を考えれば、本論文の研究対象として『北米報知』を上回るとはいえない。もちろん、『西北日報』や *Northwest Times* の報道内容を分析し、本論文の知見と比較検討することは、今後の重要な研究課題となりえる⁸。

もっとも、本論文だけで約6年間にわたるララの全活動期間中（1946年4月の発足から1952年6月まで）の『北米報知』を分析することはできないため、分析期間を1946年6月5日から1947年いっぱいまで、つまり、『北米報知』が創刊されてから約1年半に限定する。糸井輝子が指摘しているように、ララの日本救援活動が「実質的に動き出す」のが1946年5月で、最初のララ物資が日本に送りだされたのが同年11月であることを考えれば、『北米報知』の創刊日である6月5日は、分析期間の始点として好都合である。分析期間の終点を1947年いっぱいとしたのは、その期間がララの第1四半期にあたる、つまり、最初の主要な節目として位置づけられるからである。もちろん、救援活動がより本格化する1948年以降の紙面を分析する必要も大いにあるが、類似した先行研究が皆無である現状では、今後のさらなる研究につなげるためにも、さしあたり最初期段階について詳しく分析しておくことが先決である⁹。

分析対象とする記事は、敗戦により焦土と化した日本、および困窮生活を強いられた日本人の救済に関する、日本語で書かれた一般記事・コラム・社告等とする。既述のとおり、日本の救済に積極的に関与したのが主として日本生まれの一世たちであったことから、二世むけの英語欄は扱わないが、そもそも、本論文分析期間中の『北米報知』の英語欄はわずか1ページにすぎず、しかも日本の救援に関する記事はごくわずかしか掲載されなかつた事実を断っておく。また、広告も扱わない。分析手法は質的である。

最後に、記事の引用にあたっては、基本的に原文を尊重しているが、読みやすさ、わかりやすさを優先させ、現代では使われない用字やかな遣いの一部などを現代的なものに直すなど、適宜、手を加えてある。ただし、「見出し」に限っては、本文・註を含めて、原文のまま表記している。

2. 『北米報知』に関する基本的事実

『北米報知』の紙面分析をはじめの前に、本項では、創刊の経緯、発行形態・部数、日系人社会における役割など、同紙に関して知っておくべき基本的事実をкаいつまんで説明しておく。

「日本人は三人寄れば新聞雑誌を発行する」と書いたのは、海外における日本語出版物研究の先駆者の1人である蛭原八郎であるが、『北米報知』が発行されたのも、戦後シアトル周辺に日系人が一定数集まった結果としての、ごく自然ななりゆきであった。創刊号（1946年6月5日号）に掲載されている初代発行者・有馬純雄の「創刊のことば」によれば、戦後、内陸部の収容施設からシアトルに帰ってきた日系人の間から、お互いの情報を交換する「何か報道機関が、欲しいものだという声が挙げられてから既に半年にもなるので、それでは一つ週刊紙でも出して、各地の情報交換に便宜を与えたらば、と考えついた結果」として、『北米報知』が誕生したという¹⁰。

有馬は、日米開戦前のシアトルで日本語日刊紙『北米時事』（英文題字は *The North American Times*）を発行していた人物で、新しい新聞を発刊するには最適の人材であった。もっとも、新聞発刊の発案をしたのは有馬ではなく、生駒貞彦と前野邦三の2人であった。ちょうどそこに新聞事業の経験が豊富な有馬が帰ってきたため、有馬が責任者となり、創刊にこぎつけたという¹¹。

ところが有馬は、編集や雑務を含めた創刊準備をほぼ独力でこなしたため体調を崩し、創刊から1ヵ月もしないうちに発行者の地位を生駒貞彦にゆずってしまった。有馬は、3号目となる1946年6月19日号でこの事情を説明し、「生駒氏が、今後、発行兼編集人として、一切の責任を負って経営される事になりました」と報告している。その後、1947年いっぱいまでの本論文の分析期間中、生駒は『北米報知』の発行者でありつづけた¹²。

この時期の『北米報知』の基本的な発行形態を素描すると、日本語を主言語とし、タブロイド判の4～6ページ建てで、週刊で発行されていた。創刊号である1946年6月5日号から5ヵ月間ほどは日本語のみ4ページ建てであったが、読者および広告費の増加により、同年11月13日号から基本的に6ページ建てに拡充された。さらに、1947年1月1日号からは1ページの「英語欄」がもうけられた。英文題字は創刊当初より *The North American Post* である¹³。

発行部数を示す史料は入手できていないが、創刊1周年記念号（1947年7月30日号）に「西北部に在留する同胞一万五千を相手とする新聞としての本紙は、余りに小さく」と記されていることから、数千と推測できる。伊藤一男によれば、1947年末のシアトルの日系人人口は約4,700名であるから、同市外にも購読者がいたことを考慮しても、それ以上の部数があったとは考えにくい¹⁴。

もっとも、当時の日本語新聞の大きな特徴として、「定期購読者数」が必ずしも実際の「読者数」と一致しない点には留意すべきである。つまり、日本語の情報源そのものが非常に限られていたこともあり、発行部数の実数よりもはるかに多くの日系人に読まれていたのである。この特徴は、再定住期にあたる終戦直後のシアトルでは、なおさら顕著であったと考えられる。戦後しばらくシアトルで唯一の日本語新聞であった『北米報知』は、たとえ部数は多くなくとも、同市周辺、およびそれ以外の日系人社会に広く、深く浸透していたと考えられる。

とはいえ、経営は必ずしも良好でなく、一世の多くが日本語しか理解できない事情をくみ、一種の社会奉仕として新聞事業が営まれていた。この点について発行者の生駒は、「儲からぬ商売だからやらない、といって誰もやらないとなると、邦字新聞を唯一の報道機関としている一世は、どうして世界の動きを知り、同胞社会のニュースを知り得るであろうかを考えますと、新聞も又、われわれ社会には必要なものだけということになります。儲かる、儲からないは別として」と説明している¹⁵。

このように、なかば奉仕の精神で発行されていた『北米報知』は、アメリカ本土西北部で唯一の日本語新聞として、創刊直後より、現地の日系人社会全体を指導・牽引する存在として影響力を発揮した。生駒自身、日系人社会でリーダーシップを発揮するという使命を明確に意識しており、『北米報知』は「西北部に於ける唯一の報道機関として、公平なる立場にあって、社会を指導する任務と責任を持ちたいと思うのであります」と明言している。もちろん、読者も同紙に指導的役割を期待していた。あるコラムニストは、新聞などマス・メディアは「文化的に見て報道機関であると同時に、社会教育機関である」と論じている。したがって、ララを通じた戦後日本の救済に関する一連の報道も、日系人社会の指導機関としての同紙の役割を前提に理解する必要がある¹⁶。

3. 『北米報知』による日本救済報道

本項では、1946年6月5日の創刊から1947年いっぱいまでに『北米報知』が掲載した、ララを通じた戦後日本の救済に関する報道を、いくつかのテーマにそって分析する。

最初の日本救済報道

本論文分析期間中の『北米報知』は、敗戦国となった日本の救済を訴える趣旨の記事を、創刊当初より定期的、かつ頻繁に掲載していた。元旦号や創刊1周年記念号などの節目では必ず、日本を援助することの必要性を論じる記事やコラムを掲載しており、総じて、同紙はララの活動を積極的に促進・支援する論調に徹していた。

その後の積極的な報道ぶりを象徴するように、『北米報知』は早くも3号目の1946年6月19日号で、日本救済運動について報じている。創刊以来、はじめての報道であるためか、比較的に大きな扱いで、第3面に3本の記事を掲載している。扱いの大きい順に、次のような見出しがつけられている。

- ・「日本難民へ救済物資發送許可 配給機關設立のため二名の代表が渡日」(2段記事)
- ・「日本へ小包郵便 薬品と食料品ならば一ヶ月に一回だけ許可」(2段記事)
- ・「ポ[ートランド]市の日本人が難民救済へ合流」(1段記事)

「ララ」については最初の記事が明確に「LARA」と記述しており、ここからも『北米報知』にとってララの活動が当初から重要な題材であったことがわかる。同記事は、1946年7月下旬ころには日本への物資輸送がはじまるという予測(実際には11月に実現)を示した上で、「シアトルの日本難民救済本部では募集に拍車をかける事になった」と伝えている。実際に、この記事が掲載された6月中旬は、ララがようやく活動をはじめた時期にあたり、日系人の参加・協力もこのころから本格化していった。『北米報知』の日本救済報道は、シアトル周辺の日系人のララへの参加・協力の高まりと同時に進行していたといえる¹⁷。

上の記事が示唆しているように、この時点ですでにシアトル周辺の日系人は組織的に日本救済にのりだしていた。組織の名称は「西北部日本難民救済会」(以後、救済会)で、上述の1段記事「ポ市の日本人が難民救済へ合流」とあわせて読めば、その本部が近く物資の荷造りに着手する予定であること、オレゴン州ポートランドの日系人も救済会に加わり、寄付金や物資の募集に協力していたこと、などがわかる。シアトルの救済会は、シアトルだけでなく西北部全体の日系人の救済活動をとりまとめる要所であった¹⁸。

なお、救済会の名称が示しているように、当時の日系人社会の一般的認識では、戦後日本の日本人は一種の「難民」であった。『北米報知』の記事中にも、「難民」という言葉が頻出する。この点については後述するが、『北米報知』の日本救済報道を理解する上で「難民」は重要なキーワードの1つである。

救済会の活動内容の詳細

救済会の活動内容は、『北米報知』がララの日本救済活動について報道する際の大きな柱の1つであった。『北米報知』にとって、ララについて報道することは、少なくとも初期の段階においては、第一義的に地元シアトルの救援会の動向について詳しく報道することを意味していた。

同紙がもっとも頻繁に、かつ定期的に伝えていた事項の1つは、義捐金の集まり具合であった。救済会は生活物資等のとりまとめだけでなく、義捐金の募集もしていた。日系人はこのよびかけに熱心に応じ、シアトル以外の地域からの寄付も含め、1946年8月7日号では5,000ドル、8月28日号では6,600ドル、9月11日号では7,000ドル、そして1947年元日号では総額が18,000ドルを突破したことが伝えられている。また、1946年12月25日号では、シカゴの救済会が10,000ドル以上を集めたことが報道されている¹⁹。

義捐金の集積情報は、数字により具体的に成果を実感できるため、救済活動の進捗状況の報告という意味あいはいもとより、救済会へのさらなる協力、およびその競争をうながすためにも、ニュース価値が高かったと考えられる。類似した報道として、一定額以上を寄付した個人名を一覧で掲載することも、たびたびあった。

その他、物資を積んだ船が予定どおり日本へ出航したか、無事に日本に到着したか、物資は適切に分配されたかなどについても、『北米報知』は逐一、報道している。こうした情報を提供しつづけることが、ララや救済会の活動に協力していた日系人を安心させ、救援活動の手応えを感じさせ、ひいてはさらなる協力につながっていたと思われる²⁰。

救済会の広報活動への協力

救援活動が進展するにしたがい、救済会は『北米報知』と連携を深めることで、日系人社会にむけた広報活動をより本格的に展開するようになった。他の日系人に広く救済運動の存在や意義を知らせ、協力を仰ぐためには、彼らが日常的に接するマス・メディアである日本語新聞に情報を直接提供するの、もっとも効率的な方法であった。

シアトルの救済会が広報活動のために『北米報知』を活用していたことは、1947年1月15日号の第1面の記事から確認できる。記事によれば、1月13日に開催された救済会の実行委員会は、「新聞紙を通じて一般への報告及感謝」をすることを決議しており、その後、救済会への協力をよびかける謹告などが『北米報知』に掲載されるようになっていく。もちろん、それ以前からも、活動内容など各種の情報は『北米報知』に日常的に提供されていた²¹。

救済会は、謹告を掲載したり新聞記事となる情報を提供するだけでなく、『北米報知』の配達システムを利用して、義捐金を募る文書等を読者に配布してもいた。1947年3月26日に開催された救済委員会は、「第二回義捐金募集趣意書は、北米報知新聞に挿入、一般に配布する」ことを決議している。現在、日米の新聞で一般的に見られる折り込み広告のように、寄付を募る文書を新聞と一緒に配っていたわけである。週刊とはいえ、定期的、かつ網羅的に購読者に接触する新聞社の流通経路は、救済会にとって協力をよびかける上できわめて効率的なコミュニケーション・チャンネルであった。なお、この第2回目の義捐金募集に際しては、読者に協力を要請する救援会の「謹告」も

複数回、紙面に掲載されている。こうした努力の結果、多々良によれば、1947年8月ころまでに8,000ドルの寄付金が新たに集まったという²²。

シアトルの救済会以外の団体も、『北米報知』をはじめ日本語新聞に情報を提供することで、彼らの活動の内容や意義を日系人に訴えていた。たとえば、シカゴで組織された救済会の幹部は、10,000ドルの寄付金を集めた際に今後の方針として、「会計事務の整理につき次第、逐次その報告を邦字新聞に掲載すること」を決めている。同じく、ララの有力な公認団体の1つであったアメリカ・フレンズ奉仕団も、本拠地のフィラデルフィアから頻繁に『北米報知』に書簡や報告書やプレス・リリースを送付し、その内容が記事になっている。同奉仕団が北米・南米の日系人の新聞に情報を提供していたことは、多々良の著書に採録されている奉仕団の内部文書からも裏づけられる²³。

『北米報知』側の協力・参加

新聞社の側も、救済会やララに加わる慈善活動団体への協力は惜しまなかった。そもそも、発行者の生駒貞彦は、「皆様の報道機関であります、遠慮なく利用して下さる様に御願い致します」と明言し、自由な情報交換・発表の場として『北米報知』の紙面を公衆に提供する方針を表明していた。救済会は、『北米報知』を文字どおり「遠慮なく利用」することで、その活動を内外にアピールしていたのである²⁴。

そればかりか、『北米報知』の関係者のなかには、日本救済の広報活動に第三者として協力するだけでなく、直接的に救済会に参加する人々も少なからずいた。日本語新聞は日系人社会のまとめ役であり、新聞関係者が地域のリーダーを兼務すること（その逆も同じ）はめずらしくなかった。救済会の実行委員として活躍した三原源治はその一人で、彼は『北米報知』の社友でもあった。三原は、シアトルで集めた物資等を日本に届けるため、たびたびサンフランシスコに派遣されているが、その際に現地から記事を投稿することもあった。さらに、発行者である生駒も、1947年1月27日の救済委員会で委員に選出されており、同年4月には社員の岡田義盛や社友の橋口長策も第2回義捐金募集委員に就任している。日系人社会の指導機関として、『北米報知』は単に報道を通してのみならず、当事者としても日本の救済運動に協力・参加していたのである²⁵。

娯楽行事の告知・宣伝

新聞を使った広報活動について付言すると、シアトルの救済会は、映画上映会など娯楽行事を通して義捐金の募集運動を展開していたが、『北米報知』はそうした行事の告知・宣伝にも協力していた。たとえば、救済会の実行委員会は1947年1月13日の会合で「映画の夕開催の件」について討議し、次回1月23日の委員会で「第二回救済運動を開始するに当り活動写真[を]上映[する]件」を決議している。その後、2月19日には「救済醜金の映画会は、募集前に開催すること」を決定している。本論文にとって重要なのは、これらがすべて『北米報知』紙上で報じられ、さらに4月9日号において、映画上映会を4月18日・20日に開催する旨を記した「謹告」が掲載されていることである。前述のとおり、実行委員会には『北米報知』の社友が複数含まれていた。つまり、義捐金集めを目的とした娯楽行事を企画し、かつそれを告知・宣伝することによっても、『北米報知』はララ、および救済会の活動に貢献していたのである²⁶。

既存の文献でも指摘されているように、娯楽行事を通じた寄付金集めは、他の地域の日系人社会でも広くおこなわれていた。たとえば、サンフランシスコの『日米時事』も「映画の夕」を主催しており、ニューヨーク在住の日系人たちは「祖国戦災民救援演芸会」等を催して、資金集めをしていた。ブラジルでは、バザー、音楽会、ダンス・パーティー、福引き等が開かれていたという。沖

縄の救済運動が活発であったハワイの日系人社会では、沖縄独自の文化的催しが数多く実施されていた。これらが、偶然の一致か、何らかの相互の関連があるのか、もしくは必然的な帰結か、といった問題は、今後のさらなる研究の蓄積と比較検討により解明される必要がある²⁷。

「難民」と化した日本の「同胞」

さて、日系人が熱心にララの活動を支援した理由はいくつもあったであろうが、少なくとも、生まれ故郷の仲間を救いたいという「同胞」意識が強く働いていたことは間違いない。この点について飯野は、「日系人のなかには、敗戦によって荒廃した日本で困窮の極致にあった人々を『同胞』とみて、彼らを救援する道を探した人々もいた」と指摘している²⁸。

同じことは、『北米報知』にもあてはまる。日本の救済について報じる際に、「同胞」・「同胞愛」という表現を頻繁に使っているのである。ごく一例として、1946年8月7日号の記事は、義捐金が5,000ドル集まったことについて、「同胞愛の発露として好成績」と評価している。同じく、同年12月25日号の第1面の記事は、シアトルの救済会が「同胞愛の結晶たる義捐金一万八千余弗の食料を購入した」と伝えており、同日号の別の記事にも「溢るゝ同胞愛」という見出しがつけられている。日系人がララを通じた日本の救済に熱心だった背景には、「同胞を助けたい」という思いが強く働いており、『北米報知』もそのことを折に触れて強調していたわけである²⁹。

しかし、『北米報知』の一連の報道を注意深く観察すると、当時の日系人の多くが、日本にいる人々を「同胞」と見るだけでなく、意識的に「難民」と認識していたことがわかってくる。象徴的な例として、シアトルの日系人が組織した「西北部日本難民救済会」という名称には、「同胞」ではなく「難民」が使われている。1946年6月26日号から掲載されはじめた救済会の告知文でも、「餓死線上を彷徨する日本の難民へ、温き救援の手を差し延ばしましょう」と、あくまで「難民」が使われている。こうした認識と呼応するように、『北米報知』の報道でも、「同胞」よりむしろ「難民」という表現のほうが多く使用されている³⁰。

日本人「難民」の窮状の訴え

日本人を「難民」と位置づける報道姿勢を、単なる文章表現上の些事、もしくは事実の客観的な反映として片づけるのは早計である。というのも、救済会、およびララの広報活動をになっていた『北米報知』が、「難民」という表現を意図的・選択的に用いていた可能性があるからである。日系人のなかには、日本の「同胞」のよび方をめぐり異なる意見があったようで、たとえば、ワシントン州スポーケンの救済会は、その名称をわざわざ日本「戦災者」救済会に変更している。他方、シアトルの救済会も『北米報知』も、一貫して「難民」という呼称を使いつづけている。その理由の1つとして、「難民」と表現したほうが日本人の窮状をより強く印象づけることができ、その分、救済活動への賛同・協力を得やすかったことが考えられる。換言すれば、日本人を「難民」として位置づける言説そのものが、ララ、および救済会の広報活動の一環であったと考えられるのである³¹。

実際に、日本人の現状に関する『北米報知』の報道を見ると、彼らが文字どおり「難民」のような苦しい生活環境にあることを、ことさらに強調する記事が圧倒的に多い。たとえば、1946年9月18日号の第1面に掲載されている記事は、日本からアメリカに戻ってきた二世へのインタビューであるが、「食料困難は、とてもひどう御座います。本当に何でも、砂糖でも、塩でも、マッチの様な物でも、何でも一時も早く送って上げて下さい」と、日本人がいかに悲惨な状態にあるかを印象づける内容である。この二世は、つづけて次のように語っている。「八月四日に乗船しましたが、白いお米は見ませんでした。常食はおいも。十日に一度位、一握り位の雑種のお米が配給になりました。

それも、買える人だけ。そう、[アメリカへ] 来る少し前でした。アメリカから来た白いメリケン粉が、少しずつ配給になりました」³²。

同じ1946年9月18日号に掲載されている、廻航中にアメリカに立ち寄った日本船の船長の談話も似たような内容で、日本救済活動への参加を訴えている。「祖国の都市は廢墟と化し、国民は失望、食糧難に呻吟し [ています。] 一つでも多く、早く、[物資を] 日本へ送って下さい」。この記事を書いた記者は、「在米の同胞皆様の友情を感謝致しますと、感慨無量の面持ちで、別れの握手に船長の手は震えていた」とつけ加えている³³。

インタビュー記事に加え、在日本の知人等から送られてきた書簡を紹介することで、日本の「難民」の窮状を訴える記事も多い。その1つ、1947年1月8日号の記事は、栃木県在住の人物がシアトルの日系人にあてた書簡をもとに、日本における物価の高騰ぶりを同情的に伝えている。この記事を書いた記者は、主要な生活品の値段を示した上で、こう書いている。「この値段表を一瞥しますと、如何に故国民が地獄の苦しみをしているかは容易に想像することが出来ると思います」。なお、この隣には救済会に関する記事が掲載されている。「難民」の苦境に同情する読者を救済活動への参加にむかわせようという、編集上の意図が強うかがえる³⁴。

日本の「難民」の苦しさを伝える記事は、ときに、絶望的になりがちであった。かつてシアトルに在住し、1940年に日本に帰国した在東京の人物からの手紙は、「日本が元のようにするには、百年経ってもあり得ないことです。……国内は人間が蟻のようにうごめいている。この一事だけでも、日本内では何年たっても全国民が食う食物がない、ということは明瞭です」と、きわめて悲観的な観測を示している。1947年7月2日号に掲載された別の手紙も、「日本は実に渾沌たる将来を迎えている。その渾沌たる中には、蛍光ほどの曙光もない。それが近き将来に於いて閃めきだすであろうという見込みもない。……ここ十年、二十年経ったところで、運よくて日本人は辛じて糊口を凌ぐだけだ」と、日本の再建の可能性に絶望している³⁵。

なお、日本人「難民」に関するこうした情報なり見解の多くは、シアトル周辺の日系人むけに『北米報知』が独自に集め、報道したものであり、その意味でも読者に訴える力が強かったようである。創刊1周年号に掲載されているシカゴの読者からの投書は、「特に日本便りは、他紙の日本新聞の切抜でなく、皆な相当の人々の創作通信である事は喜ばしい限りであります」と、『北米報知』の報道の独自性を高く評価している。当時、日本語で書かれたマス・メディアは全米規模でも非常に限られていた。日本の現状について少しでも多くの情報を得たい日系人は、複数の日本語新聞を併読していたと思われる³⁶。

アメリカ・フレンズ奉仕団による「難民」救済の訴え

日本人は救済を必要とする「難民」であるとする『北米報知』の一連の言説は、現地・日本で救済活動に直接関わっていたアメリカ・フレンズ奉仕団からの情報が加わることで、さらに補強された。既述のとおり、ララのなかで最有力の公認団体の1つであるフレンズ奉仕団は、しばしば『北米報知』など日系人のマス・メディアに情報を提供し、それが記事になることで広報活動が効率的に機能していた。

日本に代表者を派遣していたフレンズ奉仕団からの情報にもとづく記事は、救済活動の最前線から伝えられるだけあり、どのような人々が「難民」化しているのか、彼らがもっとも必要としている物資は何か、などを具体的に示しており、広報としてより実効的なメッセージを含んでいた。たとえば、1946年10月30日号の第1面の記事は、フレンズ奉仕団から同紙にあてられた書簡を紹介する形で、「[長]年に亘る戦争のために、結核病患者の治療など全く放任されているような訳で、

……唯死を待っているという悲惨な状態である」と伝え、病人や幼児・子供の救済が最優先であると報じている。同様に、1947年1月29日号に掲載されているのは、東京で活動を指揮しているフレンズ奉仕団のエスター・B・ローズ (Esther B. Rhoads) からの手紙で、「日本で配給のないものは砂糖です。少しでも砂糖が送って頂けたら、どんなにか日本の皆様方に喜ばれることであろうと思います」と訴えている。現地の責任者らしく、ローズの訴えは具体的で、「ラ、ラ、救済団では、一万人の孤児と三千人の肺病患者の御世話を引受けました関係上、特に多量のミルクの必要に迫られております。……現在の日本では、救済のため送らるる物資はいくらあっても足りません」と書き送っている。ローズは、ララの代表者として1946年6月に来日し、以後、救済活動の実務全般において中心的役割をはたした人物である³⁷。

初回の物資が日本に届き、1947年春に救済会が第2回目の義捐金募集運動を開始した直後にも、日本在住のフレンズ奉仕団の責任者(ローズと思われる)からの報告として、日本人「難民」がよりいっそう困窮化する危険性を指摘する記事が掲載されている。1947年4月23日号の記事がそれで、「本年の食糧難は昨年よりもズット悪化し、供給の点においても、値段の点においても、国民は非常なる困難に陥る」と報じている。前述のとおり、ララの活動を主導していた人々の側にも、こうした情報を積極的に日本語新聞に提供することで、さらなる支援・協力をとりつけたいという意図があった。ララの指導者と新聞社のめざす方向が一致するなかで、日本人を「難民」と位置づけるこれらの記事が多数、掲載されていたと考えられる³⁸。

その他の「難民」報道

これまで分析した記事はすべて、日本を直接見聞している人物や団体を情報源としていたが、英字新聞の記事を訳出するというやや間接的な方法により、日本人「難民」の苦境、および救済運動の応援をよびかける記事もあった。1946年10月9日号に掲載された「日本人を救へ 食料飢饉は民主の敵」という見出しの記事はその1つで、広島原爆被害を克明に伝えたジョン・ハーシー (John Hersey) の記事を読んだ人ならば、「日本国民が如何に救済を必要としているかを説く必要もないであろう」という書き出しで、「米国にして、日本の平和再建を念願するならば、戦災のために苦しみ喘ぐ日本国民に食料を与えねばならない」と力説している。これはサンフランシスコの英字新聞に掲載された論説であった。つい先ごろまで「敵国」であった日本を救済することに関して、アメリカの主要なマス・メディアを引用することで、その正当性を補強する意味合いがあったとも考えられる³⁹。

なお、上の論説で参照されているジョン・ハーシーの記事とは、週刊誌『ニューヨーカー』(New Yorker) の1946年8月31日号に掲載された「ヒロシマ」(Hiroshima) というルポタージュのことで、広島原爆の惨状をアメリカ社会にはじめて詳しく伝えた報道として、当時はもちろん、現在でも高く評価されている。掲載直後より、「ヒロシマ」は全米で話題となり、同年中に単行本化され、1949年には日本語訳も出版されている。上の論説が英字紙に掲載され、さらに『北米報知』により訳出されたのは、ハーシーの報告を契機として被爆した日本人に同情が集まっている時期であった。なお、1999年、ニューヨーク大学ジャーナリズム学部主催のプロジェクトがまとめた、20世紀における「ジャーナリズムの100の偉業」(Top 100 Works of Journalism) では、ハーシーの「ヒロシマ」が第1位に選出されている⁴⁰。

「難民」報道と関連して、戦後日本の社会文化的・政治的な側面に光をあてた記事も多いが、それらのほとんどは日本・日本人の荒廃ぶりを強調する内容であった。こうした報道は、物質面だけでなく、社会的・精神的な面でも日本人が「難民」化していたことを印象づけていたかもしれない。

その一例として、1947年1月19日号からはじまった「東京通信」というシリーズがある。筆者は在東京の武田麟太郎という人物で、連載3回目となる3月5日号の書きだしは、次のようなものである。「高架線の電車の窓から見ると、何かの暴動かとびっくりするほど、多数の人たちが真黒にうごめいて、食い物漁りをしている」⁴¹。

さらに、日常的な報道・論評とは別に、文芸欄にも日本人「難民」の苦境を題材とする作品が多く掲載されている。たとえば、次に示すのは、1947年元旦号で一等・二等に選ばれた「年頭歌」である。

- 一等 遠く居て祖國の動き極めがたく年明けにしが思ふ切なり 野村鷹聲
二等 飢餓迫る故國思ほひつつましき元旦料理も心足らへり 富田ゆかり

これら以外にも、戦争に敗れた日本・日本人に同情する俳句や川柳は多く掲載されているが、上の歌の選者も評しているように、それらは「現下の祖国に対する海外居住者の心境をそのまま詠み上げ」ており、報道・論評だけでなく文芸においても「片時も忘れ難い敗戦祖国 [が] いつも背景をなしている」のであった⁴²。

当時の日系人の大半がこうした記事を通して日本の情報を得ていたことを考えれば、あらゆる面で日本人が「難民」と化していることを印象づける『北米報知』の報道は、彼らの愛郷心・同情心を刺激し、その結果として、日本救済運動への参加・協力をさらに勢いづかせる要因になっていたと考えられる。『北米報知』のある記者は、「日本人なら誰でも信じたくない祖国の状態を、映画で、紙上で、ニュースで知り、夢の様に感じてこの頃」と、その心情を吐露しているが、ほかならぬ『北米報知』の報道が、そうした感情を喚起させる性質のものであった。補足として、この記者も示唆しているように、既述の映画上映会などは、文字による報道に加えて、日本の惨状を視覚的にも印象づける役割をはたしていたと考えられる⁴³。

日系人の境遇の相対化

日系人自身の生活もけっして楽ではなかったが、そんな彼らを救済活動に参加・協力させるために『北米報知』が多用したのは、日系人も苦しいが、「難民」と化した日本人の人々と比較すればはるかに恵まれている、という論法であった。終戦直後の日系人の大多数は、たとえ居住国・アメリカが勝利したにせよ、強制立ち退き・収容を受けたばかりで、差別・偏見も根強く、職や住居など生活の基盤すら十分に確保できていなかった。飯野正子が指摘しているように、多くの日系人にとって、「戦後は、移民してきたときと同じ、無からの出発」であった。『北米報知』の「創刊のことば」を借りれば、日本人移民社会はなお「再建途上」であった。彼ら自身が日々の生活に奔走しているなかで、なお日本救済への協力をよびかけるには、それでも日系人のほうがはるかに恵まれていると訴えることが必要、かつ有効であったと考えられる⁴⁴。

日系人の苦境を日本人のそれと比較して論じる報道は、1947年に入ってから頻繁に現出するようになった。その嚆矢は、1947年元旦号の第1面に掲載された、「新春を迎えて」と題する社説に準じたコラムである。ここで展開されている主張は、戦争の被害を受けたのは日系人も同じであるが、原爆投下をはじめ直接的な戦禍にさらされ、その上に戦争に敗れた日本人に比べれば「物の数ではない」、というものであった。

アメリカに住む我々は、直接の戦禍を受けず、故国の惨状を知ることは出来ないけれど、我々の想像以上であったであろうことが思われる。今や原子爆弾に見舞われた我等の祖国は、国民一致団結して雄々しくも立ち上ろうとしているこの秋にあって、我々は過去四年の鉄柵生活の苦しみからようやく解放せられたとはいえ、祖国々民の苦しみに較れば物の数ではない。よろしく故国罹災民の苦しみを分けて、これを救助することが、目下の急務ではあるまいか⁴⁵。

同日号に掲載された別の2つのコラムも、アメリカの日系人が相対的に恵まれた境遇にあること、ゆえに日本を援助する責務があることを強調している。その1つ、「新年の所感」と題する一世のコラムは、日本の現状を概観した上で、「米国にある我々は余りに恵まれ過ぎて勿体ない。故に我々は、祖国の為に御恩返しはこの時であると痛切に感ずるのである」とのべている⁴⁶。

その半年あまり後、『北米報知』が創刊1周年を迎えた際にも(1947年7月30日号)、日系人の生活状況を日本人「難民」のそれと比較して論じることで、救済活動への参加をうながす言説が見られる。「一周年記念號に題す」という社説に準じるコラムがそれで、まず日系人が体験した苦難について、「不幸にして吾等〔在米〕日本人は、敵国外人として隔離され、戦時中の好景気の恩沢に浴することも出来なかった」とのべた上で、しかし、日本の人々が直面している問題はそれどころではないと、次のように指摘している。

今日のアメリカは、何ととっても世界の天国である。働きに職あり、食うに食あり、衣するに服ありという有様で、働きさえすればむしろ法外というべき労銀が得られるのである。いやしくも健ならんか大に働き、大に儲けて、余れるところを祖国の難民救済の資に供することは、極めて肝要なることであろう。これぞ、我等在米同胞に課せられた天の使命ではなかろうか。言うまでもなく、祖国の難を救い得るものは、我等在米同胞以外には断じてないのである。

ここからは、自分たち以上に苦しんでいる日本の「難民」への同情心、そして、比較的豊かなアメリカにいる日系人こそ彼らを救うべきだという使命感がうかがえる。さらに見方を変えれば、日系人の側に日本人に対する相対的な優位性の意識が芽生えていたことを示唆しているとも考えられる⁴⁷。

成果を実感させる日本からの礼状

日系人のほうが相対的に余裕があると論じる一方、自身の生活を切り詰めた献身的な善意が実際に日本人「難民」を助けているという事実を示すことによっても、『北米報知』は救済活動への参加・協力を促進させようとしていた。前者が「自分たちのほうが多少は恵まれているのだから」という、やや消極的な説得であったとすれば、後者は救援活動の手応えを感じさせるという意味で、より積極的な励ましであったといえる。

救済会、およびララの活動が実際に成果をあげていることは、主として物資を受けとった日本の「難民」からの礼状を掲載するという形で伝えられた。日本からの感謝の手紙がはじめて紙面に登場したのは1947年2月26日号で、東京都杉並区の少年がララ物資にいか感激したかを、次のように書き送っている。

殊に牛肉や、ソーセージ等の缶詰類は、数年振りで頂いたためか、私は夢の国の御馳走の様に思われて、嬉し涙で食べました。……日本の冬は寒さが厳しう御座います。今、銀白の雪がちらち

らと降っていますが、タキものがありません。でも、沢山な着物をアメリカの皆様から戴いた私達は、本当に幸福です。

この手紙は東京の救済本部からシアトルへ転送されてきたもので、『北米報知』はその全文を載せている⁴⁸。

その後も、『北米報知』は定期的、かつ頻繁に同種の礼状を掲載し、日系人の救援活動が確かに役立っていることを読者に伝えつづけた。1947年3月5日号は、「敗戦国の暗い世相に喘ぐ私共に、明るい光を与えて下さる皆様を、天使の如く思っています」と感謝する手紙を、さらに3月26日号は、第1回目のララ物資に対する2通の礼状を掲載している。これら日本の一般市民からの礼状は、「難民」当事者の言葉で伝えられる分、送った物資や義捐金が十分な効果をあげていることを強く印象づけることができ、その結果、救済活動に参加・協力することの動機づけを強めていたと考えられる⁴⁹。

実際に物資を受けとった本人だけでなく、物資の分配にあっていた「ララ中央委員会」の堀内謙介委員長からの礼状も、1947年4月9日号と6月25日号の2度にわたり掲載されている。堀内の礼状について留意すべきは、他の一般の日本人受益者が一様に「アメリカの皆様」に感謝しているのに対し、堀内がほかならぬ「日系人」に礼をのべている点である。堀内は最初の礼状で、「同胞各位の御厚意は、故国にある人々の心より感謝いたすところであります」として、「同胞」である日系人にむけて謝意を伝えている。2度目の手紙でも、「在米同胞各位が崇高なる精神より、ララを通じ故国の困窮者のため多額の救援物資を贈られつつありますことは、我全国民の感激に堪えないところであります」と、日本国民を代表して日系人に感謝している。堀内は元外務次官で、その後、日米開戦の前年まで駐米大使を務めていた人物であるが、日本側の責任者が名指しで「日系人」に感謝している事実を示すことで、救済活動に協力した日系人の達成感・意欲を高めていたと思われる⁵⁰。

なお、「ララ中央委員会」の主要な役割の1つに、アメリカにおいてララの認知を向上させることがあったが、『北米報知』に掲載された堀内の礼状も、そうした広報活動の一環であった可能性が高い。ララ中央委員会の広報機能については、日本政府がララの母体である「アクヴァフス」(ACVAFS=American Council of Voluntary Agencies for Foreign Service, Inc.・海外事業運営篤志団アメリカ協議会)に送付した文書から裏づけられる。すなわち、「ララ救援物資受領・分配・配分・管理に関する日本政府の計画」と題されたその英文文書は、ララ中央委員会の機能として、次の項目をあげている。「アメリカ国内で、ララに対する国民の関心を高めるための広報活動に使用する適当な資料を……ララ救援公認団体へ発送すること」。ララ中央委員会がこの文書どおりに機能していたとすれば、堀内委員長の礼状はまずララの公認団体に送付され、その団体を經由して『北米報知』にもたらされたことになる。いずれにせよ、ララの活動全体において広報が重視されており、『北米報知』がその一翼をになっていたことは疑いない⁵¹。

若干の批判・懸念の表明

日本の救済活動を支援・促進する論調ではほぼ一色だった『北米報知』であるが、その成果がある程度判明してくる1947年中頃になると、ごくまれにはあるが、それまでとは異なるやや批判的な言説を見せるようになってきた。

1947年5月14日号のコラムはその一例で、一世のリーダーたちが日本の救済に熱中するあまり、自分たち自身の問題を放置していると強く批判する内容である。「春秋郎」というペン・ネームの筆

者によれば、現在、アメリカ在住の日系人にとって「最重要問題は立退賠償問題と帰化権獲得問題の解決」であった。にもかかわらず、シアトル周辺の一世指導者は、本来優先されるべきこれらの問題に十分な注意を払っていない。この点を、筆者は次のように非難している。

元の日会 [日本人会] の首脳者諸氏 [は]、現在、日本難民救済運動には寝食を忘れて努力して居られるが、[立ち退き賠償と帰化権問題] も決して等閑に附さるべきではない。人を助ける事は、自分が助かってから始めて出来る問題である。即ち、自分等の上にかかって居る問題を先に解決しなければならないのである⁵²。

この筆者はさらに、関東大震災（1923年9月）の際にアメリカから日本に送った金品が行方不明になったり転売されたりした事例を引きあいだし、ララを通じた救済活動の実効性について次のように疑問を呈している。「個人が送る救済小包郵便の中の品物が紛失する様な時節柄で、日本全体の難民救済が果して円滑に行われるか否かさえ不明である折柄に於いておやである」。実際に、ララ物資とは別に日系人が個人的に送った物品が無事に届かなかった事例は多く、後述するように、『北米報知』もこの問題について報道している⁵³。

さらに、日系人が自身の生活を犠牲にして集めた物資等が、日本では単に「アメリカ人」（白人）からの贈り物と認識されている、という懸念が表明されることもあった。たとえば、1947年11月26日号は、前内務大臣・植原悦二郎が在米の旧友にあてた書簡を掲載しているが、そのなかで植原はララ物資について、「一般 [の日本人] は米国人の厚意とのみ諒解しているように思われ」と指摘している。このことを受けて『北米報知』の記者も、「従来、LARAを通じて日本に送られた同胞からの救済品は、日本では米国人の厚意によるものとのみ了解されていたようである」と解説を付している。実際に、『北米報知』が掲載した日本からの礼状のほとんどは、「在米日本人」ではなく「アメリカの皆様」にあてられていたし、子どもたちのなかにはサンタ・クロースからのプレゼントと勘違いして、「ララおじさん」に礼状を書くものも多かった⁵⁴。

戦争に敗れた日本人を「同胞」と思い、自己犠牲もいとわず日本の救済に尽力していた日系人からすれば、彼らの献身が日本人に正確に伝わっていないとすれば、確かに由々しき問題であった。もちろん、その点を指摘する植原は日系人に個別に感謝をのべているが、ララの活動を全面的に支援する『北米報知』にとっては、こうした書簡を掲載する配慮は、今後も救援運動を維持・発展させていくために不可欠であったと考えられる⁵⁵。

もう1つ、厳密にはララ物資と区別されるべき問題であるが、前述のとおり、個人が送る小包が適切に届いていないという問題について説明する記事もある。1947年12月27日号の記事がそれで、とくに同年9月以降、個人が送る小包の郵送が遅延・停滞しているという苦情が増加し、救済会が東京に問いあわせて得た回答が掲載されている。それによれば、小包の検査は横浜だけで実施され、しかも係員が慣れていなかったため混乱している、ということであった。しかし、一部に盗難や紛失があったことも事実で、この記事は、日本政府・通信省は非を認め、以後、一層の慎重を期すことを約束している、とも報じている。こうした報道も、個人的な物資輸送を含めた、日系人による日本救済を減退させないための配慮と位置づけられる⁵⁶。

ただし、留意すべきは、上で紹介したいずれの批判・懸念も、ララによる日本救済活動、およびそれに対する日系人の協力の意義を根本的に否定するものではなく、その意味では、救済運動を推進する『北米報知』の報道枠組から逸脱しているわけではない、ということである。それらは、運動への協力を基本的に是とした上で、それをめぐり生じている周辺的な問題を指摘しているのであり、日本

の救済を阻害する要因を指摘し、除去するという意味では、むしろ建設的な批判ととらえられる。実際に、そうした言説はララの活動の効果が伝えられてからしばらく経った1947年中頃になり、ようやく掲載されはじめている。ある程度の成果が実感できた段階で、現実にある批判・懸念を隠さずに報じることで、逆に救済運動の正当性や意義を補強する結果につながっていたとも考えられる。

4. 結論

本論文はこれまで、戦後シアトルで創刊された日本語新聞『北米報知』を事例として、西北部の日系人社会の指導機関として同紙がララの日本救済活動を全面的に支援・促進していたことを、創刊から約1年半の紙面の質的分析を通して明らかにしてきた。本論文により、先行研究ではほとんど扱われてこなかったシアトル周辺の日系人とララとの関係の一端が明らかになり、さらには、日系人のマス・メディアとララとの協力関係、とくに日本語新聞が意識的、かつ積極的に救済運動の広報機能をになっていたことなどが明らかになった。

本項では、これまでの分析から導かれた知見を整理し、それらをより大きな研究の枠組みのなかに位置づけながら、今後の研究において検討されるべきいくつかの仮説や課題を提示する。

まず、『北米報知』の紙面分析から得られた主要な知見は、以下の諸点にまとめることができる。

- ・創刊当初より、『北米報知』はララの活動を積極的に支援・促進する報道をしていた。
- ・シアトルの救済会やララの公認団体は、より多くの人々から協力を取りつけるために、西北部で唯一の日本語新聞『北米報知』を広報機関として利用していた。
- ・『北米報知』側も協力を惜しまず、同紙関係者のなかには救済会に直接的に関与する者も少なくなかった。同紙と救援会の連携は密であった。
- ・『北米報知』の報道は、あらゆる面で敗戦した日本人を「難民」として位置づけていたが、これは、彼らの窮状の深刻さを印象づけることで、救済活動への関心を高め、協力を引き出すという意味で、ララの広報と関連していたと考えられる。
- ・日系人の生活もけっして楽ではなかったが、『北米報知』は、日本人「難民」に比べれば日系人ははるかに恵まれている、とくり返し論じていた。この論法は、自己の生活を犠牲にしても救済運動に参加・協力する意義を説くために必要であったと考えられる。
- ・『北米報知』はまた、日本からの礼状を定期的に掲載し、日系人の献身的な協力が実際に成果をあげている事実を伝えていたが、こうした報道も救済活動に対する読者の関心や意欲を高めていたと考えられる。
- ・1947年中頃からは若干の批判・懸念も報道するようになるが、それらはいずれも救済活動そのものの意義を否定するものではなく、むしろ、その正当性を補強する建設的な批判としてとらえられる。

以上の知見はさらに、既存のララ研究、および日系人のマス・メディアに関する研究で着目されてこなかった、いくつかの新たな論点や仮説につながる。これらは必ずしも本論文で実証し得たものばかりではないが、上述の知見をより大きな研究枠組に位置づけることを可能にし、かつ今後の研究課題にも結びつくので、主要なものを以下に示す。

まず、戦後日本の救済において日系人があげた多大な功績の影には、善意・同情・愛郷心・ナショナリズムといった言葉に象徴される道義的・情緒的な要素のみならず、日本語新聞というマス媒体

を介した意識的な広報活動という実務的な要素も少なからず作用していた。この点は、少なくともシアトル周辺地域については、『北米報知』の紙面分析から実証することができた。今後、ララ研究を進展させる上で、日本語新聞の役割は無視できない論題の1つとなろう。

上述の点は、当時の日系人社会において、日本語新聞が単なるニュース伝達媒体ではなく、公共性の高い指導機関、本論文冒頭で引用した表現を借りれば、日系人社会の「木鐸」・「オピニオン・リーダー」として機能していた事実とあわせて理解する必要がある。すなわち、新聞発行それ自体が日系人コミュニティ全体のための公益事業のような性格を強く帯びており、その意味では、まさに慈善事業であったララの活動と呼応する関係にあった。その証左として、『北米報知』の関係者の多くは、救済会の活発なメンバーでもあった。同じ公益的・奉仕的の事業として、新聞発行と日本の援助運動には相互を結びつける共通性があり、そのいずれにも日系人指導層が深く関わっていたのである。この点も、将来の研究において考慮に入れられるべきである⁵⁷。

さらに、上述の点を全米規模に広げて考えれば、ララの救済運動への参加・協力を共通テーマとして、意識的か否かは別として、各地の日本語新聞がベネディクト・R・アンダーソン (Benedict R. Anderson) のいう「想像の共同体」(imagined communities) の形成を助けていたと推論することもできる。長年にわたる人種差別とその総決算ともいえる戦時強制立ち退き・収容により、日系人の居場所は、物理的にも心理的にも大幅に制限・離散させられた。そのときに浮上してきた日本の救済という課題は、日系人が集団として再結集し、存在意義を確認しあえる格好の場を提供したのではないか。いいかれば、1980年代に結実したりドレス (立ち退き・収容の補償) 運動ほどではないにせよ、ララを通して日本の救済のために力をあわせることが日系人のアイデンティティの再構築・補強につながり、この共通の目標の下に地理的に拡散した各地の日系人をまとめたのが、日本語新聞を媒介した救援運動への一致協力という想像上のネットワークだったのではなからうか⁵⁸。

さらに、日系人アイデンティティの再構築・補強に関しては、太平洋戦争を前後して大きく変化した、日系人と日本・日本人との相対的關係にも着目する必要があるだろう。これは、とくに『北米報知』による「難民」報道の分析が示唆する点であるが、日系人が日本・日本人を熱心に援助した背景には、彼らがどの程度意識していたかは別として、いまや「難民」と化した「同胞」に対する日系人の相対的な優位性が作用していた可能性がある。アメリカ社会で徹底的に差別されてきた日系人の多くが、「日本人」としてのアイデンティティをもちつづけていたことは、これまで多くの研究が明らかにしている。ところが、日系人は日本ではしばしば「棄民」として見られ、別種の差別を受けていた。戦争が終わってもアメリカ社会では地位が低いままの日系人にとって、敗戦国となりどん底に堕ちた日本を救う行為が、自分たちの地位を「棄民」から「恩人」に押しあげ、失墜した自尊心を回復する好機と映ったとしても不思議ではない。そしてそれは、戦勝国アメリカに住む日系人が、物理的にも精神的にも日本人「難民」に比べ優位な立場にあったからこそ、可能であった。もちろん、この仮説は、日系人が戦後日本の復興にはたした功績を何ら減じさせるものではない。ただ、日系人の自己犠牲的な奉仕が、同胞意識や愛郷心以外の要因でも説明づけられるとすれば、その可能性を放棄すべきではなからう⁵⁹。

最後に、上述した仮説の検証以外の今後の課題をいくつか提示することで、本論文を締めくくる。まず、本論文の冒頭で触れたように、1948年以降の『北米報知』、および、戦後シアトルで発刊された『西北日報』や *Northwest Times* の紙面分析がなされれば、本論文との比較検討が可能になる。もし、1948年以降、『北米報知』の英語欄が日本の救済について積極的に報道しているのなら、それも分析に含める必要がある。

次に、ロサンゼルス、サンフランシスコなど、他の西海岸地域の日本語新聞の分析からも、重要

な知見を得ることができるかもしれない。たとえば、ロサンゼルス『羅府新報』(英文題字は *L.A. Japanese Daily News*) は、戦後、西海岸で他紙にさきがけて(1946年1月1日)再刊をはたした日本語新聞として、きわめて重要である。先行研究で触れられているサンフランシスコの『日米時事』(1946年5月18日創刊、英文題字は *Nichi Bei Times*) にも、報道内容を詳細に分析する価値がある。その他、ハワイ・カナダ・南米の日系人が発行していた新聞の分析も、今後の課題となりえる。

さらに、山中部で発行されていた日本語新聞も、戦前から戦後にかけて発行を継続していたという点を考えれば、取りあげる価値が高い。たとえば、『ユタ日報』(ユタ州ソルト・レイク・シティ、英文題字は *Utah Nippo*) は、終戦とほぼ同時に日本の救済を訴えている。すなわち、日本の降伏をはじめて確定的に伝えた1945年8月15日号の第1面の社説「冷静に沈着に」で、次のように「祖国の回復」への尽力を訴えている。「我々在米日本人としては、遙かに苦悩の祖国に対し沈着の態度を持し、倍旧の努力をもって祖国の回復に対し誠心誠意、奮然立ち上るべきであると思う」。その後の積極的な報道展開を予期させる内容である。田村紀雄も、『ユタ日報』がララの運動に「果たした役割は非常に大きかった」と論じている。同様に、戦前から発行をつづけたコロラド州デンヴァーの『格州時事』(英文題字は *Colorado Times*) も、発行者の貝原一郎が「山東三州日本難民救済会」の副委員長を務めており、紙面内容を分析する意義は大きいと考えられる⁶⁰。

上の課題に関連して、当時の日系人を取り巻いていた情報環境の全体的な把握も、今後の重要な課題の1つである。すなわち、居住地域で手に入る日本語新聞以外に、どのような媒体や経路からララや各地の救済会、および戦後の日本・日本人に関する情報を摂取していたのかを探る必要がある。より具体的には、他地域の日本語新聞、英字新聞の日本報道、講演会・演説会、映画上映会・演芸会、伝聞・噂、私信、などが研究対象となる。

註

- 1 坂口満宏「移民のナショナリズムと生活世界 シアトル日本人移民社会形成小史」『立命館言語文化研究』第5巻・第5・6合併号(1994年2月):121。
- 2 多々良紀夫によれば、ララが正式に発足したのは1946年4月であったが、その母体となったのは、それ以前に諸外国の救済を目的に結成された「アクヴァフス」(ACVAFS = American Council of Voluntary Agencies for Foreign Service, Inc.・海外事業運営篤志団アメリカ協議会)で、ここに1946年3月に設けられた「日本委員会」(Committee on Japan)のメンバーがララの中核をなしたという。ララの成立の経緯や背景については、多々良紀夫『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』(財団法人・保健福祉広報協会、1999年)が詳細に明らかにしている。
- 3 多々良『救援物資は太平洋をこえて』182、飯野正子『もう一つの日米関係史 紛争と協調のなかの日系アメリカ人』(有斐閣、2000年)、148。
- 4 飯野『もう一つの日米関係史』143-168、多々良『救援物資は太平洋をこえて』97。飯野の著書にあるララに関する記述内容を増補した論文として、飯野正子「『ララ』 救援物資と北米の日系人」、レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キムラ=ヤノ、ジェームズ・A・ヒラバヤシ編、移民研究会訳『日系人とグローバリゼーション 北米、南米、日本』(人文書院、2006年)、112-135がある。また、飯野正子「日系人にとっての戦後50年」『アメリカ研究』第30号(1996年3月):19-38も参考になる。

類似した動きとして、沖縄からハワイに移住した日本人移民とその子孫(オキナワン)の多くも、

戦後、沖縄の人々を救済する運動を組織的に展開していた。さらに、そこでも現地の日本語新聞、『布哇タイムズ』・『布哇報知』が重要な役割をはたしていた。これらの点については、島田法子『戦争と移民の社会史 ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』（現代史料出版、2004年）、239 - 251が詳しく論じている。

- 5 飯野『もう一つの日米関係史』156 - 162、多々良『救援物資は太平洋をこえて』94、119 - 120。
- 6 田村紀雄『『ニューヨーク日米』とララ物資』『図書』第576号（1997年5月）：34、上坂冬子「焼け跡の日本を救った ララ物資の生みの親」『中央公論』1986年3月号：259 - 273、多々良『救援物資は太平洋をこえて』101 - 104、飯野『もう一つの日米関係史』159 - 160、田村紀雄『海外の日本語メディア 変わりゆく日本町と日系人』（世界思想社、2008年）、117。浅野については、浅野七之助『在米四十年 私の記録』（有紀書房、1962年）、長江好道『日系人の夜明け 在米一世ジャーナリスト浅野七之助の証言』（岩手日報社、1987年）も参考になる。なお、このパラグラフの冒頭で引用した田村の論考『『ニューヨーク日米』とララ物資』は、最近、他の論文とあわせて単行本化されている。（田村『海外の日本語メディア』196 - 204。）
- 7 上坂「焼け跡の日本を救った ララ物資の生みの親」267 - 268。
- 8 各紙の歴史については、Scott Edward Harrison, "Japanese Newspaper and Magazine Publishing in the Pacific Northwest 1894 - 2006," unpublished annotated bibliography, (Seattle, WA: University of Washington Library, 2006) が参考になる。いずれの新聞のバック・イシューもマイクロフィルム化され、ワシントン州立大学図書館で閲読できる。本論文で引用・参照している新聞紙面も、すべて同大図書館で複写したものである。
- 9 糸井輝子『『慰問品うれしく受けて』 戦時交換船救恤品からララ物資へつなぐ感謝の連鎖』『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要』第2号（2008年1月）：11、多々良『救援物資は太平洋をこえて』28。
- 10 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（學而書院、1936年）、7、有馬純雄「創刊のことば」『北米報知』1946年6月5日。
- 11 有馬純雄「創刊のことば」『北米報知』1946年6月5日。有馬は、『北米時事』の社長兼主筆として日系人社会を指導する立場にあったことを理由に、真珠湾攻撃当日の1941年12月7日の夕刻、シアトル市内の自宅でFBIに逮捕・連行された。有馬はそれから4年半近く、1946年3月まで収容所生活を強いられた。その間に収容所当局が作成した有馬の個人ファイル等は、アメリカ国立公文書館に所蔵されている。（RG 85, Crystal City Internment Camp Case File, 940 / 560, Arima, Sumio, Santa Fe Internment Camp Case File, 1300/B - 1376, Arima, Sumio [INS-24-46-J-459-CI], National Archives and Record Administration.）その他、有馬および『北米時事』については、次のような文献が参考になる。伊藤一男『続・北米百年桜』（北米百年桜実行委員会、1972年）、伊藤一男『アメリカ春秋八十年』（PMC出版、1982年）、有馬純達『シアトル日刊邦字紙の一〇〇年』（築地書館、2005年）。
- 12 有馬純雄「謹告」『北米報知』1946年6月19日。発行者の交代をめぐる事情については、生駒貞彦「謹告」『北米報知』1946年6月26日、生駒貞彦「終刊の辭に代へて」『北米報知』1946年12月25日、三原源治「北米報知の一周年を祝す」『北米報知』1947年7月30日、などでも説明されている。
- 13 「本紙に英文欄」『北米報知』1946年12月25日、「経済欄の新設」『北米報知』1947年1月29日。
- 14 生駒貞彦「創刊一周年を迎へて」『北米報知』1947年7月30日、伊藤『アメリカ春秋八十年』169。なお、開戦前のシアトルで最大の日本語新聞『北米時事』でさえ、9,000部弱の発行部数であっ

- た。(有馬『シアトル日刊邦字紙の一〇〇年』52。)
- ¹⁵ 生駒貞彦「終刊の辭に代へて」『北米報知』1946年12月25日。
- ¹⁶ 生駒貞彦「終刊の辭に代へて」『北米報知』1946年12月25日、三太郎「新聞と大衆(二)」『北米報知』1947年3月19日。
- ¹⁷ 「日本難民へ救済物資發送許可 配給機關設立のため二名の代表が渡日」『北米報知』1946年6月19日。
- ¹⁸ 「ボ市の日本人が難民救済へ合流」『北米報知』1946年6月19日。石丸和人によれば、西北部日本難民救済會が結成されたのは1946年2月のことであった。(石丸和人「戦後日系社会の出発点となったララ活動 戦災日本の困窮に差し伸べられた救いの手 大きかった日系人の貢献」『季刊海外日系人』第36号[1995年5月]:12。)
- ¹⁹ 「日本難民義捐金 五千弗を突破す」『北米報知』1946年8月7日、「故國救済義捐金」『北米報知』1946年8月28日、「故國救済義捐金 七千弗を突破」『北米報知』1946年9月11日、「シカゴ通信 難民救済應募 一万弗を突破」『北米報知』1946年12月25日、「救済會物資發送 沙港罹災民救済會發表」『北米報知』1947年1月1日。伊藤一男によれば、救済會は1956年1月に解散するが、日本への送金額は合計で約50,000ドルに達したという。(伊藤『アメリカ春秋八十年』176。)
- ²⁰ 1946年中に限っても、次のような記事が掲載されている。「沙港難民救済會 第一回發送の古着類 降誕祭前に横濱到着」『北米報知』1946年12月4日、「友愛會發送の救済品について」『北米報知』1946年12月18日、「救済品の發送」『北米報知』1946年12月18日、「救済會物資發送 沙港罹災民救済會發表」『北米報知』1947年1月1日。
- ²¹ 「難民救済委員會 救済に拍車をかける」『北米報知』1947年1月15日、「謹告」『北米報知』1947年4月23日。
- ²² 「難民救済委員會 第二回義捐金募集は四月廿二日から」『北米報知』1947年4月2日、西北部日本難民救済會本部「謹告」『北米報知』1947年5月14日、西北部日本難民救済會本部「謹告」『北米報知』1947年6月4日、多々良『救援物資は太平洋をこえて』119。
- ²³ 「シカゴ通信 難民救済應募 一万弗を突破」『北米報知』1946年12月25日。アメリカ・フレンズ奉仕団から提供された情報をもとに紙面化された記事として、「日本行救済品 桑港で輸送を待つ…と 友愛協會本部で發表」『北米報知』1946年10月30日などがある。多々良が採録している文書は、奉仕団北カリフォルニア(サンフランシスコ)支部からフィラデルフィアの本部に送付された1947年12月18日付の書簡で、北カリフォルニア支部が日本語新聞にニュース・リリースを提供していることなどを記している。(多々良『救援物資は太平洋をこえて』238-240。)
- ²⁴ 生駒貞彦「終刊の辭に代へて」『北米報知』1946年12月25日。
- ²⁵ 「難民救済委員會 救済に拍車をかける」『北米報知』1947年1月15日、「難民救済委員會新陣容」『北米報知』1947年2月5日、「第二回難民救済義捐金募集委員」『北米報知』1947年4月23日。三原はその後、シアトル日系人会の初代会長をはじめ、同地の日系人社会で要職に就いている。
- ²⁶ 「難民救済委員會 救済に拍車をかける」『北米報知』1947年1月15日、「救済委員會 詮衡委員を選定」『北米報知』1947年1月29日、「難民救済委員會」『北米報知』1947年2月26日、「映畫の夕」『北米報知』1947年4月9日。その他、「難民救済委員會」『北米報知』1947年4月2日なども参考になる。
- ²⁷ 上坂「焼け跡の日本を救った」269、多々良『救援物資は太平洋をこえて』100-101、飯野『もう一つの日米関係史』157、飯野正子「『ララ』 救援物資と北米の日系人」130、島田『戦争と移

民の社会史』247 - 251。

²⁸ 飯野『もう一つの日米関係史』131。

²⁹ 「日本難民義捐金 五千弗を突破す」『北米報知』1946年8月7日、「救済品發送」、「溢るゝ同胞愛」『北米報知』1946年12月25日。

³⁰ 「告」『北米報知』1946年6月26日。この告知文はその後もくり返し掲載されている。

³¹ 「スポークン通信 日本戦災者救済會」『北米報知』1946年9月4日。

³² 本間睦子「訪問記」『北米報知』1946年9月18日。

³³ 「大上船長敬虔な態度で故國を語る」『北米報知』1946年9月18日。

³⁴ 「栃木縣下の物價値段 これからさきどうなることでせうと憂慮する 一同胞からの書信の一節」、「故國難民救済品 九日桑港出帆日本へ」『北米報知』1947年1月8日。日本からの書簡を紹介する記事として他に、次のようなものがある。「故國便り」『北米報知』1946年9月18日、宮崎英夫「軍隊のない日本より 故國の内情を暴露して同胞歸國希望者を戒む」『北米報知』1947年3月5日、宮崎英夫「軍隊のない日本より 故國の内情を暴露して同胞歸國希望者を戒む」『北米報知』1947年3月12日、中村赤トンボ「變りゆく日本 (一) 民主の風は吹けど實を結ばせるのはいつのことやら」『北米報知』1947年3月26日、中村赤トンボ「變りゆく日本 (二) 民主の風は吹けど實を結ばせるのはいつのことやら」『北米報知』1947年4月2日、中村赤トンボ「變りゆく日本 (三) 民主の風は吹けど實を結ばせるのはいつのことやら」『北米報知』1947年4月9日、龜谷一男「靴と家の話」『北米報知』1947年5月14日、宮崎英夫「在米同胞よ!! 故國の慘狀を何んと見る (二)」『北米報知』1947年5月14日、龜谷一男「靴と家の話 (二)」『北米報知』1947年5月21日、龜谷一男「靴と家の話 (三)」『北米報知』1947年5月28日、龜谷一男「靴と家の話 (四)」『北米報知』1947年6月4日、「故國便り 餓死者の黓いのは全く米國のお蔭です」『北米報知』1947年11月12日、「日本よ!! ありし昔の姿は何處に」『北米報知』1947年12月3日。

³⁵ 宮崎英夫「在米同胞よ!! 故國の慘狀を何んと見る」『北米報知』1947年5月7日、赤トンボ「最近の日本事情 (一)」『北米報知』1947年7月2日。

³⁶ 春野トシ子「一周年を祝す」『北米報知』1947年7月30日。

³⁷ 「日本行救済品 桑港で輸送を待つ…と 友愛協會本部で發表」『北米報知』1946年10月30日、「戦禍の東京より 難民の窮狀を述べて 同胞よりの援助要望」『北米報知』1947年1月29日。ローズがはたした役割や功績については、多々良『救援物資は太平洋をこえて』(1999年)が詳しく説明している。

³⁸ 「今年は昨年よりモット食糧が必要……と 日本ララのポット氏報告」『北米報知』1947年4月23日。

³⁹ 「日本人を救へ 食料飢饉は民主の敵 英字新聞桑港ニュース所論」『北米報知』1946年10月9日。

⁴⁰ Felicity Barringer, "Journalism's Greatest Hits: Two Lists of a Century's Top Stories," *New York Times* March 1, 1999: C1. もっとも新しい日本語訳は、J・ハーシー、石川欣一・谷本清・明田川融訳『ヒロシマ』増補版(法政大学出版局、2003年)である。

⁴¹ 武田麟太郎「東京通信 (三)」『北米報知』1947年3月5日。

⁴² 「年頭歌」『北米報知』1947年1月1日。

⁴³ 本間睦子「訪問記」『北米報知』1946年9月18日。

⁴⁴ 飯野『もう一つの日米関係史』130、有馬純雄「創刊のことば」『北米報知』1946年6月5日。

⁴⁵ 「新春を迎えて」『北米報知』1947年1月1日。

- 46 和田正彦「年頭の所感」『北米報知』1947年1月1日。
- 47 「一周年記念號に題す」『北米報知』1947年7月30日。
- 48 「アメリカの皆様 結構な贈物有難う」『北米報知』1947年2月26日。
- 49 「アメリカの皆様 結構な贈物を有難う」『北米報知』1947年3月26日、「アメリカの皆様 結構な贈物有難う」『北米報知』1947年3月5日。その他、「アメリカの皆様 結構な贈物有難う」『北米報知』1947年6月4日、「廢墟となつた國土から」『北米報知』1947年7月23日、なども参考になる。
- 50 「救援物資中央委員長から禮狀」『北米報知』1947年4月9日、「在米同胞の故國救濟 國民は心から感謝 堀内謙介氏から叮嚀なる感謝狀」『北米報知』1947年6月25日。「ララ中央委員会」は記事中では「救援物資中央委員会」と記されているが、本論文では多々良の呼称を採用し、「ララ中央委員会」と表記している。(多々良『救援物資は太平洋をこえて』28-32。)
- 51 この文書、およびその日本語訳は、多々良『救援物資は太平洋をこえて』57-58、216を見よ。
- 52 春秋郎「レニアおろし(五)」『北米報知』1947年5月14日。
- 53 春秋郎「レニアおろし(五)」『北米報知』1947年5月14日。
- 54 「東京だより 在米同胞に感謝」『北米報知』1947年11月26日、「戦禍の東京より 難民の窮狀を述べて 同胞よりの援助要望」『北米報知』1947年1月29日。
- 55 「東京だより 在米同胞に感謝」『北米報知』1947年11月26日。
- 56 「日本送り救濟小包 停滞は係員の不馴れと設備不完全のため」『北米報知』1947年12月27日。
- 57 三太郎「新聞と大衆(二)」『北米報知』1947年3月19日。
- 58 Benedict R. Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* revised ed. (London: Verso, 1991).
- 59 日系人のアイデンティティに関する優れた先行研究として、たとえば、次のような文献がある。Brian Masaru Hayashi, *For the Sake of Our Japanese Brethren: Assimilation, Nationalism, and Protestantism Among the Japanese of Los Angeles, 1895-1942* (Stanford, CA: Stanford University Press, 1995); Yasuko I. Takezawa, *Breaking the Silence: Redress and Japanese American Ethnicity* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1995); Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism in Japanese America* (New York: Oxford University Press, 2005)、南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学 エスニシティ、人種、ナショナリズム』(彩流社、2007年)。
- 60 「冷静に沈着に」『ユタ日報』1945年8月15日、田村紀雄「解説『ユタ日報』『復刻「ユタ日報」(一九四〇〜一九四五)』(五月書房、1992年)、385、多々良『救援物資は太平洋をこえて』118。

The Japanese-Language Press in the United States and LARA: The Seattle *Hokubei Hochi*'s Coverage of Relief in Post-War Japan, 1946 – 1947

Takeya Mizuno (Toyo University)

This article attempts to examine how a Japanese-language newspaper in Seattle, *Hokubei Hochi* (*The North American Post*), covered Japanese Americans' involvement in the relief movement for Japan's post-war reconstruction by LARA (Licensed Agencies for Relief in Asia). A qualitative analysis of the newspaper from its first June 5, 1946 issue through the end of 1947 found that it was in full and consistent support for LARA and its activities.

The Seattle newspaper encouraged LARA's project in many ways. For example, it repeatedly stressed that the Japanese in Japan had become "war refugees" and on that ground contended that Japanese Americans were in a far better state. The newspaper, too, regularly published thank-you letters from Japan, which could have reinforced the readers' motivation to contribute to LARA's relief movement.

Those who were promoting the movement also found the paper useful for publicity and made full use of it. So did Seattle Japanese American leaders who organized a local Japan relief committee. The paper cooperated with these LARA supporters and served consciously as a publicity medium for LARA.

Keywords: Seattle, Japanese Americans, LARA (Licensed Agencies for Relief in Asia), *Hokubei Hochi* (*The North American Post*), Post-war Reconstruction, Publicity

Nisei Interpreters / Translators of the U.S. Military

Tomoko Ozawa (Senior Lecturer, Musashino Art University)

Introduction

1. Training the Nisei as Linguists
2. Loyalty and Race
3. Nisei Women in the Military
4. Nisei Women in Occupied Japan

Conclusion

Keywords: Nikkei, Nisei, MIS, MISLS, Linguists, Hawaii, Occupation of Japan

Introduction

During World War II and the occupation of Japan, language-proficient Nisei, or the second generation of Japanese immigrants to Hawaii and the United States mainland, worked in the Military Intelligence Service (MIS) as linguists: English-Japanese interpreters, translators and liaison coordinators. While the majority of Nisei working for the Allied Occupation forces was military personnel, civilian Nisei were also hired to carry out the daily tasks of rebuilding war-devastated Japan.

Officially, the activities of the U.S. Military Intelligence Service during World War II were not disclosed until 1973. In 1979, over three decades after World War II ended, a retired navy journalist, Joseph D. Harrington, recorded the experiences of hundreds of Nisei veterans who were military intelligence servicemen in the Second World War. Harrington's *Yankee Samurai: The Secret Role of Nisei in America's Pacific Victory*, appears to be the first thorough documentation of Nisei's wartime intelligence activities. Using retrospective personal accounts of Nisei men, Harrington depicts the various roles and duties of the servicemen in detail. In regard to the occupation period, however, only a few pages deal with the postwar experiences of a handful of Nisei.¹

The publication of personal memoirs of former Nisei servicemen and veterans' groups across the nation mushroomed from the 1980s on, and more recently various online sites have provided interviews as well as personal accounts.² While personal recollections on wartime experiences have become more visible, the immediate days and months of the war's end definitely call for more attention. After all, the occupation period in Japan was experienced by numerous Nisei who worked in uniform and as civilians.

Extensive research on this topic of the postwar MIS activities has been slow in coming. The year 2006 saw the publication of command historian James C. McNaughton's *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service during World War II* published by the Department of the Army. It is by far the most recent extensive historical account of Nisei who served during the war and post-war years as interpreters and translators in the MIS. In the final chapter, "MIS Nisei and the Early Occupation of Japan, September 1945 – February 1946," McNaughton describes the ways in

which Nisei linguists served as liaisons between military government officers and Japanese officials, censored civil communications and assisted with war crime investigations and trials.³ But none of the Nisei civilians who were hired to work for the U.S. government appear in his description of the occupation period.

In 2008 researcher Nobuhiro Adachi published an article focusing on six individuals who had attended the Military Intelligence Service Language School (MISLS). By conducting oral interviews of the Nisei from Hawaii he explores how serving in the military and attaining proficient Japanese language skills had an impact on the overall livelihoods of these veterans. In particular the GI Bill, language skills and self-esteem obtained during their military experience purportedly shaped their professional careers, and, in some cases, promoted their connection with Japan in the fields of business or research. Interestingly, for Hawaiian Nisei, according to Adachi, seeing the mainland while training at the MISLS influenced their perception of themselves in terms of realizing the differences in the regional racial makeup and accents of spoken English.⁴

In regard to Nisei servicewomen, McNaughton introduces the fact that the first thirteen women flew to Tokyo in 1946, though substantive research on the involvement of Nisei women in the U.S. military during World War II is limited. The most prominent publication on this topic is perhaps sociologist Brenda L. Moore's *Serving Our Country: Japanese American Women in the Military during World War II*, which offers a historical overview of Nisei women who served in the U.S. forces, most as members of the Women's Army Corps (WAC) but some as nurses and doctors in the Army Medical Corps. Moore documents the stories of servicewomen by analyzing interviews and primary sources. Much of Moore's analysis deals with how military experience influenced and shaped the lives of Nisei women.⁵

Although it is not difficult to imagine that most individuals with a negative or tragic experience of military service would have probably shunned an opportunity for an interview and refused to share their memory, Moore easily generalizes that "[Nisei women's] military service benefited them socially, economically, and politically in later years." Furthermore Moore points out that through the interviews that she had conducted the Nisei's "voices help to dispel the nativistic view of Japanese Americans as foreigners to the United States, and challenge the race and gender stereotypes of Japanese American women" because the Nisei interviewed for her study "were both assertive and determined to take charge of their lives."⁶ Regardless of her somewhat conventional conclusion, Moore's extensive research and interviews are valuable accounts that had been virtually unknown.

This paper intends to further illuminate the historical process of turning the Nisei into linguists and their induction into the armed forces. Historical analysis of the induction process, or more specifically various restrictions placed on induction, of the Nisei into the U.S. military brings to light politics of racial and gendered hierarchies. Moreover, it is obvious that more attention is needed to uncover the history of Nisei women working as linguists during the Second World War and occupation of Japan. As an initiative, this paper briefly introduces a rare personal account of Sadae Tagami, a Nisei who worked as a civilian for the occupation force in Tokyo and married Kan Tagami who at one point in his military career was with the MIS. Accounts of personal experiences provide significant details of public or group history, but because a personal account is independently historic, or requires contextual analysis, it would be unwise to generalize it. Therefore, this paper focuses on how Sadae Tagami's

interview reveals her multidimensional sense of belongings, not alluding to categorical groupings.

1. Training the Nisei as Linguists

Secretly established by the War Department under the Fourth Army and commanded by Lieutenant General John L. DeWitt, the Military Intelligence Service Language School, as it came to be called, grew dramatically during the Second World War. With the outbreak of the war the demand for Japanese language specialists obviously grew. In July 1941 Cornell University sponsored a three-day conference of Japanese language teachers from seven American universities. Attending this occasion were representatives, apparently probing for Japanese language experts, from the Military Intelligence Division (MID), the Office of Naval Intelligence (ONI) and the FBI. Learning that only sixty students of European descent were enrolled in college-level Japanese courses nationwide, the army and navy officers were determined to establish a school themselves in order to train more linguists. Three former language attachés Captain Kai E. Rasmussen, Captain Joseph K. Dickey and Lieutenant Colonel John Weckerling worked together to assemble students and instructors for the school.⁷

Captain Kai E. Rasmussen, a coast artillery officer then commanding harbor defenses for San Francisco Bay, was appointed to build a Japanese language school that would use his knowledge of Japanese.⁸ The MID also sent Captain Joseph K. Dickey, another language attaché, who had been serving in the U.S. embassy in Tokyo. The War Department dispatched a more senior officer, Lieutenant Colonel John Weckerling who was promoted that summer. He had been a language attaché in Tokyo from 1928 to 1932 and an assistant military attaché from 1935 to 1938.⁹

During the summer of 1941 the Western Defense Command held the largest maneuvers ever seen on the West Coast. They planned to meet every Nisei soldier in all of the Regular Army and National Guard units under DeWitt's command of the Western Defense Command. The three officers in civilian clothes visited military camps to interview the Nisei, showing him a Japanese army manual and asking him to read and translate a few passages. Reportedly, from July to October 1941 the three officers interviewed all 1,300 Nisei soldiers on the West Coast. The officers intended to determine the loyalty of each Nisei candidate based on the interview and security questionnaires used for background investigations. About 30 percent of the Nisei had a parent or sibling living in Japan, an automatically disqualifying factor. At this initial stage, no one screened the Nisei serving in Hawaii. As McNaughton points out, this was perhaps because the three officers did not have enough time to conduct the screening process in Hawaii, or perhaps of not wishing to cross command lines.¹⁰

On November 1, 1941 the Fourth Army Intelligence School was formally activated at the Presidio of San Francisco in an abandoned airplane hangar at Crissy Field. The Japanese language classes began with four Nikkei instructors and sixty students.¹¹ The leading instructor was a Nisei, John Aiso.¹² He laid down the daily schedule: classes from 8:00 to 11:30, a lunch break, then classes from 13:00–16:30, five days a week. The curriculum was based on the Naganuma readers, Creswell's Japanese-English military dictionary, various Japanese and American training manuals, Ueda's *Daijiten* (dictionary) and several other books.¹³ Apparently, contrary to the instructors' assumption that the students were supposed to have a good grasp of the language already, only the top twenty or so students could handle the language with ease. At the time of the interview, of all the Nisei screened, only three

percent could be rated “accomplished,” four percent “proficient” and three percent “fair.”¹⁴

Naturally the army officers searching for linguists were particularly interested in the Kibei, or Nisei who had spent some or most of their youth in Japan and returned to the U.S. Despite their Japanese proficiency, according to McNaughton, Weckerling deemed five percent or less of the Kibei completely unsuitable for military service, describing them as having “unassimilated elements” who had, or were believed to have had, cause to hate the U.S. Furthermore, Weckerling stated that those who went to Japan as infants and returned within the last year or two were also unsuitable because their way of thinking was “wholly Japanese.”¹⁵ While the army had no use for those who could not speak sufficient English, the Kibei who had attended school in Japan proved to be valuable, often assuming more difficult tasks once on duty.

In May of 1942, when the class that had started in November 1941 had completed a six months’ course, the school was moved to Camp Savage located in the suburbs of Minneapolis in the southeastern part of Minnesota. The enlarged school was renamed the Military Intelligence Service Language School and placed under the direct jurisdiction of the Department of Army, Military Intelligence Division, in Washington D.C. After moving to Fort Snelling in 1944, the MISLS instituted Chinese (Mandarin) and Korean classes enlarging the scope of languages taught in addition to Japanese. The MISLS next moved to the Presidio of Monterey and was made an agency of the Department of Defense and renamed the Defense Language Institute. Between early 1944 and the summer of 1945, about 1,400 Nisei from the mainland and about 1,000 more from Hawaii were selected for language training. More than 6,000 graduates served throughout the Pacific Theater during the war and the subsequent occupation of Japan.¹⁶

2. Loyalty and Race

The enlistment of Nisei into the MIS involved inter-related groupings based on notions of race and loyalty. One historical discourse within the Nikkei community supposes that the Nisei, particularly aware of how the larger population could not accurately distinguish a Kibei from other Nisei, saw their Kibei peers as burdening their cause to be fully accepted in America. In accordance with the Americanization pressure that insisted that the second generation were to assimilate to the American mainstream and be loyal citizens, the Kibei were purportedly untrustworthy due to their partial or whole upbringing in Japan. Against this complex backdrop, the military or high-ranked officers were inconsistent, and at times self-contradictory, in terms of their perception and treatment of the Nisei as well as Kibei serving the U.S.

The recruiting and training of the Nisei was conducted under Lieutenant General John DeWitt’s command on the west coast. Several weeks after the opening of the MISLS, DeWitt visited the school just down the hill from his headquarters at the Western Defense Command. When Nisei John Aiso was introduced as the chief instructor, DeWitt allegedly patted Aiso on the shoulder and said that he was doing a good job, and DeWitt offered his support.¹⁷

Officials, as well as the general public, could never detach the issue of patriotism from prejudice and racial thinking. A 1942 *Harper’s Magazine* article by Lieutenant Commander Kenneth D. Ringle discussed the loyalty question in detail. Under a pseudonym Ringle proposed that “individual

examination” was the best way to determine “who are truly with us.”¹⁸ The officials of western states were inclined to admit that some proportion of the resident Japanese and their children were loyal to America, but they professed a complete inability to distinguish the loyal from the disloyal. “To complicate the situation no ready means existed for determining the loyal and disloyal with any degree of safety,” according to the Department of War.¹⁹

The concluding argument presented in the Department of War’s *Final Report* was that any member of the Japanese race was to be distrusted. This premise was implicit throughout the reasoning and sometimes made explicit. DeWitt’s memorandum stated that “the Japanese race is an enemy race and while many second and third generation Japanese born on United States soil, possessed of United States citizenship, have become ‘Americanized,’ the racial strains are undiluted.”²⁰ Congressman John Rankin put the racial argument in its most sweeping form when he told the Congress that “once a Jap, always a Jap” and that “you can not regenerate a Jap, convert him and make him the same as a White man any more than you can reverse the laws of nature.”²¹

It should be noted that DeWitt’s personal response to the whole matter on “evacuation” was quite inconsistent. On December 19, 1941, as one consequence of his initial flurry, DeWitt recommended that all “alien subjects fourteen years of age and over, of enemy nations” be removed. He was then firmly opposed to any “evacuation” of citizens and did not specifically mention any particular race. During a telephone conversation he held on December 26 with the Provost Marshal General, Allen W. Gullion, DeWitt commented that “an American citizen, after all is an American citizen. And while they all may not be loyal, I think we can weed the disloyal out of the loyal and lock them up if necessary.”²² Government lawyers would later deny to the Supreme Court that any loyalty-screening procedure was possible.²³ DeWitt had seen how quickly the Commanding General of Hawaii Walter C. Short had been forced out of the military after the disaster at Pearl Harbor. DeWitt did little to calm the fears and suspicions that mounted after Pearl Harbor, and showed no intention of letting his guard down and suffering the same fate.

As for the Nisei in the military, the Counter Intelligence Corps kept close watch on them, and the MISLS had its counter-subversive program which included rendering highly-trusted Nisei to provide confidential reports on other Nisei.²⁴ At the outset of the war the Military Intelligence Division had established a strict policy: whenever possible, enlisted MIS Nisei would serve under “caucasian” language officers. The main purpose, in the words of Colonel Rasmussen, “was to have an unmistakably Caucasian officer associated with Oriental faces in order not to have some trigger-happy G.I. pop a gun.”²⁵ Accordingly, a preparatory course for qualified persons of European descent was established at the University of Michigan in October 1942. By May 29, 1944, thirty-four officers and 234 enlisted men were enrolled in this intensive Japanese-language program under the supervision of Professor Joseph K. Yamagiwa of the University of Michigan and thirty-five Nisei assistants.²⁶

The Office of Naval Intelligence was making its own preparation for the coming conflict with Japan. In Washington D.C. the ONI Far East Section employed a handful of Japanese translators, but with the growing demand for attacking the Japanese naval and diplomatic codes, in December 1940 they began to develop a Japanese language program for the navy. The navy could not draw upon the services of the Nisei as easily as the army for one simple reason. As the navy rapidly expanded in 1940–1941 it continued its traditional racial exclusion policies against Asians.²⁷

Another reason the ONI did not aggressively reach out to the Nisei may have to do with the Tachibana case. Exactly six months before Pearl Harbor, on June 7, 1941, Itaru Tachibana, a Japanese naval lieutenant commander, was arrested by the FBI in Los Angeles and subsequently arraigned on charges of espionage. The FBI investigation revealed that certain Japanese immigrants had very close connections with him. While noting that all military attachés, regardless of nationality, collect information on foreign military forces, historian Yuji Ichioka points out that in the case of Tachibana the ONI caught Tachibana red-handed in their sting operation paying for information.²⁸ By October 1941 when the Fourth Army gathered Nisei for language training at the Presidio of San Francisco, the ONI began training caucasian officer candidates across San Francisco Bay at the University of California.

In a 1945 *Harper's Magazine* article, Eugene V. Rostow wrote about the loyalty question of the Issei, or Japanese immigrants, and Nisei from another perspective. Because this article intended to capture the feelings of guilt among liberals a month after the war ended, it made an effort to deal with the country's "tragic and dangerous mistake" in relation to democracy and the nation's constitution. "The military authorities thought it would take too long to conduct individual investigations on the spot," Rostow explained, and so arrested the "whole group." Rostow questioned the legality of loyalty as a criteria for policy. "Disloyalty, even in the aggravated form of enthusiastic verbal support for the Axis cause, is not a crime in the United States," he concluded.²⁹

3. Nisei Women in the Military

Besides racial groupings, notions of gender also bring the military's discriminatory practices into sharp focus.³⁰ Before World War II, women's service in the U.S. military was limited to the Army Nurse Corps (ANC), the navy's enlistment of 13,000 women as "yeomanettes" to serve as clerks during World War I, and the War Department's hiring of women telephone operators and clerks as civilian workers with the American Expeditionary Forces in France. After a long and arduous debate, in May 1942, a Women's Army Auxiliary Corps (WAAC) was formed for service with the U.S. Army.³¹

Although the Waacs received military pay, food, housing and medical care, they did not have military status. The Waacs were paid less than male soldiers in equivalent grades until November 1942. Initially, the Waacs did not fall under the army's jurisdiction for promotion or punishment. Particularly in regard to overseas duty rules governing Waacs were different to those imposed on men. Throughout most of World War II, unlike servicemen, the auxiliaries could not receive overseas pay, government insurance, or veterans' hospitalization, and they were excluded from international agreements covering prisoners of war. If they were killed, their parents would not receive a death gratuity. By the time the first Nisei woman was inducted into the military, members of the WAC held the same military rank as servicemen, received the same pay, allowances, benefits and privileges, and were subject to the same disciplinary code.³²

In July 1942, the navy bypassed the auxiliary stage and established the Women Accepted for Volunteer Emergency Service (WAVES), whose members had the same status as male reservists. Because of their small numbers, black volunteers who joined the WAVES were not segregated in units. By November the Coast Guard had created its women's reserve (SPAR), and the Marine Corps

followed in February 1943, establishing the Marine Corps Women's Reserve. Only five black women served in integrated units of the SPAR, and the Marine Corps did not accept black or Nikkei women during the war years.³³

As Cynthia Neverdon-Morton points out, when compared to the number of white women who served in the military during WWII (over 360,000), the number of black and Japanese American women was extremely small, 4,600 and approximately 350 respectively.³⁴ The exact number of Nikkei is difficult to ascertain because they served in integrated units where their racial identity was not routinely noted.

Records indicate that the first group of Nikkei women inducted into the military were nurses. On February 21, 1943, the Office of the Surgeon General received authorization to assign qualified Nisei women to the Army Nurse Corps. Approximately two months later, the Military Intelligence Division approved Nisei women for service in the WAC which had succeeded the WAAC. In June, the Military Personnel Division announced that Nisei women would be accorded the same treatment and assignment as other women and would not be racially segregated. The quota for Nisei Wacs was set at five hundred. No quota was set for Nisei nurses.³⁵

As soon as the War Department allowed male Nisei to volunteer, the director of the WAC, Colonel Oveta C. Hobby, asked Assistant Secretary John McCloy to allow Nisei women to volunteer. McCloy told her there was "no reason it could not be done" and agreed to look into the matter. In March 1943 Hobby sent recruiting teams to the camps, hoping to find 500 women volunteers. Her teams were just as disappointed as those looking for Nisei men. Most Issei parents were reluctant to give up their sons; they resisted even more allowing their daughters to serve. In late 1943 the WAC began recruiting Nisei but found few volunteers.³⁶

The main catalyst for the induction of Nisei women into the ANC and the WAC was the difficulty that these organizations were experiencing in recruiting. This problem was apparently exacerbated for the WAAC/WAC by a slander campaign against servicewomen that began during the spring of 1943. Rumors that women in the military were of low moral character spread throughout the nation, and the news media depicted Waacs as sexually promiscuous. Consequently, an FBI investigation revealed that these false allegations originated with army servicemen who had negative attitudes toward the WAAC. The director of WAAC worked to counter the slander campaign. Nevertheless, it created a barrier to recruitment.³⁷

Nisei women, many of whom spoke excellent Japanese, offered a valuable source of students to be trained at the MISLS. When the MISLS recruiters visited the camps in 1943, Nisei women allegedly expressed an interest in attending the language school. Indeed, many of their brothers were already serving in the 442nd Regimental Combat Team or the MIS. According to McNaughton, when Eleanor Roosevelt visited the Gila River camp in April 1943, some Nisei women approached her to ask how they could join the WAC. A recruiter from MISLS took the next step: "Knowing that their chances were remote at the time, yet curious to check on their qualifications, I [gave] several of them examinations, and each one passed with flying colors. They were better qualified for this school than many of the boys we accepted."

In the spring of 1943 the MISLS recruiters accepted several Nisei women as civilian translators for the Army Map Service in Cleveland, Ohio, after a two-week orientation at Camp Savage. Sergeant Kawahara made a recruiting trip to Hawaii in October 1943 and reported that "a number of inquiries

were received from women of Japanese ancestry in regard to their acceptability as interpreters. They indicated a keen awareness of the important part they could play and were very anxious to be accepted for service in the [Women's Army Corps]. In many cases the inquiries were from college graduates, for the most part engaged in teaching or employed in business firms."³⁸

Much controversy surrounded the question of segregating Nisei women, but a racially segregated Nisei WAAC company never materialized. The WAAC director and other War Department officials concluded that there was no need to segregate Nisei Waacs because the number of Nisei women enlisting into the military would be small and it was therefore deemed economically impractical to segregate the Nikkei. Another rationale was probably the fear of increasing racial friction. As Moore notes, by the time Nisei women were being considered for induction, the War Department's policy of racial segregation had been criticized severely by the African American community. Nisei women themselves were voicing their opposition toward racial segregation as were some prominent white citizens.³⁹

The first Nisei Wacs began reporting to the school in the fall of 1944. On May 28, 1945, the first WAC class began with twenty-eight women students. As more women arrived, the class grew to forty-six.⁴⁰ Although a variety of military occupations were open to Nisei Wacs, the War Department sought to utilize the servicewomen primarily in clerical positions. According to McNaughton, the Military Intelligence Division appeared reluctant to place Nisei women in language training. If the school's graduates were to be sent to the battlefield as translators and interpreters at regiment and division level, training women who would be excluded in the first place seemed useless. Records assert that the Nisei Wacs were excellent students, and, in comparison to their male counterparts, supposedly more diligent. In November 1945 forty-one Wacs graduated; half went to Camp Richie, Maryland, to work at the Pacific Military Intelligence research Section. Some of these were later transferred to Fort Holabird, Maryland, for more translation duty. Three of the Wacs actually taught at the MISLS after basic training and doing clerical duties.⁴¹

4. Nisei Women in Occupied Japan

On November 1, 1945, thirteen Hawaiian Nisei women trained for censorship arrived in Japan. The 1946 order decreeing "no more enlisted WACs overseas" did not reach Fort Snelling in time to halt the dispatch of these linguists to the Allied Translator and Interpreter Section in Tokyo. Once in Japan, these women were given a choice of either returning to the U.S. and remaining in the service, or being discharged and remaining in Japan under a one-year contract. All thirteen accepted the civil service offer. The U.S. servicemen and women in Occupied Japan served mostly as translators and interpreters often taking the form of liaison with Japanese local government officials and censorship of newspapers, magazines, books as well as films and letters. As Moore indicates, the Wacs were thrilled to go to Japan and most reported that their families were equally excited.⁴² Moreover, probably substantive numbers of the local hires came from the Nisei who had spent the war in Japan. Unfortunately, research on this group of subjects is yet to come.

Hawaii born Sadae (Suehiro) Tagami experienced working for the occupation force in postwar Japan.⁴³ Her mother was a Nisei born in Maui and her father was a Japanese immigrant from

Yamaguchi prefecture. Sadae graduated from McKinley High School in 1938. She also attended Hongwanji language school. After high school Sadae came to Tokyo and attended a home economic school in Mita and Kyoritsu, a girls' school in Kanda. After about three years, in 1941 she returned to Hawaii on the ship Tatsutamaru because "war clouds" were looming by that time. Back in Hawaii she again attended a sewing school, which she did not enjoy so much, and also worked part-time at the Hongwanji school as a "messenger girl."

It was probably a year after from the Pearl Harbor attack when the OWI contacted Sadae. She went to an interview and was recruited to broadcast propaganda materials, such as music and love letters, to Japanese soldiers to make them homesick and demoralized. Sadae thinks that she was chosen because of her fluency in Japanese. She recalls that among her colleagues were Japanese language teachers who had lost their jobs with the outbreak of the war. Eventually Sadae's boss at the OWI told her to take the exam to work for the Department of the Army Civilian as a censor. Sadae became one of the second group of fifteen Nisei females from Hawaii to work as linguists in Occupied Japan. In Japan Sadae censored movies for a short time and then shifted to censoring radio scripts. Her bosses were non-Nikkei military men who "knew nothing" about Japanese culture and language. She had officer's privilege, but worked in civilian attire.

On one occasion Sadae and a few other Nisei female linguists wore military uniform when engaging in translation duty attending a body strip search of diplomats' wives arriving from Europe and other places. The search was for contrabands (money, jewelry, cameras, etc.) that the Japanese diplomats and their spouses returning to Japan were desperately trying to bring back. Sadae recalls a wife of a diplomat asking her if she was not ashamed of what she was doing. Aware that the wife had noticed Sadae's "Japanese face," Sadae remembers that she simply replied she was an American and it was her job.

In such cases the Nisei were required to wear their uniform to work perhaps because problems of identity and nationality were anticipated. An individual's identity or belonging and her/his outfit play out in different ways. Moore depicts how a Nisei woman dated a white soldier in civilian clothes, and was stopped by the military police as well as the Japanese police. The insinuation was that she, a Japanese, should not be with a white soldier.⁴⁴ At the same time, an American uniform was in some ways a shield against racial antagonism by white male soldiers because it might have (or might not have) prevented servicemen from making racial slurs if they knew they were dealing with Americans.

In 1947 Sadae married Kan Tagami whom she had met in Japan. Her contract as a censor was for eleven months, but she worked an extra few months before she quit when she was pregnant with the first of her five children. Sadae and Kan, who served as a personal interpreter-aide to General Douglas MacArthur, lived on American base in Japan for approximately twenty-five years. At one point, for three to four years Sadae worked as a translator for the CIA; her cover being a civilian employee for the air force. Most of her time in Japan, however, Sadae was a homemaker. Her life seemed to have revolved around socializing with other Americans residing on base where more security and privileges were granted than living outside of the American base. Sadae returned to Hawaii with her husband and children in 1978.

Conclusion

The connection of race and nationalism, however contradictory, is an integral matter in defining the relationship between the Nisei and the military mostly because the issue of loyalty is intricately combined with race politics. Nevertheless, for the exactly same reason of possessing personal connections to and knowledge of the enemy's culture and language, the Nisei were simultaneously both denied and accepted into the military. Consequently, the War Department's need for Japanese linguists, particularly male linguists, superseded its policy of excluding Nikkei from military service. It is clear that various groupings supposedly based on notions of race do not determine or reflect an individual's political belonging.

Researchers have only begun to pay closer attention to the civilian Nisei, both male and female, hired by the occupation force in Japan. Personal recollections, such as Sadae Tagami's, offer extremely valuable insights into experiences in the military during a historic era.

Although personal accounts may be utilized to construct national or other group causes, they may also be used to deconstruct various political agendas often seen as controlling individuals. Personal choices are often political, but they are made because of numerous factors. Advancing a group cause may be an important element in shaping someone's life, but a person does not belong to a single group that is always exclusive of other belongings. Regardless of various contentions of political or racial groupings and being grouped, in Sadae's case, belonging to her Nikkei community, attaining ties to Japan, and acquiring Japanese culture and language seem to have coexisted with her belonging to her community in Hawaii and her commitment to the U.S. despite the anti-Japanese/Nikkei climate of the time. In other words, choosing to work for the armed forces did not signify the denial of her other cultural belongings, which consequently became advantages for her to exercise her talents and skills. A clear-cut labeling of belonging would be insufficient in describing an aspect of history or a particular individual.

A person may be seen either as being moved around in a structurally and socially imposing system, as a victim of prejudice, or as a subject with agency. While all of these approaches or frameworks have their merits, the analysis of memories of personal experiences may not be generalized. In terms of Nisei women, as well as men, involved in the occupation of Japan, more in-depth studies are required to unveil how people actually lived and made decisions without hastily echoing national or other group slogans. Personal accounts should be used to provide some kind of understanding of the meanings a person attaches to war experience and the way in which both the constraints and opportunities that characterize an individual's mobility are negotiated.

Notes

- ¹ Joseph D. Harrington, *Yankee Samurai: The Secret Role of Nisei in America's Pacific Victory* (Detroit: Pettigrew Enterprises, Inc., 1979).
- ² For instance see Tad Ichinokuchi ed., *John Aiso and the M.I.S.: Japanese-American Soldiers in the Military Intelligence Service, World War II* (Los Angeles: The Military Intelligence Service Club of Southern California, 1988); Francis Y. Sogi, *Riding the Kona Wind: Memoirs of a Japanese*

- American* (New York: The Cheshire Press, 2004); Stanley L. Falk and Warren M. Tsuneishi, eds., *MIS in the War Against Japan: Personal Experiences Related at the 1993 MIS Capital Reunion*, “The Nisei Veteran: An American Patriot,” (Vienna, VA: Japanese American Veterans Association of Washington, D.C., 1995); The MIS–Northwest Association, *Unsung Heroes: Military Intelligence Service, Past, Present, Future* (Seattle: MIS–Northwest Association, 1996).
- ³ James C. McNaughton, *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service during World War II* (Washington D.C.: Department of the Army, 2006).
- ⁴ Nobuhiro Adachi, “Hawai nikkei amerikajin gogakuhei no touzai bunka kouryu: jinsei wo kaeta taiheiyoosenso to nihongo [The East–West Cultural Exchanges of Hawaii's Japanese–American MIS (Military Intelligence Service) Linguists: How the Pacific War and the Japanese Language Changed Their Lives],” in *Gendai no touzai bunka kouryu no yukue* [Aspects of the Future of Cultural Exchanges: The Light and Dark Sides of Globalization] (Osaka: Osaka kyoiku tosho, 2008), 35 – 62.
- ⁵ Brenda L. Moore, *Serving Our Country: Japanese American Women in the Military during World War II* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2003).
- ⁶ Moore, *Serving Our Country*, 165.
- ⁷ McNaughton, *Nisei Linguists*, 21, 24.
- ⁸ Rasmussen had emigrated from Denmark to the U.S. in 1922 and enlisted in the army. He spent four years in Japan learning the language and observing the Japanese army. He returned to the U.S. in 1940 and was promoted to major on October 10, 1941.
- ⁹ Brigadier General John Weckerling, “Nisei Language Experts: Japanese Americans Play Vital Role in U.S. Intelligence Service in WWII,” in *John Aiso and the M.I.S.: Japanese–American Soldiers in the Military Intelligence Service, World War II*, ed. Tad Ichinokuchi (Los Angeles: The Military Intelligence Service Club of Southern California, 1988), 186 – 200. Weckerling, then a forty four–year–old infantry officer, had enlisted in 1917 and subsequently earned a commission.
- ¹⁰ McNaughton, *Nisei Linguists*, 25 – 27. According to McNaughton, the MISLS press release of October 22, 1945 and the *MISLS Album* give the number of Nisei soldiers interviewed at this time to be 3,700. Weckerling uses 1,300 in his letter of December 31, 1941.
- ¹¹ Among the sixty students were two white students.
- ¹² For a biographical story of Aiso, see John F. Aiso, “Participating in the Main Stream of American Life amidst Drawback of Racial Prejudice and Discrimination: John F. Aiso, a Leader of the Niseis,” in *John Aiso and the M.I.S.: Japanese–American Soldiers in the Military Intelligence Service, World War II*, ed. Tad Ichinokuchi (Los Angeles: The Military Intelligence Service Club of Southern California, 1988), 4 – 35.
- ¹³ A 62 – page Sosho Book (c. 1943) (#95.85.6) is in the Japanese American National Museum’s collection. Also in the museum’s collection is a textbook “Allied Translator & Interpreter Service” (#96.10.3) prepared by the Linguist Training Control Section, General Headquarters, Far East Command.
- ¹⁴ McNaughton, *Nisei Linguists*, 27 – 28
- ¹⁵ McNaughton, *Nisei Linguists*, 35 – 38. Of the first class of fifty–eight Nisei, the number of Kibei is uncertain.
- ¹⁶ See Aiso, “Participating in the Main Stream of American Life Amidst Drawback of Racial Prejudice

- and Discrimination,” 16, 23; McNaughton, *Nisei Linguists*, 305.
- ¹⁷ McNaughton, *Nisei Linguists*, 40.
- ¹⁸ [Ringle, Kenneth D.], “The Japanese in America: The Problem and the Solution,” *Harper’s Magazine*, 185 (October 1942): 490.
- ¹⁹ U.S. Department of War, *Final Report: Japanese Evacuation from the West Coast* (Washington D.C.: Government Printing Office, 1943), 9.
- ²⁰ J. L. DeWitt, “Memorandum: Subject: Evacuation of Japanese and Other Subversive Persons from the Pacific Coast, February 13, 1942,” in *American Concentration Camps, Vol. 2: January 1, 1942 – February 19, 1942*, ed. Roger Daniels (New York: Garland, 1989), 2.
- ²¹ Morton Grodzins, *Americans Betrayed: Politics and the Japanese Evacuation* (Chicago: University of Chicago Press, 1949), 407.
- ²² Stetson Conn, “Japanese Evacuation from the West Coast,” in *The United States Army in World War II: The Western Hemisphere: Guarding the United States and Its Outposts*, eds. Stetson Conn, Rose C. Engleman and Byro Fairchild (Washington D.C.: U.S. Army, 1964), 118.
- ²³ Peter Irons, *Justice at War: The Story of the Japanese Internment Cases* (Berkeley: University of California Press, 1983), 30.
- ²⁴ McNaughton, *Nisei Linguists*, 114 – 115.
- ²⁵ McNaughton, *Nisei Linguists*, 147.
- ²⁶ Moore, *Serving Our Country*, 118.
- ²⁷ McNaughton, *Nisei Linguists*, 28 – 29. Filipinos were allowed to serve in the navy, but only as cooks and mess stewards.
- ²⁸ Yuji Ichioka, “National Security on the Eve of Pearl Harbor: The 1941 Tachibana Espionage Case and Implicated Issei Leaders,” in *Before Internment: Essays in Prewar Japanese American History*, eds. Gordon H. Chang and Eiichiro Azuma (Stanford: Stanford University Press, 2006), 204, 220.
- ²⁹ Eugene V. Rostow, “Our Worst Wartime Mistake,” in *Harper’s Magazine* 191 (September 1945): 196.
- ³⁰ In keeping with the military’s racial policies, black servicewomen were basically placed in segregated units. Black women continued to pressure for full desegregation of the armed forces for women and men. President Harry Truman’s Executive Order 9981, proclaiming the desegregation of the armed forces, was issued in 1948. Full official desegregation was not realized until September 1953, when the last segregated schools operated by the armed forces (for dependents of military personnel) were integrated.
- ³¹ The Women’s Army Auxiliary Corps (WAAC) existed from May 14, 1942 to September 30, 1943, when it was replaced by the Women’s Army Corps (WAC). In this article, the acronym WAAC/WAC refers to the organization and Waac/Wac (lowercase) refers to individual enlisted women within the corps, unless quoted otherwise.
- ³² Moore, *Serving Our Country*, 13 – 14. Female nurses were not accorded military benefits, and female physicians were barred from entering the Army Medical Corps.
- ³³ For details on women entering the U.S. military, see for instance Maureen Honey, *Creating Rosie the Riveter: Class, Gender, and Propaganda during World War II* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1984); Leisa D. Meyer, *Creating GI Jane: Sexuality and Power in the*

- Women's Army Corps during World War II* (New York: Columbia University Press, 1996); Paula Nassen Poulos, ed., *A Women's War Too: U.S. Women in the Military in World War II* (Washington D.C.: National Archives and Records Administration, 1996).
- ³⁴ Cynthia Neverdon-Morton, "Securing the 'Double V': African-American and Japanese-American Women in the Military during World War II, in *A Women's War Too: U.S. Women in the Military in World War II*, Paula Nassen Poulos ed. (Washington D.C.: National Archives and Records Administration, 1996), 331, 344 – 346.
- ³⁵ Moore, *Serving Our Country*, 17 – 18. Unlike the WAAC, the Army Nurse Corps apparently did not make any special effort to recruit from the Nikkei community.
- ³⁶ McNaughton, *Nisei Linguists*, 316.
- ³⁷ Meyer, *Creating GI Jane*, 39; Moore, *Serving Our Country*, 19.
- ³⁸ McNaughton, *Nisei Linguists*, 143 – 144.
- ³⁹ Moore, *Serving Our Country*, 20 – 21, 108. All members of the multiracial Hawaiian WAC contingent were assigned to the same company, which also included some whites from the mainland. Unlike other Nisei Wacs, those who traveled with the Hawaiian contingent were assigned together. The segregation of Nisei servicemen was also a controversial issue for the War Department.
- ⁴⁰ McNaughton, *Nisei Linguists*, 317 – 318. The WAC class included Sergeant Rhoda Knudten, who had been born in Japan of Lutheran missionary parents and had spent her entire life in Japan until attending college in the U.S. See also Neverdon-Morton, "Securing the 'Double V,'" 341. Neverdon-Morton counts the number of Nisei Wacs at the MISLS in November 1944 to be forty-seven, in addition to three white women and one Chinese American woman.
- ⁴¹ McNaughton, *Nisei Linguists*, 316 – 318, 420 – 421; Moore, *Serving Our Country*, 113 – 114.
- ⁴² Moore, *Serving Our Country*, 124. This group included eleven Nisei, Sergeant Rhoda V. Knudten and one Chinese American. See also, McNaughton, *Nisei Linguists*, 421; Neverdon-Morton, "Securing the 'Double V,'" 341.
- ⁴³ Sadae Tagami, interview by James Tanabe, MIS Veterans Club of Hawaii, July 17, 2004; Kan Tagami, interview by James Tanabe, MIS Veteran Club of Hawaii, January 22, 2003 and February 5, 2004; Sadae Tagami, interview by Hisami Hasegawa and Tomoko Ozawa, March 27, 2008. All quotes of and references to Sadae Tagami are obtained from these interview records.
- ⁴⁴ Moore, *Serving Our Country*, 128.

米軍の二世通訳・翻訳者

小澤智子（武蔵野美術大学・専任講師）

本稿は、アメリカ合衆国の軍事情報部（MIS, Military Intelligence Service）に、おもに日本語・英語の通訳・翻訳などを行う仲介役として二世がかかわっていたことについて焦点を当てる。とくに二世と MIS の関係において人種偏見がいかに関与を及ぼしたかを考察する。さらに、第二次世界大戦中と占領期に米軍の仕事にかかわった二世女性に関する歴史研究が限られていることを踏まえ、サダエ・タガミ（旧姓スエヒロ）氏のインタビュー内容を紹介する。個人が語る経験を国家や集団の言説に集約するのではなく、さまざまな条件のなかで個人が多様な所属意識を保持し活かしている様子として扱う。

キーワード：日系アメリカ人、二世、MIS、軍事情報部語学学校、語学兵、ハワイ、占領期

〈研究ノート〉

日系アメリカ人と日本との絆 — MIS として占領下の日本に駐留した二世¹ —

増田直子（日本女子大学・非常勤講師）

〈目次〉

はじめに

1. インタビューした二世のバックグラウンド
 2. 日本での任務
 3. 日本の印象
 4. 日本人との接触、印象
 5. 除隊後の日本との関係
- おわりにかえて

キーワード：日系アメリカ人、二世、MIS、占領期、日米関係

はじめに

第二次世界大戦終戦まもなくの1945年8月30日にダグラス・マッカーサーを連合国最高司令官とする連合軍総司令部（GHQ）が日本に設置された。サンフランシスコ講和条約および日米安全保障条約が発効した1952年4月28日までGHQによる対日占領政策は続き、いわゆる「進駐軍」としてアメリカ軍も日本に駐留した。その中には軍事情報部（Military Intelligence Service, MIS）に所属していた日系アメリカ人も含まれていた。軍事情報部語学学校（Military Intelligence Service Language School, MISLS）で日本語の訓練を受け終わったばかりの二世や既にアジアの各戦地で日本軍に対する投降のビラ作りや説得、捕虜の尋問などに従事していた二世が対日占領政策に参加することとなったのである。

本稿では、占領下の日本にMIS兵として駐留した日系アメリカ人と日本との絆がどのようなものであったかを考察したい。占領下の日本にMIS兵として駐留した二世を対象に筆者はインタビューを行った（2008年8月、シアトルにて）²が、その結果およびサンフランシスコの日系アメリカ人歴史協会（National Japanese American Historical Society, NJAHS）（サンフランシスコ）の史料をもとに、彼らがMISの任務を通じて日本や日本人に対してどのような感情を持ち、どのように日本とのつながりを築いたのかを述べたい。

インタビューの対象者は占領下の日本に駐留した経験を持つ元MIS所属の二世である。各インタビューは1時間前後であり、「日系アメリカ人と日本との絆」をテーマに9名の対象者に彼らの生い立ち（両親の出身地、日本語教育、第二次世界大戦中の経験、入隊の時期やきっかけ）、日本での任務、日本の印象、日本人との接触、除隊後の日本とのつながりについて質問した。インタビュー対象者の提供による個人的な史料等も用いている。

1. インタビューした二世のバックグラウンド

今回インタビューに応じていただいた二世は 80 歳代の方たちだった。彼らの両親の出身地、彼ら自身の生地は様々であり、両親の考えや生まれ育った場所によって受けた日本語教育は異なっている。カタシ・オーイタとジェームス・ドイはそれぞれカリフォルニア州ワットソンビルとローダイ、シグ・タナギとアート・ヨロズはワシントン州シアトルの出身で日系人が多い地域であったこともあり、親に言われて日本語学校に通った経験を持つ。特にタナギの母親は日本語教師であり、彼女を喜ばせるために日本語学校に行ったり、習字を習ったりした。サンフランシスコ出身のミツエ・マツイは、広島出身の父親が医者の家系ということもあり、子どもの教育に熱心で習字を習わされた。その一方で、サム・ミツイは、生まれ育ったワシントン州スカイコーミッシュに日系人家族が 2 軒しかなかったため、日本語学校に通った経験はなく、家庭でも日本語を話すことはなかった。ハワイのマウイ島出身のケンイチ・サトウは、1930 年代に家族で日本にいる祖父母を訪ねた経験を持つ。オレゴン州フッドリバー出身のタク・マツイは 3 歳から中学校まで日本の祖父母に育てられたいわゆる「帰米」である。

出身地が異なることから、彼らの第二次世界大戦中の収容経験の有無、MIS への入隊のきっかけや入隊の時期も様々である。日本語が堪能なタク・マツイは、1942 年 3 月に既に徴兵され、MISLS で日本語を教える職に就いた。1942 年 9 月までに日本人を祖先とする者は「敵性外国人 (4C)」と分類されていたが、例外として特別に徴集されたケースに当たる。マツイはフォート・ルイスで訓練を受けた後、1943 年 9 月に MIS 配属になり、MISLS のあるミネソタ州キャンプ・サヴェッジに、そして学校の移転とともに同州フォート・スネリングへと移り、戦争が終わるまでそこで日本語を教えた。

イヌイ、オーイタ、ヨロズ、ドイは大学在学中に入隊した。シアトルに住んでいたイヌイは、教育を受け続けるべきだという母親の言葉に従って西海岸からの立ち退き令が施行される前に、当時西海岸から軍事指定地域外の大学に学生を入学させる活動をしていたフロイド・シュモーらの組織の助けでギルフォード大学（ノース・カロライナ州）に入った。一旦収容所に入ったオーイタとヨロズは軍事指定地域外にあるクエーカー系の大学であるスワスマア大学（ペンシルヴァニア州）へ、ドイはマスキングム大学（オハイオ州）へ入学した。第二次世界大戦中に軍事関係の研究をしていたシカゴ大学やマサチューセッツ工科大学等は日系人の入学を拒否していたことや、立ち退きの始まった頃からクエーカー教徒の組織が日系人学生の支援をしていたことから、二世は収容所からキリスト教系の小規模な大学に入学することが多かった³。ドイやヨロズによると収容所の生活が「つまらない」ので、「収容所を出るため」に希望とやや異なっても奨学金を得て大学に入学した。

オーイタの場合、MIS が接触してきて、1944 年 8 月に徴兵された。彼は軍に入る前に一旦収容所に戻り、親に会っている。ドイとヨロズも徴兵された。徴兵の際に MIS に入って太平洋戦線で語学兵となるか 442 部隊に入ってヨーロッパ戦線で戦うかの選択が与えられた。(MIS Biography Questionnaires, Box 1) ドイはドイツ語、フランス語、スペイン語が堪能で、日本語が「一番不得手」なので 442 部隊入隊を希望したが、1944 年に MIS に入れられたと話している。ヨロズも「他に選択肢がなかった」と言って 1945 年に入隊した。イヌイは自分の忠誠心を示すために 1944 年に MIS へ志願した。ミツイも 1945 年に収容所から志願している。収容所から志願したことについてミツイの両親は何も言わなかったし、戦後も家族とは戦争中の話や従軍のことについて話をしていないと語っている。ミツエ・マツイは収容所からソルトレークシティでタイプライターの仕事を得たが、もっと「きちんとした仕事」がほしいと 1943 年に MIS に志願した。女性が軍に志願することについて家

族がどのように思ったかについて彼女は語っていないが、キャンプ・サヴェッジで知り合ったタク・マツイとの結婚を収容所に戻って両親に承諾してもらったことから軍にかかわることに必ずしも否定的だったわけではないと推測できる⁴。MISへの入隊のきっかけは多様であるが、徴兵された場合でも特に不満を持ってはおらず、当たり前のこととして受け取っていた。

2. 日本での任務

1945年8月に第二次世界大戦が終戦を迎え、日本がGHQの占領下に置かれた。占領政策において言語の重要性を認識していたアメリカ軍はMIS所属の二世を必要としていた。1945年6月から8月の間に早速マニラにMISLSから1,073名の二世を送り込んだ。(McNaughton 2006:427 - 429) オーイタ、タナギ、イヌイ、ドイもそのケースにあたり、1945年8月にフィリピンに派兵された後、9月に最初のグループとして日本の「連合国翻訳通訳部門(ATIS)」に送られた。日本語ができる者が不足している状況は続き、1945年6月にハワイから従軍したサトウは終戦後の11月にMISLSに送られ、日本語の集中的な訓練を受けた。彼は自分が日本へ送られることはわかっていたという。

今回インタビューした元MIS兵はまず東京にあるATISに配属され、人によってはその後地方もしくは朝鮮やフィリピンに配属された。彼らの多くは日本語能力を活かし、通訳や翻訳の仕事に従事した。翻訳の対象は日本政府や軍の書類および関係者の日記、新聞だった。新聞の翻訳は発行後の検閲の意味合いがあった。ドイは当時文部省発行の小学校1年生から師範学校までの教科書の英訳をチェックする仕事にあたった。桃太郎や教育勅語は軍国主義につながるとして軍からクレームがあったとドイは話している。ヨロズは裁判用の書類の翻訳をしていたが、帰米や現地の日本人と一緒に仕事をした。日本語能力を補うためにMIS兵はより日本語が堪能な帰米や現地の日本人と組んで仕事をするのがあった。オーイタやイヌイも地方で翻訳の仕事をした際に重要な仕事は帰米がしたり、地元の日本人を雇ったりしたと述べている。通訳の仕事を長野でしたイヌイは、軍が病院施設や医療の状況を調査する際に医者や通訳をしたり、DDTを散布したりした。

通訳や翻訳の外に、朝鮮半島や中国からの引揚者の世話の仕事があった。タナギは1946年1月から8月まで朝鮮半島に配属された。この時点ですでに北緯38度線にはソ連軍がおり、現地に取り残されていた日本人を汽車に乗せて「京城」に送り、博多まで船に乗せる仕事をした。タク・マツイも函館で一時期ソ連からの引揚者の世話をする仕事をしていた。

引揚者や難民を世話する仕事には、彼らを助けるというだけでなく、特にソ連から戻ってきた捕虜を審問し、監督するという側面があった。1946年から50年代の初めまでにソ連から約70万人が日本に戻ってきており、その中に共産主義に教化された兆しのある者はいないか、ソ連について機密情報を持った者はいないかを審問する仕事がMIS兵に課された。GHQの情報機関(G2)はソ連からの引揚げが始まる前から準備を始め、MISは引揚者への審問・調査を専門に行うチームを編成した。(McNaughton 451; 菊池 1995:172 - 183) その調査チームの派遣先だった佐世保や引揚者が入港する舞鶴に配属されたヨロズは、元捕虜からソ連国内の状況やソ連軍の状況を聞き取る仕事をした。彼は報告書を作成し、興味深いケースがあれば東京に知らせた。その場合、東京でもう一度審問が行われたが、これにサトウは従事していた。また、ミツイはスパイ活動や破壊活動に関する審問や軍需品の没収の仕事に従事していた⁵。アメリカが日本をアジアにおける反共の拠点として見なし始めると同時に、日本国内での共産主義活動の封じ込めに力をいれていた表れである。

元MIS兵は日本での任務に関しても特に不満を持っておらず、むしろ誇りを持っていた。彼らはマッカーサーの指導の下で占領政策はうまくいっていたと考えている。占領初期においては、アメ

リカ兵は野蛮であるという戦時中の日本のプロパガンダを多くの日本国民は信じていたが、占領政策は彼らの不安や恐れを取り払うことに成功した。オーイタやミツイは日本国民との関わりを配慮し、占領政策は円滑に行われたと言っている。MIS兵は占領政策を滞りなく進め、日本の復興に貢献したと自負している。(MIS Biography Questionnaires, Box 1)

3. 日本の印象

日本軍の真珠湾攻撃に端を発した太平洋戦争の開始によって日系アメリカ人は戦争中苦しい立場に追いやられた。西海岸では強制立ち退きおよび収容が行われ、それ以外の地域でも日系人に対する偏見や差別、猜疑が強まった。多くの日系人は日本に対して複雑な感情を持つこととなった。しかしそうした感情にもかかわらず、二世 MIS 兵は与えられた任務をこなした。

MIS 兵は終戦に対して安堵の気持ちを抱いた。それは単純にアメリカが勝利したということではなく、殺し合いをしなくてよくなった、除隊して家に帰れる、収容所に入れられた日系人が新しく生活を再び始められるという気持ちが強かった。(MIS Biography Questionnaires, Box 1) オーイタは沖縄戦の悲惨な状況を聞いていたため、戦争が終わったことを喜んだ。「敵国としての日本」といった悪感情はなく、戦時中の敵から戦後は味方になるという考えを持っていた。こうした気持ちは日本が自分の親の国であり、何らかのつながりを感じていたことがうかがえる。

MIS 兵にとって占領下の日本への配属は自分の祖先の国を訪れる機会であり、彼らは日本に関心を寄せていた。タナギは3ヶ月 ATIS で働いた後、配属先の朝鮮半島で除隊できたが、日本をもっと見たいという思いから6ヶ月延長を願い出た。MISLS で教鞭を取っていたタク・マツイは、既に日本に配属された戦友の何人かに「有益な経験だから」と誘われて日本行きを志願した。

敗戦で荒廃した日本の様子は、初めて日本を訪れた二世にも戦前に日本で過ごしたことがある帰米にも強烈な印象を与えた。多くの MIS 兵が横浜から東京に入って、焼け野原と化し、ほとんど建物がない都市部を目の当たりにした。接収された NYK ビルに ATIS が置かれ、そこで MIS 兵は働いたが、その真向かいにある東京駅は住むところのない人であふれていた。食べ物がなく困っている人たち、中にはゴミ漁りをしている子どもの姿をしばしば見かけたと何人もの元 MIS 兵は語った。こうした悲惨な様子を見て、マツイやドイは「戦争に負けると哀れなもの」「戦争に負けるものではない」という感慨を持った。戦前の日本を知っているマツイは、彼のいた昭和9年頃の日本は軍人が威張っていたが、食べ物は十分にあったのに、戦後はモノが全くなく「雲泥の差」だと言っている。日本に初めて来たイヌイは東京－横浜間が焼けて何も無いことにショックを受け、日本は再建できないのではないかと思った。サトウは移動の際に GHQ 専用の列車のそばに食べ物を求めて子どもや女性が寄ってきたので、キャンディを投げてやった。ヨロズも基地に食べ物漁りに子ども連れで来る人を見て、悲しい気持ちになった。ミツエ・マツイは日本にいる兄から手紙をもらい、到着前にある程度状況を知っていたが、それでも実際に横浜を見て予想以上に戦争で疲弊していたことを知った。彼女は兄や親戚がいる広島がどうなっているのかを知りたかった。

地方は爆撃を受けていない場合も多く、都市部ほどには食べ物にも困っていなかったが、原爆の被害を受けた広島市や長崎市は例外だった。呉の近くの海軍基地に配属されたオーイタは、草も生えておらず、鳥もいない広島市を見て、「完全に死に絶えている」と形容した。

元 MIS 兵の日本の最初の印象は敗戦による荒廃や悲惨さであったが、日本食や日本文化を楽しんだことも心に残る出来事として記憶されている。食料不足や安全性の問題のために日本の食べ物を食べることは制限されていたが、オーイタやイヌイは日本食を楽しんだ。ミツイの部隊には日本人

のコックがおり、彼は日本食を食べた。イヌイは日本に来た当初は特に仕事もなく、日本にいた二世と一ヶ月間観光をした。築地で刺身を食べ、日本の風呂に入って楽しんだ⁶。オーイタは京都に配属され、戦災にあっていない京都の町を見、基地では浴衣を着た。また、日本映画を初めて見た。

このように元 MIS 兵は荒廃した日本に強い衝撃を受けた。そこには「かつての敵国」という感情はなく、同じ人間として悲しいという気持ちが強かった。他方、彼らは日本という国や文化に対する関心や好奇心を持っていた。彼らは GHQ の一員であったために当時の一般の日本人よりもかなり恵まれた環境にあったこともあるが、日本で快適に過ごし、良い印象を持ち続けている。

4. 日本人との接触、印象

元 MIS 兵にとって日本配属は先祖の国を見る機会だけでなく、離れて暮らしている家族や親戚に会う機会でもあった。仕事の合間に家族や親戚を訪ねたり、連絡が途絶えていた家族の居場所を探したりした。タク・マツイ、ミツエ・マツイ、ドイ、サトウは親や兄弟が日本にいた。サトウには戦前に日本の祖父母の元に送られた姉妹がおり、ミツエ・マツイには兄がいた。子どもを日本に送った彼らの親は頻繁に日本と連絡を取っており、日本の苦しい状況を知っていた。サトウは食べ物を持って姉妹を訪ねたが、砂糖がほしいと言われて戦争の影響を垣間見たと言っている。タク・マツイの両親と妹は戦前に日本に戻ってきていたので、マツイは彼らの住む福岡県を訪ねたところ「よく帰ってきた」と喜ばれた。ドイの母親と妹も戦前に日本に戻っていた。彼は広島に親戚に手紙を出し、はるばるお土産を持って訪ねていったが、母親や妹に会うことができなかった。後に妹の居場所がわかったが、母親は亡くなっており会うことができず、お墓の場所を知った。

他の元 MIS 兵も日本にいる親戚を訪ねている。彼らの場合も本人ではなく、家族が日本の親戚と連絡を取っており、親に訪ねていくように言われていた。親戚の多くは地方に住んでいたため、都市部ほど戦災を被ってはいなかった。オーイタやミツエ・マツイは広島に親戚がいたが、彼らも無事だったという。地方の方が食べ物にそれほど困っていないとはいえ、親戚を訪れる際に彼らは食べ物を持っていった。アメリカの食べ物を持って行って珍しがられたり、喜ばれたりした。彼らは初めて訪れる場所で、初めて親戚に会った。タナギは親戚の家の畳にダニがおり、天井が煤で黒くなっていたと言う。親戚は好意的で礼儀正しく遇してくれたが、食事の時におばと一緒に食べないことを奇妙に感じたと言っている。イヌイは言う。全般的に親戚は親切にしてくれたという印象を元 MIS 兵は持っていたが、ミツイやイヌイは若かったため当時は状況をよくわかっていなかったと言う。親戚の中には日本軍に従軍したり、軍関係の仕事に就いたり、シベリアで捕虜になっていたたり、被爆したりした者がおり、親戚がどう考えていたのか実際のところはわからなかった。しかし、そのことについて直接彼らが何かを親戚から言われることはなかった⁷。

都市部に住んでいた親戚は、地方とは対照的に皆一様に困窮していた。サトウやヨロズは親から東京の親戚の連絡先を聞いて訪ねた。東京の親戚は家を失い、生活に困っていた。彼らは食べ物をたくさん持っていき、感謝された。

MIS 兵にとって家族や親戚に会ったことは、久しぶりに会えて単純に嬉しいというものではなく、ここでも国家間の戦争に翻弄され、その痕を見ることも意味した。しかし、彼らは家族や親戚に会えたことそのものを肯定的に捉えていた。

勤務地や親戚を訪ねて地方に行く列車の中で MIS 兵は一般の日本人にも接触した。全般的に元 MIS 兵は不快な経験をしたという思いを持っておらず、好意的に扱われ、悪感情を向けられることは少なかった。日本人に対して礼儀正しく、勤勉という印象を彼らは持っている。ミツイは周囲が

自分と同じ顔立ちや肌の色をしていて、アメリカにいた時とは異なって「自分はもうマイノリティではない」と感じた。イヌイは日本に着いた時はどう受け入れられるかわからなかったが、すぐに受け入れられたと言う。元 MIS 兵はマッカーサーの政策が良く、占領政策がうまくいっていたから日本国民は占領を受け入れていたと考えている。

列車に乗る際も GHQ 専用車両とすし詰めになっている日本人用車両に別れ、待遇の差が明らかでも、日本人はそれを受け入れ、不満をあからさまにしなかった。混雑した車両に乗っている日本人は GHQ 専用車両に乗るミツイを「裏切り者なのか」という不信の目で見たが、彼は嫌な思いをしたことはないと言う。ミツイやタナギによると日本人は嫌悪感を見せたり、気持ちを表に出したりはしなかった。タク・マツイは福岡にいる家族に会いに行く時小倉から先の GHQ 専用列車がなく軍専用の席を作ってもらった。周囲は日本人がたくさん立っており、その中にいたおばあさんたちに席を譲った。彼女らの反応には敵意はなく、むしろ恐れ多いというものだった。

日本人と同じ顔でアメリカの軍服を着た MIS 兵に日本人は様々な反応を示した。ドイは広島で道を尋ねようとした時に日本の憲兵と間違われ、逃げられたという経験がある。ミツエ・マツイは「パンパン・ガール」に間違えられたことがあった。タナギは服装でアメリカ人であることをわかってもらったが、日本語を話したら驚かれた。これらは、アメリカ軍の一員となっている二世ひいては二世の存在そのものを多くの人が知らなかった例である。二世のことをどう理解してよいかわからなかったのであろう。他方、移民イコール貧しい人といった偏見を持っていた日本人もいた。こうした移民に対する偏見のために時折白人や日本人より下に見られたとイヌイは語る。ヨロズは ATIS で翻訳の仕事と一緒にした東京大学の学生から「移民の子のくせに」と言われたことがあった。

こうした反応にもかかわらず、MIS 兵は職場や日常生活の場で日本人に悪感情を持つことなく接した。特にタク・マツイは「日本で育ったので日本人と同じ」と感じていたため、困っている人たちが強く印象に残っていた。床屋で散髪をした時にお金よりもタバコをと言われ、そんなに困っているのかと驚いて散髪料とタバコの両方を渡すと「あなたのような人は初めてだ」と泣かれた。また、銀座の露店で勲章を売っている人に大事なものだからそんなことをしてはいけないとたしなめ、結局一時的に預かるとして言い値の何倍ものお金を渡すと感極まって泣かれたこともあった。裁判にかけられる憲兵隊の軍曹への寛大な処遇を写真機を持って頼みに来る妻、大学の工作機器を返してもらうために無理して接待をしようとする大学教員、銀座に行く途中のガード下で声をかけてくる女性の姿を見て、「プライドのなくなった人を見ていられない気持ち」になった。こうした感情は帰米ならではのものかもしれない。

5. 除隊後の日本との関係

多くの元 MIS 兵は除隊後に復員兵援護法（GI 法）で大学に入り、中断されていた学業を続けた。今回インタビューをした人達もマツイ夫妻を除いて皆大学に戻っている。ミツイは工学を専攻していたが、仕事がないと言われ工業デザイン専攻に変えてワシントン大学を卒業した。就職の機会があるため二世に当時人気があった経営学をイヌイはワシントン大学で専攻した。家族が西海岸に戻っていたので、元 MIS 兵もそこに戻って近くの大学に入学したことが多い。イヌイは両親がシアトルに帰還しており、一人息子だった彼もシアトルに戻った。ヨロズは母親から手紙で度々除隊して大学を卒業するように言われ、家族がシアトルに戻っていたこともあってワシントン大学に行くことにした。タナギは姉がワシントン州立大学にいたので、そこに入学して薬剤師になった。ミツイの家族もワシントン州スポーケンに戻っていた。彼によるとシアトルでも戦後に差別があったが、彼

が大学を卒業した1951年頃になると企業が復員兵を雇い始めた。オーイタの両親はカリフォルニア州ワッソンビルに戻って、立ち退き前に使っていた道具が残っていたので農業に従事した。彼によるとワッソンビルやモントレイ・ベイは日系人の帰還を暖かく受け入れた。同じカリフォルニアでもフィリピン系の多いサリナスでは日系人の帰還に反対の声が多かった。ドイはカリフォルニアには戻りたくなくて、友人のいたシカゴ大学に入り、教育社会学を専攻した。

除隊し、アメリカに帰国した後も元MIS兵と日本とのつながりは無くならなかった。大学卒業後、日本企業のアメリカ支社に入社したり日本と関係のある仕事に就いたりした者もいた。彼らは日本語能力や日本での経験を仕事に活かし、商用で何度か日本を訪れた。タク・マツイは三菱商事に入り、仕事で何度も日本を訪れた。ヨロズはボーイング社に入り、商用で日本に来た。ドイは大学で教鞭を取ったが、日本の私立大学のコンサルタントとして招聘された。イヌイは貿易関係の仕事に就き、三年間東京で過ごした。サトウは除隊後すぐにはハワイに戻らず、GHQで軍属として通訳や調査官の仕事をして1947年3月から1950年7月までした。元MIS兵の中にはこのように除隊後帰国せずに軍属として日本で働いた者もいた。また戦時中に帰国できずに日本に取り残された二世の中にも戦後帰国できるようになっても日本に留まり、軍属として働いた者がいた。彼らの中には技術を持っているのにアメリカでは仕事がないので、日本語と英語ができるため仕事がある日本に残るつもりのも者もいた。イヌイによるとこうした二世と二世MIS兵との間で交流があり、情報交換などを行ったようである。

帰国後も日本の親戚との交流が続いた。観光などで日本を訪れ、その際に親戚を訪ねたり、日本から親戚が訪ねてきたり、手紙のやり取りをしたりした。タナギは親戚と連絡を取り続け、日本語で書かれた手紙の中で読めないものは教会で日本語のできる一世に読んでもらっていた。ミツイは日本を訪れた際に熊本にいる妻の親戚を訪れた。本人ではなく、親が祖父母と連絡を取り続けた場合もあった。ヨロズの母親は何度か日本を訪れた。ミツエ・マツイは親戚との関係は次第に薄れていったが、日本滞在時に仲良くしていた日本人と連絡を取り続けた。オーイタはかつて赴任した京都に毎回日本を訪れるたびに行った。人だけでなく、場所に対する愛着があった。

元MIS兵は戦後の日本を訪れ、戦後の日本の変化を見た。1950年代から60年代に何度か日本を訪れたイヌイは再興していくさまを見、日本人の復興への強い気持ちを感じたと語る。ヨロズは日本で親戚を訪ねると、彼らの生活が豊かになっていたことに気づいた。ミツイが1982年に日本に来た時には新しい建物が立ち並び、戦争の荒廃の痕は見られなかった。タク・マツイは仕事で日本を訪れる度に日本の変化を目の当たりにし、嬉しかったという。日本の荒廃に強い衝撃を受けた元MIS兵には、その目覚しい復興も印象的だった。

おわりにかえて

元MIS兵にとって日本に来たことは、まさにタク・マツイが言うように「一生に一回あるかないか」の得がたい経験であった。特にマツイは日本で育ったので日本に対する思い入れは大きいものであったが、戦争前に日本に来たことのない者にとっても意味のあるものだった。タナギは戦前には日本のことを知りたいと思わなかったが、戦争中に日本を知りたいという気持ちが起こってきた。自分のルーツを日本に見出し、親戚に会いたい、日本をもっと知りたいという気持ちが芽生えた。日本への関心は除隊後も日本訪問や日本への親戚との交流によって続いた。日本駐留は彼らに日本とのつながりを意識させ、強化するものだった。

NVCに参加していることから、彼らはMIS兵であったことを誇りにしていることがうかがえる。新しい教科書の発行作業に携わったドイが言うように日本人に民主主義を教えるのは難しく、状況の理解が困難であったり、慣習の違いに戸惑ったりしたこともあったが、任務に真摯に取り組んだ。MIS兵の役割を日本の復興に役立ち、日米間のコミュニケーションを円滑にし、双方の絆を深めるのに役立ったと評価している。(MIS Biography Questionnaires, Box 1) 日本人のアメリカ兵に対する不安や恐れがすぐに消えたことも、GHQやMIS兵の対応が良かったからだと自負している。興味深い人たちに会えたと日本人との交流を肯定的に捉えていた。MIS兵としてアメリカに忠誠心を示すとともに駐留により日米関係の改善に貢献したことで、彼らは自分自身及び日本に対し肯定的な意識を持った。

今回のインタビューから元MIS兵の貴重な体験を聞くことができたが、それぞれ一度しか会って話を聞くことができなかつたため、いくつかの点が今後の課題として挙げられる。元MIS兵は日本でもフィリピンでもその外見から日本人として見なされる一方で、服装からアメリカ人として見られるという矛盾した見方をされたことに対し、どのように感じていたのかを明らかにする必要がある。また、家族とは日本駐留や日本のことについて話をしていないとミツイが語ってくれたが、元MIS兵の従軍や日本駐留のことを家族、特に日本にいた家族はどう捉えていたのかといった国家や国籍の間で翻弄された彼らのアイデンティティについて考察しなければならない。今回のインタビューで戦時中に日本に残された二世との交流や元MIS兵の娯楽としてのダンス・ホールや映画館の話が出たが、これらについての研究も今後の課題とされる。子どもたちが戦時中の二世について何も知らないため学校で話し、語り継ぐのが二世ヴェテランの使命とミツイが言うように、MIS兵についての研究も継続していく必要がある。

註

- ¹ 本稿はJICAプロジェクト「二つの国の絆をむすんで：『移民』の日本への貢献をさぐる」の一環であり、長谷川寿美・小澤智子「MISとして占領下の日本に駐在した二世の体験談を聞く」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』2号(2006-2007年)を受けての調査結果である。
- ² インタビューは2008年8月8日、9日に飯野正子と増田直子がシアトルのNisei Veterans Committee (NVC) Hallで行った。インタビューを行うにあたり、ワシントン大学のゲイル・ノムラ教授、スティーブン・スミダ教授、NVCシアトル支部長のユウゾウ・トキタ氏、JICA横浜海外移住資料館の飯野彩氏に大変お世話になった。
- ³ 収容所から軍事指定地域外の大学に行った日系人学生および彼らを支援した活動については以下を参照。Allan W. Austin, *From Concentration Camp to Campus: Japanese American Students and World War II* (Urbana, IL: University of Illinois Press, 2004); Robert O'Brien, *The College Nisei* (Palo Alto, CA: Pacific Books, 1949); Gary Okihiro, *Storied Lives: Japanese American Students and World War II* (Seattle: University of Washington Press, 1999).
- ⁴ 日系女性の従軍に関しては、Brenda L. Moore, *Serving Our Country: Japanese American Women in Military during World War II* (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 2003) を参照。
- ⁵ ナホトカからの元捕虜の審問や左翼分子がいると思われる企業と接触する反破壊活動部門で二世MIS兵は仕事をしていた。“MIS Biography Questionnaires,” Box 1, NJAHS.
- ⁶ ソ連のスパイ摘発や「共産主義者」と見られる者の調査を担当した「対諜報部」(CIC)に配属された者は、日本国内の情勢を知るため日本到着直後の一ヶ月間は自由に動けた。(菊池、174) イヌ

イがCICに配属されていたかについては、今回のインタビューでは聞けなかった。

⁷ 今回インタビューした人たちの中にはいなかったが、1990年代になってもアメリカ軍に従軍したことを怒っている日本の親戚がいる元MIS兵もいる。“MIS Archival Collection,” Box 1, NJAHS.

引用文献リスト

インタビュー

Doi, James. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 9 August, 2008.

Inui, Roy. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 9 August, 2008.

Matsui, Mitsue(Mitsi). Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 8 August, 2008.

Matsui, Tak. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 8 August, 2008.

Mitsui, Sam. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 8 August, 2008.

Oita, Katashi. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 8 August, 2008.

Sato, Kennichi. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 9 August, 2008.

Tanagi, Shig. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 8 August, 2008.

Yorozu, Art. Interview by Iino and the author. Seattle, Washington, 9 August, 2008.

一次資料

MIS Biography Questionnaires, National Japanese American Historical Society, San Francisco, California

書籍

菊池由紀

1995『ハワイ日系二世の太平洋戦争』東京：三一書房。

McNaughton, James C.

2006 *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service during World War II*. Washington D.C.: Department of the Army

The Ties between Japanese Americans and Japan: MIS Nisei Who Were Stationed in Occupied Japan

Naoko Masuda (Japan Women's University)

This article discusses the ties between Japanese Americans and Japan (and Japanese), focusing on the Nisei who were stationed in Occupied Japan as members of the Military Intelligence Service (MIS). The article addresses, based on the interview with them, the backgrounds of the Nisei MIS members, their duties in Japan, their impressions of Japan and Japanese, and their contact with Japanese. The interviews, done by Iino (President, Tsuda College) and Masuda, indicate that those Nisei MIS regard their experiences in Japan valuable, considering that the occupation gave them a chance to see their ancestors' country and to visit their relatives. They came to be interested in Japan and their interest remained even after they were discharged. On the other hand, some were treated as Japanese because of their appearance, while the others were treated as Americans because of their uniforms. Although they admit there was some feeling of prejudice against them among Japanese, which was caused by ignorance of Nisei, they now look back and consider their role as Nisei MIS in Japan to be helpful in strengthening the ties between the U.S. and Japan.

Keywords: Japanese Americans, Nisei, Military Intelligence Service, Occupation, U.S.-Japan Relations

〈資料紹介〉

「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー

—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより—

柳澤幾美（名古屋外国語大学・非常勤講師）

〈目次〉

はじめに

1. 一世オーラル・ヒストリー・プロジェクト（IOHP）
2. 日本時代の「写真花嫁」たち
3. 「写真花嫁」たちの移民後（第二次世界大戦勃発まで）
4. 「写真花嫁」たちの第二次世界大戦と戦後
5. その他の者が語る「写真花嫁」

おわりにかえて

キーワード：「写真花嫁」、「写真結婚」、一世女性、日本人移民、オーラル・ヒストリー

はじめに

「写真花嫁」たちがアメリカ合衆国（以下、「アメリカ」と表記）に渡り始めてから、一世紀以上の年月が過ぎた。彼女たちのほとんどはすでに生涯を終えている。いわゆる「写真結婚」とは、20世紀初頭、先に渡米した日本人男性と日本にいる女性が太平洋を隔てて写真や手紙を交換することによって成立した結婚方法のことであり、当時主流であった見合い結婚の変形である。「写真結婚」をした女性たちは「写真花嫁」と呼ばれた。その数は、当時アメリカに移民した日本人女性のおよそ半数、約1万人弱に及ぶと考えられる¹。

「写真花嫁」たちを含む日本からの移民第一世代（以下、「一世」と表記）の女性は識字率が高かったにもかかわらず、それほど多くの日記類や記録を残しているわけではない。これは、移民後の生活があまりにも多忙であったので、その余裕がなかったためであると考えられる。一世女性たちの生活史を辿ろうとしたとき、先にも述べたように、そのほとんどがすでに生涯を終えているため、彼女たちにインタビューすることはまず不可能となっている。しかしながら、アメリカでは1970年代から、生涯を終えようとしている日系一世たちの声を残そうという声の高まりとともに、彼らにインタビューする、オーラル・ヒストリーのプロジェクトが現れ、多くの一世たちのオーラル・ヒストリーが一次資料として保存されるようになった²。これらは、とりわけ資料の乏しい一世女性の生活史を考察するための貴重な資料である。

本稿では、その中でも最大の一世代のオーラル・ヒストリー・コレクションであるとされる、カリフォルニア州立大学サクラメント校スペシャル・コレクション、日系アーカイヴァル・コレクション（Japanese American Archival Collection, Special Collection, Library, California State University, Sacramento）に保存されている、「一世オーラル・ヒストリー・コレクション（Issei Oral History Project、以下IOHPと表記）」の中から、「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリーを紹介したい。

アメリカに渡った日本人「写真花嫁」については、これまでそのイメージについての考察や外交面からの考察などの先行研究があり³、その他の日本人移民史でも頻繁に触れられてきた⁴。また、

一世女性の生活史に関しては、メイ・T・ナカノ⁵やアイリーン・スナダ・サラソン⁶の研究、その他に日本人女性移民史の全体像を描こうとしたユージ・イチオカ⁷、飯野正子の研究⁸などがある。もちろん一世女性の中に「写真花嫁」は含まれ、共通する経験も多いが、アメリカに渡った「写真花嫁」に限った生活史は管見の限り見られない⁹。本稿では日本人「写真花嫁」たちの生活史を考察する手がかりとして、一次資料としてのIOHPの「写真花嫁」のオーラル・ヒストリーの概要を紹介する。

1. 一世オーラル・ヒストリー・プロジェクト (IOHP)

カリフォルニア州立大学サクラメント校の日系アメリカ人アーカイヴァル・コレクション (Japanese American Archival Collection) は、サクラメントの教育者であり、公民権運動の活動家でもあった、メアリー・ツカモト (1915 - 1998) の寄贈による個人所蔵の資料や教授用資料をもとに、大学の図書館の中に1994年に設立されたものである。ツカモト所蔵の資料は、多くの個人やグループによって絶えず寄贈されてきたものであり、手紙類、写真、日記、スクラップブック、新聞、芸術作品、衣類、工芸品など、約2,100件の一次資料が含まれており、研究者、教員、学生、作家、ジャーナリスト、ドキュメンタリー・フィルムの制作者などの幅広い利用者にとって極めて貴重な資料を提供している¹⁰。

その中に含まれるIOHPのコレクションは、英語に訳されたものとしては、一世に関するオーラル・ヒストリー・コレクションの最大級のものであるといえよう。コレクションには、1880年から1910年に生まれ、1898年から1924年までにアメリカに移民した、162名の一世のオーラル・ヒストリーが集められている。インタビューは、1969年から2000年の間に、カリフォルニア州、オレゴン州、ワシントン州、ネバダ州、ユタ州にて行われた。IOHPは、カリフォルニア州サクラメントの当時パークビュー長老派教会牧師、ヘイハチロー・タカラベ博士の主導により始められた。1975年には正式に委員会が組織され、大がかりなプロジェクトへと発展した¹¹。

IOHPには、「写真花嫁」としてアメリカに渡ってきた一世女性のもものが26名分含まれている。これまで、ハワイの「写真花嫁」の生活史については、日本人、朝鮮半島出身者について考察されてきたが¹²、そのもととなったインタビューやオーラル・ヒストリーは、それぞれ8名、5名のもものが集められているに過ぎない。それと比べても、26名もの「写真花嫁」のオーラル・ヒストリーが集められているのは極めて珍しく、貴重である。対象となった「写真花嫁」たちの居住していた場所はその大部分がカリフォルニア州である。このプロジェクトの拠点がサクラメントであったことを考えると、対象がその周辺の人々であることはしかたがないことかもしれない。

なお、インタビューは日本語で行われ、それを英語に訳したものが文書で保存され、研究者に提供されている。本稿では筆者がさらに日本語に訳したものを使用する。

2. 日本時代の「写真花嫁」たち

IOHPでは、「写真花嫁」たちに、時系列にそれまでの生涯を聞き出している。最初に語られているのは、日本での生活である。子ども時代については、かなり雄弁に語っている者が多く、楽しく、懐かしい思い出に浸っているようにさえ見える。

表1に、彼女たちの出身地、到着年、学歴、到着港、渡米年齢、夫との年齢差をまとめてみた。

それによると、出身は山口と広島が3名、岡山、石川、和歌山、熊本が2名、愛知、福島、島根、静岡、佐賀、長野、香川、福岡、新潟がそれぞれ1名となっている。一般に移民の多い県と一致している。到着年は、「写真結婚」が最もさかんに行われていた1908年から1920年までで、中止される直前の1919年が最も多くなっている。

学歴は、不明の者を除いて、すべて学校に行っており、6年を超えて教育を受けた者が26名中15名いる¹³。そのうち、中等教育を受けたものは10名、大学を出たものも1名いる。第二次世界大戦中の強制収容所における調査では、中等教育以上を受けた一世女性の割合は33.8%である¹⁴。このインタビューでは、その割合はそれより高くなっている。

表1 Picture Brides (バックグラウンド)

氏名	出身地	到着年	学歴	到着港	渡米年齢	夫との差
Nakagi Takagisi	石川	1908		シアトル	17	10
Isuyo Makishima	山口	1909	8年	シアトル	18	6
Saki Shimakawa		1910	師範学校	SF	17	15
Raku Okamoto	愛知	1910	4年生	シアトル	22	8
Katsuno Fujimoto	山口	1912	10年		17	23
Yasu Kawamura	広島	1912	女学校	シアトル	23	8
Ko Takakoshi	福島	1913	裁縫学校	シアトル	20	
Katsuyo Imagawa	岡山	1913	裁縫学校	SF	21	7
Oai Ishii	広島	1914	女学校	SF	18	7
Iyo Tsutsui	山口	1915	12年間	SF	20	11
Suye Tanaka	和歌山	1916	6年間	シアトル	19	10
Katsu Ichiuji	島根	1916	小学校	シアトル	20	
Mazu Sakaguchi	熊本	1916	小学校	SF	21	22
Yukiko Kageta	岡山	1916	中学校	シアトル	28	17
Kichi Okada	静岡	1916	小学校3年	SF	20	
Masa Kajioka	福井	1917	小学校3年	SF	19	
Kimiyo Kanemasu	広島	1917	中等学校	SF	20	4
Masaye Tanoue	熊本	1918	小学校	ホノルル	18	5
Nobu Nagaishi	佐賀	1919	6年間	SF	23	
Midori Kimura	長野	1919	女子大	SF	22	14
Haru Kobayashi	石川	1919	小学校	SF	24	19
Nobue Masada	香川	1919	女学校	SF	20	18
Shiz Hayakawa	福岡	1919	8年間	SF	20	16
Shizu Tsujisaka	和歌山	1920	女学校	SF	17	11
Ryoko Maruoka	新潟	1920	青山学院	SF	25	11
Masumi Tsuneyoshi	岡山	1924		シアトル	17	10
平均					20	12

出展：Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, Library, California State University, Sacramento

「写真花嫁」26名の渡米年齢の平均は20歳である。渡米の半年以上前に入籍していなければならなかったが、それを考慮しても、当時の女性の結婚年齢よりも少々高めである。また、「写真花嫁」と夫との年齢差は平均12歳で、よく指摘されるように、やはり高めである。夫との年齢差が10歳以上の者が14名おり、半分以上である。そのうち20歳以上ある者も2名いる。

「写真結婚」に関しては、先行研究において「会ったことのない男性との結婚」という点がしばしば強調される。インタビューでも、そのことが必ず質問され、その結婚はどうやってもたらされたのかが尋ねられている。表2は、それを一覧にまとめたものである。これによると、仲人の紹介が3名、不明の者が1名いるが、それ以外はすべて親戚や家同士の知り合いである。そのうち、親戚や親族であった者が9名で最も多く、他は親戚の知り合いや家同士の知り合い、親族が知っていた、など、ある程度信頼できる相手であったことがわかる。

表2 Picture Brides 夫とはどうやって結婚したか？

氏名	
Nakagi Takagisi	両親が同じ教会のメンバーの夫を選んだ
Isuyo Makishima	仲人の紹介、年や家柄で引き合わせた
Saki Shimakawa	夫は母方の親戚
Raku Okamoto	出身地が近かった
Katsuno Fujimoto	仲人の紹介
Yasu Kawamura	夫と親戚同士
Ko Takakoshi	叔母の紹介
Katsuyo Imagawa	夫の姉（妹）が祖母の親戚と結婚していた
Oai Ishii	夫とは親戚同士。幼い頃に夫は自分を見たことがあった。
Iyo Tsutsui	自分の母親のいとこが夫の実家の近くに嫁いでいた
Suye Tanaka	家同士が知り合い
Katsu Ichiuji	夫の兄を知っていた
Mazu Sakaguchi	夫の祖母が自分の家の近くの出身。よく遊びにきていた。
Yukiko Kageta	仲人の紹介
Kichi Okada	自分の知り合いと夫が親友だった
Masa Kajioka	
Kimiyo Kanemasu	夫と遠い親戚
Masaye Tanoue	両親が夫を知っていた
Nobu Nagaishi	自分の母親が夫の父親と再婚した
Midori Kimura	アメリカにいた自分の叔父と夫が友だちだった
Haru Kobayashi	職場の上司の紹介
Nobue Masada	叔母の紹介
Shiz Hayakawa	夫の姉が自分の父の再婚相手だった
Shizu Tsujisaka	夫の家と遠い親戚
Ryoko Maruoka	自分の姉が夫の兄と結婚していた
Masumi Tsuneyoshi	知人の紹介

出展：Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, Library, California State University, Sacramento

また、アメリカに渡る船の上での他の「写真花嫁」たちとの出会いも語られており、「写真花嫁」たちの移民前の大きな期待、興奮、そして少しの不安が大いに語られている。船上の経験は、船酔いに苦しんだ者もあったようであるが、同じ「写真花嫁」たちとの情報交換や交流なども含まれ、比較的楽しく、懐かしく思い出を語っているように思われる。

3. 「写真花嫁」たちの移民後（第二次世界大戦勃発まで）

表3 Picture Brides 移民後の仕事など

氏名	宗教	居住地 1	居住地 2	居住地 3	職業 1	職業 2	職業 3
Nakagi Takagisi	キリスト教	Loomis,CA			農夫の妻	靴屋	
Isuyo Makishima	仏教	Oak Park,CA	Sacramento	Perkins	農夫の妻	下宿屋	イチゴ栽培
Saki Shimakawa	キリスト教	Stockton,CA			農業	ホテル経営	主婦
Raku Okamoto	キリスト教	Berkely,CA	Sacramento	日本 (6年間)			
Katsuno Fujimoto	キリスト教	Riverside,CA	Pasadena,CA		主婦		
Yasu Kawamura	仏教	Sacramento	Walnut Grove		床屋手伝い	主婦	
Ko Takakoshi	仏→基督	Seattle,WA	Green Lake	Painier Valley	家事労働	主婦	
Katsuyo Imagawa	キリスト教	Sacramento	Isleton,CA	Sacramento	牧場手伝い	ホテル経営	花屋
Oai Ishii	仏→基督	Sacramento			主婦、裁縫	ドラッグストア経営	
Iyo Tsutsui	キリスト教	Holland Camp No.	Stockton,CA	Holland No.1	農業	主婦	
Suye Tanaka	キリスト教	Huntington Beach			農夫の妻		
Katsu Ichiji	仏→基督	San Leandro,CA	Monterey,CA	Salinas,CA	苗床屋	缶詰工場	靴修理店経営
Mazu Sakaguchi		San Jose,CA	Cotetz		農夫の妻		
Yukiko Kageta	キリスト教	Florin,CA	Galt,CA	Placerville,CA	農夫の妻	主婦	
Kichi Okada	仏教	Sacramento,CA			主婦		
Masa Kajioaka	キリスト教	Watsonville CA	Hollister,CA	Cortez	農業		
Kimiyo Kanemasu	キリスト教	Oakland,CA			洗濯業	花屋経営	主婦
Masaye Tanoue	仏教	Wahiwa,Honolulu	熊本		農夫の妻	パン屋経営	
Nobu Nagaishi	キリスト教	Huntington Beach			農夫の妻		
Midori Kimura	キリスト教	San Jose,CA			主婦	家事労働	
Haru Kobayashi	キリスト教	San Francisco,CA			主婦		
Nobue Masada	キリスト教	Fresno,CA	Madera,CA		農夫の妻		
Shiz Hayakawa	仏教	San Francisco			メイド	ケータリング業	
Shizu Tsujisaka	キリスト教	San Francisco			簿記		
Ryoko Maruoka	キリスト教	San Francisco			靴屋組合の出納	保険代理店	
Masumi Tsuneyoshi	キリスト教	Los Angeles,CA			農業	美容師	農業

出展 : Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, Library, California State University, Sacramento

「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリーの中で特徴的であるといえるものは、到着した移民局での夫との出会いの場面の描写であろう。この IOHP では、「写真花嫁」たちには「ご主人とは以前、会ったことがありますか」という質問を必ずしており、その後、初めて夫と移民局で会ったときの気持ちを語らせている。質問者の「写真花嫁」へのまなざしも感じられるが、「写真花嫁」のオーラル・ヒストリーだからこその質問であり、答である。

たくさんの男性が待っている移民局での様子は、「『～さん！』と私が呼ぶと夫が手を上げてくれたので彼が私の夫だとわかりました。うれしさと怖さ、両方ありました。(中略)特別な感情はありませんでした」¹⁵などと語られている。その他の「写真花嫁」たちは、「(初めて夫と会って)彼のことは知らなかったけれど、写真と同じ顔だから夫だろうと思いました」¹⁶、「夫はすぐわかりました。合図を送ってくれたからです。(中略)写真とそんなにかわりませんでした。家同士が親戚だから、全然心配していませんでした」¹⁷、「(移民局で初めて夫に会って)彼が夫なら、苦労もがまんできると思いました。悪い人には思えませんでした。ごく普通の容貌でした(笑い)」¹⁸などである。よく先行研究で言われるように、移民局でいやだと泣き出したり、写真と実物が違うと騒いだりする例は出てこない。

移民後の彼女たちの居住地や職業などは、表3にまとめたとおりである。これを見ると、主婦とだけ答えた者が4名いるが、ほとんどの「写真花嫁」たちが移民後、仕事をしていたのがわかる。しかも、幾つか仕事や居住地を変わっていることが特徴として挙げられる。最も多いのは農業で、半数近くにのぼる。その他も、ナカノが指摘しているとおり¹⁹、夫と共にする職業がほとんどである。

インタビューの中では、彼女たちが日の出から日暮れ後までめまぐるしく働いているようすが語られている。いかに移民後の彼女たちが多忙であったかが窺える。大恐慌の時のことも決まって質問されており、夫と2人で、あるいは夫を亡くした者は1人で懸命にのりきった様子が語られている。また、子どものことも質問されており、よく言われるように、「写真花嫁」たちが子だくさんであったことも示されている。

4. 「写真花嫁」たちの第二次世界大戦と戦後

一世たちにとっては最も辛い経験であろう第二次世界大戦中についても、ほとんどがかなり詳しく述べている。表4は、主な項目の一覧である。真珠湾攻撃の直後、日本人移民のリーダー的存在だった人々数千人が、拘束され、司法省の「敵性外国人」収容所に収容されたが、この26名の「写真花嫁」の夫たちの中からも、4名が収容されている。

1942年の強制移動の前の財産、所有物の処理について必ず質問しているのは、このオーラル・ヒストリーの姿勢がよく表われている点である。インタビューには、内務省の強制収容所に行く前、いかに慌てて財産などを処理しなければならなかったかが示されている。所有物は家の地下などにそのまま残してきた者も多く、白人の友人や教会に預けた者、またそのまま放置した者もいる。興味深いのは、白人の友人（夫の共同経営者）の敷地内に家を引っ張って移動してもらったという例である。彼女によると、当時そういった商売があったのだといい、終戦後はその白人の敷地内の自宅に帰り、そのまま住み着いたという²⁰。彼女の夫は「敵性外国人」収容所に囚われており、彼女は子どもたちと荷物をまとめ、家の処理は1人でしなければならなかったのである。

「写真花嫁」たちは、ハワイにいた1名を除いて全員内務省の強制収容所に収容されている。収容所内では、彼女たちの大部分が仕事をしている。最も多いのは、皿洗いなどの食堂での仕事である。その他には、看護師、教師、事務の仕事で、収容所の外で農業、赤十字の仕事、カブ・スカウトの手伝いをしていた者もいる。インタビューでは、収容されるときの不安については多くのものが触れているが、収容所内の生活については、それほど多くの困難は語られてはいない。収容所内で1943年に実施された、いわゆる「忠誠審査」についても尋ねられており、それにまつわる騒動について何人かは触れている。

収容所から解放後、以前住んでいた場所にすぐに全員帰ることができたわけではなかった。西海岸以外のシカゴ、ネバダ州リノ、ミネソタ州、コロラド州デンバーなどにまず落ち着いた者もいた。それでもほとんどの者が1945年末までには西海岸に帰ることができたと答えている。

表4 Picture Brides 第二次世界大戦中

氏名	集結センター	収容所	所有物の処理	収容所内での職	収容所外での職	解放後の行き先
Nakagi Takagisi	Walerga	Tule Lake-Amache	事業売却	なし。母親の世話		
Isuyo Makishima	Pinedale	Poston	下宿屋売却	家事		
Saki Shimakawa	地域の集会場	Rower	売却、倉庫に			Chicago,IL
Raku Okamoto	Walerga	Tule Lake	階下に保存	看護師		Reno,NV
Katsuno Fujimoto	Tulare	Gila River	教会			Detroit,MI
Yasu Kawamura	Merced	Amache	近所の家			
Ko Takakoshi		Minidoka		教師		Seattle,WA
Katsuyo Imagawa		Tule Lake, Jerome,Amache	家に鍵を置いて入れた	幼児の食事の世話		Minnesota
Oai Ishii	Walerga	Tule Lake,Topaz	自分の店に保管	看護師 (Topaz)		Salt Lake City,UT
Iyo Tsutsui	Stockton Fair Ground	Rower	農場に放置、銀行が管理	皿洗い	農業	Denver,CO
Suye Tanaka	夫が収容	Poston				
Katsu Ichiuji	Hanford,CA	Poston	自宅	葬式用の花づくり他		Monterey,CA
Mazu Sakaguchi	Merced	Amache	コートツに残した	台所の手伝い		Cortez
Yukiko Kageta	Marysville	Tule Lake, Heart Mountain	上司、友人の家	食堂での仕事	赤十字の仕事	Loomis,CA
Kichi Okada	夫が収容	Tule Lake	自宅の地下	台所の手伝い		Sacramento,CA
Masa Kajioka	Merced	Amache	組合に土地を残した	料理人		Cortez
Kimiyo Kanemasu	Tanforan	Topaz	アラメダ教会に	ウェイトレス		Chicago,IL
Masaye Tanoue	収容なし					
Nobu Nagaishi	夫が拘束	Poston	友人の敷地に家を移動	皿洗い		Huntington Beach
Midori Kimura	Santa Anita	Heart Mountain	自宅の地下		カブ・スカウトの手伝い	San Jose,CA
Haru Kobayashi	Tanforan	Topaz	売却、教会の地下	皿洗い		San Francisco
Nobue Masada	Fresno	Jerome	牧場をアメリカ人に預けた	事務員		Fresno
Shiz Hayakawa		Pomona, Heart Mountain, Topaz	友人の家	食堂の仕事		San Francisco
Shizu Tsujisaka	Tanforan	Topaz	友人に預ける	ブロック長、台所の手伝い		Denver,CO
Ryoko Maruoka	Tanforan	Topaz (夫がミズーリに収容)	売却、放置	台所の手伝い		
Masumi Tsuneyoshi	Panoma	Heart Mountain	自宅の地下			Los Angles,CA

出展：Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, Library,California State University, Sacramento

5. その他の者が語る「写真花嫁」

IOHPでは、「写真花嫁」以外の一世も、「写真花嫁」について語っている。レイコ・ナグモが集めた資料によると、12名が「写真花嫁」についての話をしている。その内訳は、教師、牧師、食料品店主などである。「写真花嫁」のことを他の一世がどのように話していたかがわかるので、一部紹介したい。

ある牧師は、「写真花嫁」がやってきてからの家族の問題について、次のように語る。

花嫁の期待に比べて、夫の中には思ったよりも年齢が高いものや、顔のよくない者もいました。反対の場合もありました。それは家族の問題を引き起こしました。だから、当時のキリスト教会の牧師は、そのような家族の問題に対処しなければならず、今に比べてたいへんだったのです²¹。

「写真花嫁」ではなかった一世女性も「写真花嫁」について話している。

「写真花嫁」で来た人もいたので、問題があったのです。いくつか、話を聞きました。彼女たちは男性に会ったことがなく、写真を見ただけで来たのです。夫が銀行員だと思って来た花嫁が、実は夫は銀行の掃除係だと知るので。そのようなことに失望して、離婚した者もいますよ。(中略)シアトルには、女性を売る商売をしている男がいたそうです。その男は、どこかの男の名前を使って花嫁を連れてきて、売り飛ばしたのです²²。

この話の信憑性はわからないが、1911年に合衆国移民局によってなされた移民調査報告書には、調査の以前には「写真花嫁」を装って売春婦を輸入することが行われていたことが指摘されている。しかしこの報告書によると、この調査が行われた時点では、すでにそのような詐欺行為はなくなったとしている²³。

日本に帰国した男性と結婚をし、アメリカに渡ってきた一世女性も船の上で会った「写真花嫁」たちについて話している。

誰も写真でしか夫がどんなふうかわからなかったのです。(中略)花婿たちは彼女が思っているような人ではなかったのです。男たちは商売をやっていると言って、若い頃に撮った写真を送ってだますのです。(中略)不貞の事件はいっぱいありました。そんな女性たちは、きれいに着飾ってクラブで働き、男を見つけて逃げるんです。そして夫がピストルを持って彼女をつけてきて、2人を打つのです。そんな話、たくさんありましたよ²⁴。

その他にも、「写真花嫁」にまつわる話をおもしろおかしく聞かせる一世の男性もいた。移民局で「写真花嫁」の顔を見て気に入らなかったのものでその場で友だちにゆずった男の話や、反対に男性が気に入らず、逃げ出した女性の話などである²⁵。その他にも幾つかあるが、どれもこれらの話と類似した話であり、想像の域を超えない。人物を特定せず、「聞いた話」として語っていることがほとんどである。先に紹介したように、当事者である「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリーでは、移民局で逃げ出したという話は出てこない。当事者はそのような話を避けるにしても、他の一世からの「写真花嫁」を見るまなざしは、多少偏見があるように思われる。

おわりにかえて

アメリカ本土に渡った「写真花嫁」の数は、先にも述べたように約1万人弱であったと考えられる。26名に過ぎないこの「写真花嫁」のオーラル・ヒストリーは、全体のごく一部にしか過ぎない。そのため、この資料だけで「写真花嫁」を一般化するのはもちろん無理がある。しかしながら、これまで、「写真花嫁」に限ったオーラル・ヒストリーがこれほどまとまって保存されているものは他に類を見ない。また、インタビューは極めて統一的な手法により行われており、尋ねる項目も明確に定められている。なるべく時系列にインタビューを行うように心がけられているので、非常にわかりやすく、まとめやすい。欲をいえば、日本語のオリジナルのものも見てみたいし、テープが残っているのならば聞いてみたい気がするが、残念ながらカリフォルニア大学サクラメント校のスペシャル・コレクションには研究者用としては提供されていない。

アメリカに渡った「写真花嫁」たちの従来の生活史については、他者が語ったものが多く、彼女たち自身の経験も断片的にしかわからなかった。「写真花嫁」たちが現実に語ったオーラル・ヒストリーを読みながら、おそらくこの世を去っているであろう彼女たちの声が蘇ってくるような感覚に陥っている。コレクションの中には、ある「写真花嫁」だった女性がインタビュアーにいつ本になるのかと尋ねた自筆の手紙も残されている。彼女は果たして本になったものを目にしたのであろうか。遅ればせながら、今後、これらの資料を使って、彼女たちの生活史を主体的に描くことを筆者の課題とし、彼女たちの「生きられた歴史 (Lived History)」に光を当てる作業を続けたい。

なお、IOHPの資料を集めるにあたって、カリフォルニア州立大学日系アメリカ人アーカイヴァル・

コレクションの司書の方々や、ボランティアのレイコ・ナグモ氏にたいへんお世話になった。とりわけ、ナグモ氏は、IOHPの資料をジャンル別に整理されるなど、非常に献身的にコレクションのために尽くされている。この場を借りて深くお礼申し上げたい。

※ここに紹介されたIOHPの資料は、JICA 横浜国際センター 海外移住資料館の「海を渡った花嫁」プロジェクトの一環として集められたものである。

註

- 1 当時のアメリカへの上陸港であったサンフランシスコとシアトルに1912年から1920年までに上陸した「写真花嫁」の数は約7千人である（『在米日本人史1』[復刻版]日本図書センター、1994年、90）。「写真結婚」は1903年ごろから始まっているので、おそらく1万人弱になると考えられる。
- 2 日本オーラル・ヒストリー学会代表の吉田かよ子によると、オーラル・ヒストリーは、第二次大戦後、テープレコーダーの大衆化と共に広まり、録音した音声を忠実に書き写すことから発展し、歴史叙述の新しい手段としてアメリカでは急速に認知されるようになったものである。アメリカでは公民権運動以降に、それまで歴史上に登場する機会をほとんど与えられてこなかった、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系、そして女性の声を残す手段として発展し、定着してきた。吉田かよ子「日本から世界へ——オーラル・ヒストリー国際協働の可能性」『歴史評論』648号（2004年4月）、65 - 66。
- 3 例えば増淵留美子「1910年代の排日と写真結婚」戸上宗賢編『ジャパニーズアメリカン』（ミネルヴァ書房、1986年）、293 - 317；柳澤幾美『「写真花嫁」問題とは何だったのか』『異文化コミュニケーション研究』第7号、愛知淑徳大学大学院、2003年3月、11 - 24；同『「写真花嫁」移民禁止の経緯——日米外交の視点から』『移民研究年報』第10号、2004年3月、97 - 107；同「二重の偏見——「写真花嫁」イメージに隠された日本人女性移民の実像」、田中きく代・高木（北山）真理子編著『北アメリカ社会を眺めて——女性軸とエスニシティ軸の交差点』（関西学院大学出版会、2004年）、145 - 163；田中景「女性の市民的役割と「写真結婚」問題」『社会科学』72、同志社大学人文科学研究所、2004年2月、149 - 171；Kei Tanaka, “Japanese Picture Marriage and the Image of Immigrant Women in Early Twentieth - Century California”, *The Japanese Journal of American Studies*, No.15, 2004, 115 - 138 など。
- 4 例えば、ユウジ・イチオカ『一世——黎明期アメリカ移民の物語り』富田虎男・糸井輝子・篠田左多江訳（刀水書房、1992年）；糸井輝子『外国人をめぐる社会史——近代アメリカと日本人移民』（雄山閣出版、1995年）；飯野正子『もう一つの日米関係史——紛争と強調のなかの日系アメリカ人』（有斐閣、2000年）など。
- 5 Mei T. Nakano, *Japanese American Women: Three Generations 1890-1990*, Mina Press and National Japanese American Historical Society, 1990 [メイ・T・ナカノ（サイマル・アカデミー翻訳科訳）『日系アメリカ女性——三世代の100年』（サイマル出版会、1992年）] これは、1990年カリフォルニア州オークランド博物館において開催された、全米日系人歴史協会女性委員会主催の歴史展、「強さと多様性——日系アメリカ女性の歴史、1885 - 1990」のために行われた日系女性へのインタビューを基にしたものである。
- 6 Eileen Sunada Sarasohn, *Issei Women: Echoes From Another Frontier*, Pacific Books, Publishers, Palo Alto, California, 1998. これは、本稿で紹介する、CSUSの「一世オーラル・ヒストリー・プロジェ

クト」から一世女性の生活史を拾ったものであり、「写真花嫁」のものも含まれる。これは、200名以上に及ぶ日本人移民のオーラル・ヒストリーの中から、一般的な日本人女性移民11名を選び、そのインタビューをまとめた生活史である。そこには、それぞれの女性たちの育った環境、結婚しアメリカに移民した経緯、移民後の生活、収容所時代、戦後の自立した生活、子どもや孫への伝言、の順に整理され、インタビューに忠実に描かれている。

- 7 Yuji Ichioka, "Amerika Nadeshiko: Japanese Immigrant Women in the United States, 1900 - 1924," *Pacific Historical Review*, 48, 1980, 339 - 357.
- 8 飯野正子「アメリカへの移民——一世の女性たち」『歴史評論』第513号、1993年、66 - 76。
- 9 なお、カナダの「写真花嫁」たちの生活史を扱ったものでは、工藤美代子『写婚妻——花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』（ドメス出版、1983年）；真壁和子『写真婚の妻たち』（未来社、1983年）がある。
- 10 カリフォルニア州立大学サクラメント校図書館、Japanese American Archival Collection の URL <http://digital.lib.cusu.edu/jaac/about-jaac.html> より。
- 11 Finding Aid, *Issei Oral History Project (IOHP)*, 1969 - 2000, November 12, 2003, Japanese American Archival Collection, California State University, Sacramento. より。
- 12 例えば、柳澤幾美「ハワイに渡った日本人『写真花嫁』たち——最初の『写真花嫁』から最後の『写真花嫁』まで」『金城学院大学論集』社会科学編、第3巻第2号、2007年、129 - 141。Alice Yun Chai, "Picture Brides: Feminist Analysis of Life Histories of Hawai'i's Early Immigrant Women from Japan, Okinawa, and Korea," in Donna Gabaccia ed., *Seeking Common Ground, Multidisciplinary Studies of Immigrant Women in the United States*, Westport, CT: Praeger Publication, 1992, 123 - 138; Alice Yun Chai, "Women's History in Public: "Picture Brides" of Hawaii," *Women's Studies Quarterly* 1988: 1&2, 51 - 62.; Alice Yun Chai, "A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii," *Bridge, An Asian American Perspective*, Winter 1978, 37 - 42.
- 13 当時の小学校は、上の学校に進まなかったものはそのまま8年まで教育を受けたので、6年を超えるものがいた。
- 14 United States of the Interior, *The Evacuated People A Quantitative Description*, Washington: U.S. Government Printing Office, 1946, 80 - 81
- 15 Interview with Isuyo Makishima, IOHS, 11.
- 16 Interview with Yasu Kawamura, IOHS, 8.
- 17 Interview with Oai Ishii, IOHS, 18.
- 18 Interview with Iyo Tsutsui, IOHS, 19.
- 19 ナカノ、30。
- 20 Interview with Nobu Nagaishi, IOHS, 14.
- 21 Interview with Rev. Juhei Kono, IOHS, 12 - 13.
- 22 Interview with Toshihiko Nishimi, IOHP, I.D. No.84, 11.
- 23 *Report of The Immigration Commission, Abstracts of Reports of The Immigration Commission*, vol.II, Washington: Government Printing Office, 1911, 337.
- 24 Interview with Ai Miyasaki, IOHP, 48 - 49.
- 25 Interview with Bunshiro Tazuma, IOHP, 52 - 53.

引用文献リスト

Chai, Alice Yun.

1978 “A Picture Bride from Korea: The Life History of a Korean American Woman in Hawaii,” *Bridge, An Asian American Perspective*, Winter, 37 – 42.

Chai, Alice Yun.

1988 “Women’s History in Public: “Picture Brides” of Hawaii,” *Women’s Studies Quarterly*: 1&2, 51 – 62.

Chai, Alice Yun.

1992 “Picture Brides: Feminist Analysis of Life Histories of Hawai’i’s Early Immigrant Women from Japan, Okinawa, and Korea,” in Donna Gabacchia ed., *Seeking Common Ground, Multidisciplinary Studies of Immigrant Women in the United States*, Westport, CT: Praeger Publication, 123 – 138.

Glen, Everyn Nakano.

1986 *Issei, Nisei, Warbride, Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service*, Philadelphia: Temple University Press.

工藤美代子

1983 『写婚妻——花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』東京：ドメス出版。

Ichioka, Yuji.

1980 “*Amerika Nadeshiko*: Japanese Immigrant Women in the United States, 1900 – 1924,” *Pacific Historical Review*, 48, 339 – 357.

イチオカ、ユウジ

1992 『一世——黎明期アメリカ移民の物語り』富田虎男・糸井輝子・篠田左多江訳、刀水書房。

飯野正子

1993 「アメリカへの移民——一世の女性たち」『歴史評論』第513号、66 – 76。

飯野正子

2000 『もう一つの日米関係史——紛争と強調のなかの日系アメリカ人』東京：有斐閣。

Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, California State University, Sacramento.

Interview with Katsuno Fujimoto.

Interview with Shizu Hayakawa

Interview with Katsu Ichiuji.

Interview with Katsuyo Imagawa.

Interview with Yukiko Kageta.

Interview with Masa Kajioka.

Interview with Kanemasu.

Interview with Yasu Kawamura.

Interview with Midori Kimura.

Interview with Haru Kobayashi.

Interview with Isuyo Makishima.

Interview with Oai Ishii.

Interview with Nobue Masada.

Interview with Isuyo Makishima.
Interview with Ryoko Maruoka.
Interview with Ryoko Maruyama.
Interview with Nobu Nagaishi.
Interview with Kichi Okada.
Interview with Raku Okamoto.
Interview with Mazu Sakaguchi.
Interview with Saki Shimakawa.
Interview with Nakagi Takagisi.
Interview with Ko Takakoshi
Interview with Sue Tanaka.
Interview with Masaye Tanoue.
Interview with Masumi Tsuneyoshi.
Interview with Shizu Tsujisaka.
Interview with Iyo Tsutsui.
Interview with Rev. Juhei Kono
Interview with Ai Miyasaki
Interview with Toshihiko Nishimi
Interview with Bunshiro Tazuma.

叡井輝子

1995『外国人をめぐる社会史——近代アメリカと日本人移民』東京：雄山閣出版。

真壁和子

1983『写真婚の妻たち』東京：未来社。

増淵留美子

1986「1910年代の排日と写真結婚」戸上宗賢編『ジャパニーズアメリカン』、東京：ミネルヴァ書房、293 - 317。

ナカノ、メイ・T

1990『日系アメリカ女性 三世の一〇〇年』東京：サイマル出版会。

1911 *Report of The Immigration Commission, Abstracts of Reports of The Immigration Commission*, vol.II, Washington: Government Printing Office.

Sarasohn, Eileen Sunada.

1998 *Issei Women, Echoes from Another Frontier*, Palo Alto, CA: Pacific Books, Publisher.

田中景

2000「二十世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業——日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成」『社会科学』68、同志社大学人文科学研究所、303 - 334。

田中景

2004「女性の市民的役割と『写真結婚』問題」『社会科学』、72、同志社大学人文科学研究所、149 - 171。

田中景

2006「『写真花嫁』の写真——移民の可視化と移民政策の実行についての考察」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第43号、261 - 270。

Tanaka, Kei.

2004. “Japanese Picture Marriage and the Image of Immigrant Women in Early Twentieth-Century California, *The Japanese Journal of American Studies*, No.15, 115–137.

United States of the Interior.

1946 *The Evacuated People A Quantitative Description*, Washington: U.S. Government Printing Office.

柳澤幾美

2003 『『写真花嫁』問題とは何だったのか』『異文化コミュニケーション研究』第7号、11 – 24。

柳澤幾美

2004 「二重の偏見——「写真花嫁」イメージに隠された日本人移民女性の実像」、田中きく代・高木（北山）眞理子編『北アメリカ社会を眺めて——女性軸とエスニシティ軸の交差点から』、兵庫：関西学院大学出版会、145 – 163。

柳澤幾美

2004 『『写真花嫁』移民禁止の経緯——日米外交の視点から』『移民研究年報』第10号、97 – 107。

柳澤幾美

2007 「ハワイに渡った日本人『写真花嫁』たち——最初の『写真花嫁』から最後の『写真花嫁』まで」『金城学院大学論集』社会科学編、第3巻第2号、129 – 141。

吉田かよ子

2004 「日本から世界へ——オーラル・ヒストリー国際協働の可能性」『歴史評論』648号、64 – 73。

1994 『在米日本人史1』[復刻版]、日本図書センター。

カリフォルニア州立大学サクラメント校図書館、Japanese American Archival 2003, November 12, Finding Aid, *Issei Oral History Project (IOHP)*, 1969–2000, Japanese American Archival Collection, California State University, Sacramento.

Collection <http://digital.lib.cusu.edu/jaac/about - jaac.html>

**Oral Histories of “Picture Brides”:
From the Issei Oral History Project, Japanese American
Archival Collection, at California State University, Sacramento**

Ikumi T. Yanagisawa (Nagoya University of Foreign Studies)

This article is to introduce and outline the oral history collection of Japanese “picture brides,” from the Issei Oral History Project (IOHP), Japanese American Archival Collection at California State University, Sacramento. About one hundred years have passed since “picture brides” began to emigrate to the USA from Japan, and most of them have passed away. There are few source materials to study the life histories of the first generation of Japanese women emigrants (Issei) to the US, because they had little time in their lives to write their diaries or memoirs. Therefore, their oral histories from the IOHP can be a most valuable source material for the study of their life histories. There are 162 oral histories in the IOHP collection. In this essay I will outline the contents of the 26 oral histories of the “picture brides.”

Keywords: “Picture Bride”, “Picture Marriage”, Issei Women, Oral History

〈史料翻刻〉

「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動
—カンピーナス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介—

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）

〈目次〉

はじめに

1. 「農場日誌」の形式とその変遷
2. 「農場日誌」の書式・記載事項の変遷
3. むすび
4. 史料翻刻

Ⅰ 「農場日誌」に見られる護憲革命関係記事（1932年7月～10月より抜粋）

Ⅱ 「カンピーナス農場月報」1932年8月～10月

Ⅲ 「ピングダ農場月報」1932年8月～10月

キーワード：サンパウロ、護憲革命運動、農場日誌、農場月報

はじめに

1932年7月に勃発した、ブラジル・サンパウロ州護憲革命運動と当時の日系社会の対応について、カンピーナス東山農場長山本喜譽司による「農場デ見ター九三二年護憲運動記」を利用して、別稿で簡単に論じたが¹、本稿では同農場に架蔵されている「農場日誌」を取り上げ、その概要についてまとめた上で、「農場日誌」から聖州護憲革命に関する記事を抜粋・紹介する。

別稿で既に述べたように、山本喜譽司の手になる「農場デ見ター九三二年護憲運動記」は、サンパウロ護憲革命軍と連邦政府軍との戦闘に巻き込まれた東山農場が置かれた状況が克明に記録されているだけにとどまらず、当時の在伯日本人知識階級のブラジル人観、そして、その鏡としての彼等の祖国日本に関する状況認識²などを分析する上で、大変に貴重な史料であることは言を俟たない。しかしその一方で、山本のこの手記は、護憲革命が終熄した後に、農場における被害状況を報告するため、おそらく総領事館側の要請に応じて提出された記録である、という点には十分に配慮する必要がある³。

今回紹介する「農場日誌」は、後述するように、毎日恒常的に作成されていた文書であり、一義的には農場の活動そのものを記録することを目的とするものであった。従って「農場日誌」にはからずも書き込まれることになった護憲革命運動に拘わる記録は、戦闘に巻き込まれることになった農場の状況について、文字通り日を追って、時には生命の危機を感じながら時間を追って記入されたものであるところから、その同時代史料としての価値は極めて高いとすることができる。

また、カンピーナス東山農場では、「農場日誌」の他に、東京の本社に向けた農場の月間活動報告書として、様々な農場の記録類を素材に毎月「農場月報」⁴も作成されていた。「農場月報」の記載事項は必然的に、「農場日誌」におけるそれと重複するものとなっているが、「農場日誌」には見ることのできない記録も少なからず見ることができ⁵、「農場日誌」と併せて利用することでより立体的に農場の活動とそれを取り巻く状況とを再構成することが可能になると言える。本稿では、「農場日誌」から護憲運動にかかわる記事を抜粋し、併せて同時期の「農場月報」（1932年8月～10月分）

の全文を翻刻、紹介することを主な目的とする。

1. 「農場日誌」の形式とその変遷

東山農場に現存する文献史料の中で、量的にも質的にも主要な部分を占めるものの一つが、農場の毎日の活動記録である「農場日誌」である。表1に示した都合91冊（うち1冊は未使用）、1928年2月1日付から1952年12月31日付と、1969年3月1日付から同年12月31日付とが、ハードカバーで製本されたもの（図1）から紐綴じ（図2）やホチキス留めの仮製本（図3）のものまで様々な形態ではあるが、一応簿冊の形式にまとめられ現存しているものである⁶。

「農場日誌」は、農場内のコーヒー、牧畜、植林などの現場各部門における毎日の作業・活動状況を農場本部 Sede においてとりまとめて記録したもので、毎日作業終了後に各部門から本部に上がってくる報告を受け、本部において一日分を一葉にまとめて作成されてきている⁷。このような「農場日誌」は作成の経緯から言えば、厳密には「編纂史料」と言うことになるが、その同時代史料としての重要性が損なわれるものでないことは言うまでもない⁸。

表2は、本部で作成された「農場日誌」と、後述するように1936年10月1日以降、農場の各部門で毎日作成されていった「部門日報」との関係、ごく大まかにまとめたものである。表中、濃色で示されている部分は、簿冊形式にまとめられた「農場日誌」に合綴されているものであることを示している。

現存する最も古い「農場日誌」は1928年2月1日付のもので、記載項目のみポルトガル語タイプ打ち、本文の

表1：カンピーナス東山農場「農場日誌」簿冊一覧

表 題	目	至	形態	備 考	
農場日誌	1928年2月1日/1930年3月4日	1928/2/1	1930/3/4	c	1928.3.1-6.30, 1928.8.1-11.30 欠
Diario Geral		1930/3/1	1930/6/10	a	
Diario Geral		1930/6/11	1930/9/19	a	
Diario Geral		1930/9/20	1930/12/31	a	12/28 欠
Diario Geral		1931/1/1	1931/4/10	a	
Diario Geral		1931/4/11	1931/7/20	a	7/6 欠
Diario Geral		1931/7/21	1931/10/28	a	
Diario Geral		1931/10/29	1931/12/31	a	白紙多数 11.22、7/6 欠?
Diario Geral		1932/1/1	1932/4/10	a	2/9 欠
Diario Geral		1932/4/11	1932/7/18	a	
Diario Geral		1932/7/19	1932/10/27	a	
Diario Geral		1932/10/28	1932/12/31	a	白紙多数
Diario Geral		1933/1/1	1933/4/11	a	1/8, 3/9, 6/4, 6/15 欠
Diario Geral		1933/4/12	1933/7/23	a	
Diario Geral		1933/7/24	1933/10/31	a	
Diario Geral		1933/11/1	1934/1/15	a	白紙多数
Diario Geral		1934/1/16	1934/4/30	b	
Diario Geral		1934/5/1	1934/8/10	b	
Diario Geral		1934/8/11	1934/11/23	b	
Diario Geral		1934/11/24	1935/3/5	b	
Diario Geral		1935/3/6	1935/6/14	b	
Diario Geral		1935/6/15	1935/9/24	b	
Diario Geral		1935/9/25	1935/12/31	b	印刷用原稿?一葉挿入
Diario Geral		1936/1/1	1936/4/12	b	
Diario Geral		1936/4/13	1936/7/25	b	
Diario Geral		1936/7/26	1936/9/30	b	白紙多数
Diario Geral		未使用		b	未使用
農場日誌	1936年10月1日/1937年5月31日	1936/10/1	1937/5/31	c	本部はしめ各部門の「日報」を一日ごとにまとめて合綴
農場日誌	1937年6月-12月	1937/6/1	1937/12/31	c	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/3/1	1938/3/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/4/1	1938/4/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/5/1	1938/5/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/6/1	1938/6/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/7/1	1938/7/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/8/1	1938/8/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/9/1	1938/9/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/10/1	1938/10/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1938/11/1	1938/11/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/1/1	1939/1/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/2/1	1939/2/28	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/3/1	1939/3/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/4/1	1939/4/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/5/1	1939/5/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1939/6/1	1939/6/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「漁業社日誌」のみ専ら1ヶ月分をまとめて合綴
日誌		1939/7/1	1939/7/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「漁業社日誌」のみ専ら1ヶ月分をまとめて合綴
日誌		1939/8/1	1939/8/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「漁業社日誌」のみ専ら1ヶ月分をまとめて合綴
日誌		1939/9/1	1939/9/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「漁業社日誌」のみ専ら1ヶ月分をまとめて合綴
日誌		1939/10/1	1939/10/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「漁業社日誌」のみ専ら1ヶ月分をまとめて合綴
日誌		1939/11/1	1939/11/30	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、ここから「漁業社日誌」合綴なし
日誌		1939/12/1	1939/12/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1940/1/1	1940/1/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴
日誌		1940/2/1	1940/2/29	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「柑橘加工日誌」開始(1月27日分以降を巻末にまとめて合綴)
日誌		1940/3/1	1940/3/31	d	一日ごとに全「部門日報」をまとめて合綴、「柑橘加工日誌」のみ専らまとめて合綴
日誌		1940/4/1	1940/4/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/5/1	1940/5/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/6/1	1940/6/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴、「Diario da Fazenda」開始
日誌		1940/7/1	1940/7/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/8/1	1940/8/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/9/1	1940/9/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/10/1	1940/10/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/11/1	1940/11/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1940/12/1	1940/12/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/1/1	1941/1/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/2/1	1941/2/28	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/3/1	1941/3/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/4/1	1941/4/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/5/1	1941/5/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/6/1	1941/6/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/7/1	1941/7/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/8/1	1941/8/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/9/1	1941/9/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/10/1	1941/10/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/11/1	1941/11/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1941/12/1	1941/12/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1942/1/1	1942/1/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1942/2/1	1942/2/28	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
日誌		1942/3/1	1942/3/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
Diario da Fazenda		1942/4/1	1942/4/30	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
Diario		1942/5/1	1942/5/31	d	一月分をまとめて各「部門日報」ごとに合綴
Diario da Fazenda		1942/6/1	1944/12/31	e	Diario da Fazendaのみ 逆順に合綴
Diario da Fazenda		1945/1/2	1945/12/31	e	Diario da Fazendaのみ 逆順に合綴
Diario "FAZENDA MONTE D'ESTE"		1946/1/16	1947/12/31	e	Diario da Fazendaのみ 逆順に合綴、1946/1/1-6分破損状態別置
Diario "FAZENDA MONTE D'ESTE"		1948/1/1	1951/5/31	e	
Diario "FAZENDA MONTE D'ESTE"		1951/6/1	1952/12/31	e	51年8.11.12月、52年1.2.4.5.6.8.10月欠、51/10/22、51/10/24-31、52/3/1-23、52/7/20-31、52/8/1-23、52/11/15-30 欠
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/3/1	1969/3/31	f	3/1-2は断片のみ
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/4/1	1969/4/30	f	
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/6/1	1969/6/30	f	
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/7/1	1969/7/31	f	
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/8/1	1969/8/31	f	
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/9/1	1969/9/30	f	
DIARIO CIA AGRO-PECUARIA FAZENDA MONTE DESTE		1969/12/1	1969/12/31	f	

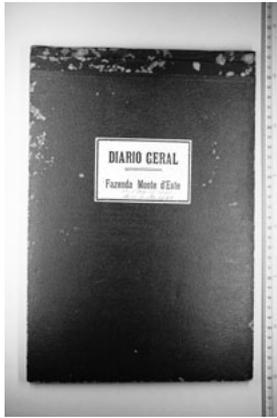


図 1



図 2



図 3

記入は現地の固有名詞など一部の例外を除き、日本語による手書き記入になっているものである。程なく、記入項目があらかじめ印刷された用紙が用いられるようになっていくが、そのうち現存する最初のもは1928年7月1日付で、“Diario Geral”、直訳すれば「総合日誌」というタイトルがつけられている。(図4) この「総合日誌」というスタイルは、1936年9月30日まで8年以上に渉って踏襲されている。

表 2 : 「農場日誌」簿冊内容変遷

農場日誌		部門日誌					
1928	1928.2.1 総合日誌						
1936	1936.9.30						
1939		1936.10.1 本部日報	1936.10.1 珈琲部日報	1936.10.1 果樹部日報	1936.10.1 植林部日報	1936.10.1 牧畜部日報	1936.10.1 農産加工会社日報 1939.10.31
1940	1940.6.1						1940.1.27 柑橋工場日報
1942	農場日誌	1942.5.23					1941 事務所日報 1943
1952	1952.12.31						
	1960			1961	1961		
1969	1969.3.3 東山農牧舎社日誌 1969.12.31						
1980						1979	
1990	1991						
							1960 野菜部日報 1964
							1962 雑作部日報 1965
							1962 養魚部日報 1962
							1971 果実部日報 1982

やがて、農場内外での事業活動の拡大・充実にともない、「総合日誌」だけではその記載に限界があることから、1935年末頃には「農場日誌」の作成方法について再検討が進められていたようである⁹。その結果、1936年10月1日からは、全ての部門をまとめて一葉に記録する形での「総合日誌」は廃止され、農場本部を含めた農場各部門で毎日一葉の「部門日報 “Diario da Secção”」が作成されることになった¹⁰。

「部門日報」は、「本部日報」“Diario de Sede da Fazenda”、「珈琲部日報」“Diario da Secção de Café”、「果樹部日報」“Diario da Secção de Pomicultura”、「植林部日報」“Diario da Secção Florestas”、「牧畜部日報」“Diario da Secção de Pecuaria”、「農産加工会社日報」“Diario da Indústria Agrícola Campineira Limitada”、の6種類からなり、それがこれまでの「総合日誌」にかわり、「農場日誌」として合綴される

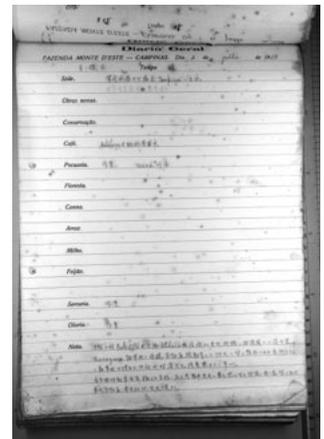


図 4

ことになった。実は「農場日誌」（ないし「日誌」）という日本語表記そのものが簿冊に明記されるのは、この時が初めてである¹¹。また、1939年10月31日付で「農産加工会社日報」は「農場日誌」簿冊から姿を消しているが¹²、それと入れ替わるように1940年1月27日からは「柑橘加工場日報」“Diario de Fábrica de Laranja”、が追加されている。このように、この時期の「農場日誌」は5～6種類の「部門日報」が合綴されたものであった。ピンダ農場やサンパウロおよびサントスのカーザ東山など各地に展開していた東山農場の関連事業でもそれぞれの「日誌」が作成されていた筈であるが、それらの「日誌」類の所在については今のところ確認することができない¹³。

「本部日報」を含む都合5ないし6種類の「部門日報」を合綴した簿冊が「農場日誌」と呼ばれた時期は4年ほど続くが、東山農場の活動を一枚で見通すことのできる「日誌」の利便性がこの間の経験から明らかになったためであろうか、1940年6月1日からは、かつての「総合日誌」の系譜を引く、全部門の活動内容を一葉に取りまとめた新しい「農場日誌」“Diario da Fazenda”が改めて作成されるようになっていく。したがって、1940年6月から1942年5月までは、「農場日誌」と6種類の「部門日報」とが「（農場）日誌」というタイトルで合綴されることになる。

そして、日米開戦の影響で1942年4月以降、“Diario da Fazenda”とポルトガル語に表記を変えた「農場日誌」簿冊には、同年6月1日以降「部門日報」は合綴されなくなり、1940年6月から作成が開始されていた全ての「部門日報」の内容を一葉にまとめた「農場日誌」だけが1952年12月末まで「農場日誌」簿冊に綴じ込まれてゆくことになっていったのである。

その後の「農場日誌」の変遷については、大量の断簡が未整理のままの状態に残されており後日の調査に待つほかないが、そのうち1969年3月から12月（5,10,11月分欠）については、「東山農牧会社日誌」“Diario Cia. Agro-Pecuária Fazenda Monte D’Este”として、一月分毎にホチキスで綴じられた仮製本の状態で保存されていることが確認できる。

2. 「農場日誌」の書式・記載事項の変遷

表3は「農場日誌」について、その書式（記載項目）の変遷を簡単にまとめたものである。現存する最も古い「農場日誌」である「総合日誌」（書式1）では、全てポルトガル語で、日付、O Tempo（天気）、Céde [Sede]（本部）、Trabalho geral（一般工事）、Transporte（運搬）、Serraria（製材所）、Olaria（煉瓦製造所）、Café（珈琲）、Pecuaria（牧畜）、Floresta（植林）、Cultivos diversos（雑作物）、Observação（注記）[後にNotaに変更]という12項目が立てられ、本文は日本語により記入がなされていった。

その後、1928年7月までの間に書式2（図4参照）に変更されているが、一般工事がObras novas（起業）とConservação（修繕改良）の二つに、雑作物とされていた項目が具体的にCanna（甘蔗）、Arroz（米）、Milho（玉蜀黍）、Feijão（フェイジョン：豆）の四つの項目に細分化されたものであり、新規事項の付加は見られない。その後1929年7月に書式2a、11月に書式2b、翌30年3月に書式3と変更が加えられるなかで、それぞれCampo de Experiencia（試験農園）、Laranja（柑橘）、Arrendamento（小作）という新規の項目が付加、記載されるようになっていく。ちなみに、この間に米とフェイジョンの項目が削除されている。

1931年4月11日からは書式4（図5）が利用されるようになっていくが、牧畜がCriação（繁殖）とEngorda（肥育）に、前年新たに登場したばかりの柑橘がMatriz（母本園）、Viveiro（苗圃）、Laranjal（柑橘圃）に、甘蔗が甘蔗とEngenho（粗糖製造）にそれぞれ細分化され、Esterco（肥料工場）という項目が新たに付加されている。この時期に農園における柑橘部門の急成長があったこ

表3:「農場日誌」記載項目変遷一覽表

書式1 1928.2.1 至 1928.2.29	書式2 1929.7.16	書式2a 1929.7.16 1929.11.22	書式2b 1929.11.24 1930.2.28	書式3 1930.3.1 1931.4.10	書式4 1931.4.11 1934.1.15	書式5 1934.1.16 1936.3.30	本部日報a 1936.10.1 1937.12.31	本部日報b 1938.3.1 1942.5.23	書式7.7a 1940.6.1 1944.12.11	書式8.8a.8b 1944.12.12 1952.12.10	書式9c 1952.12.11 1952.12.31	書式9 1969.3.3 1969.12.31	参考:書式6 -	
日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気	日付 天気
本部	本部	本部	本部	本部	本部	本部	人事往來	人事往來	人事往來	人事往來	人事往來	人事往來	人事往來	本部
一般工事	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良	修繕改良
畜産*	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養	鶏養
製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所
煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所
畑作物	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗	甘蔗
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍	玉蜀黍
フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン	フェイジョン
製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所	製材所
煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所	煉瓦製造所
注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記	注記

とを伺わせる。

1934年1月からは書式5(図6)が利用され、それまで事情に応じて適宜、本部や注記の項目に記入されていた、Fazenda de Pinda(ピンダ農場)、Matriz em Tokio(東京本社)、Casa Tozan(カーザ東山)、Estação(カルロス・ゴメス駅)など、カンピーナス農場以外の地区との事務連絡、商品の発送、受け取りなどの記録についても「総合日誌」にそれぞれ項目を立てて記載されるようになっていた。また、牧畜部門は2項目から3項目へ、植林部門も2項目へと記載項目が増加している。結局この時点で「総合日誌」の記載項目は初期の12から28へと倍以上になっていったことになる。これは、東山農場内部における事業内容の拡大と充実、およびそれともなう農場と東京本社やサンパウロ州内各地の関係施設との連絡が密になっていったことの現れであるといえよう。

一方、このように記載事項の増加(農場の活動の拡大・充実)にともない、次第に「農場日誌」として一日一葉の「総合日誌」に全てをまとめて記載することにも限界が感じられるようになったためであろうか、1936年10月からは、先に述べたように一枚物の「総合日誌」を廃止し、「本部日報」を初めとする各「部門日報」の集合体が「農場日誌」として扱われるようになっていた。新しく作成されることになった「本部日報」(本部日報a)には、それまでの「総合日誌」の中から、本部の項目および、それぞれ「部門日報」が作成されることになった農場の各種農業部門に含まれない項目が引き継がれることになった。その際、それまで本部とされていた項目は、Funcionarios(人事往來)とVisitas(来場者)の二つに項目に分けられ、書式5で追加された各地の関連施設との連絡事項は、Correspondencia(通信)という大項目の中に、東京本社、Casa Tozan -Santos(サントス・カーザ東山) Casa Tozan -S.Paulo(サンパウロ・カーザ東山)、ピンダ農場、Diversas(そ

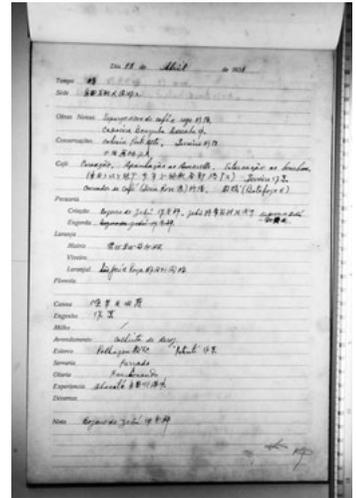


図5

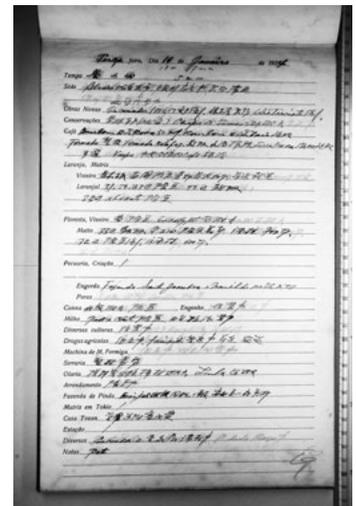


図6

の他)の5項目としてまとめられることになった。その後更なる事業の拡大に応じて、「本部日報」には、Secção do Poço (ポツン区部)、Casa da Laranja (柑橘園)、Lenhadora (薪製造所)、Casa na cidade (カンピーナス市内事務所)などの項目が付加されてゆく。

しかし、農場活動についての一覧性という点からは、このような「部門日報」の集合体である「農場日誌」はやはり利便性に欠けていたと言える。このため、1940年6月1日からは、再び農場全体の活動を一日一葉にまとめた、かつての「総合日誌」に近い書式7(図7)があらためて作成されることになった。これは「カンピーナス東山農場日誌」Diario da Fazenda Monte D'Este de Campinas という名前で作成され、1942年5月末までは、この新しい「農場日誌」と「本部日報」を初めとする6部門の「部門日報」とが合わせて「(農場)日誌」と呼ばれ合綴されてゆくことになる。

表3の書式7を見れば明らかのように、新しい「農場日誌」は、珈琲、果樹、植林、牧畜などの農場現場の各部門に拘わる「部門日報」の要約記事以外は、以前の「本部日報」記載事項とほぼ重なるものであった。このため、農場現場各部門の「部門日報」はその後も継続して作成されていたのに対して、「本部日報」は1942年5月末で新しい「農場日誌」に吸収され廃止されたものと考えられる。こうして、既に述べたように、1942年4月からタイトルを“Diario da Fazenda”とポルトガル語に変えた「農場日誌」簿冊には、同年6月1日からは各「部門日報」の内容をまとめた一日一葉の「農場日誌」だけが1952年12月末まで綴じ込まれてゆくことになった。

その後の柑橘、果樹部門の廃止、油桐部門の独立と廃止、雑作部門の独立と詳細項目内容の変化、市内事務所、Packing-houseの廃止などなど、農場における経営形態の変化に応じた形での記載事項の変遷が見られるが、1960年代末まで記載項目やその形式に、戦前期を通じて確認されたような大きな変化はみられなかったと考えられる。

以上のような「農場日誌」の形式、作成方法、記載事項の変遷を通して気づかれることは、東山農場がその創設期から1960年代まで、珈琲、牧畜、植林、そしてその他の作物栽培を中心に、一貫して多角経営を目指して活動を続けていたことである。この他に、一時的に大きな位置を占めた柑橘類関連の部門、油桐部門や、さほど大きな成功を得ることはできなかったが肥料工場、試験農園、農薬剤製造、殺蟻器製造などなど、様々な事業展開が早い時期から試行されてきていることから、東山農場の実験農場の性格を伺うことができる。たゆまざる多角経営の試みの中でも特筆に値するのは、甘蔗栽培によるピンガ醸造から始まった酒造事業であり、1930年代早々にはピンガ製造から日本酒の醸造へと方針を変更し、様々な試行錯誤の末、1935年には現在にまでその生産が続けられているブラジル銘酒「東麒麟」を生み出したことであろう¹⁴。

3. むすび

本項では、サンパウロ州カンピーナス東山農場に架蔵されている大量の「農場日誌」について、これまで実施してきた史料整理作業の中間報告として、主として「総合日誌」の系譜を引く「農場日誌」の形式と記入項目の変遷とを中心に紹介を行った。「農場日誌」に記載された内容の分析は無

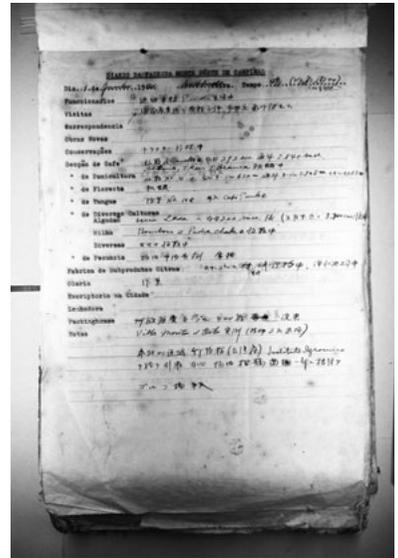


図7

論のこと、農場各部門で作成された「部門日報」の書式や記入項目の変遷、「農場月報」についても同様の分析を行う必要があるが、それらについては、史料調査の進捗に合わせ、後日あらためて報告の機会を持ちたいと思う¹⁵。

4. 史料翻刻

以下、「カンピーナス農場日誌」、「カンピーナス農場月報」、「ピンダ農場月報」から、サンパウロ州護憲革命運動に関係する記事を抜粋・紹介する。翻刻にあたってはできるかぎり原史料の表記に従った。ポルトガル語についても原史料の表記を尊重し、人名・地名などの固有名詞を除き和訳を、固有名詞の著しい綴りの誤りについては正しい綴りを、それぞれ注記した。

I. 「農場日誌」に見られる護憲革命関係記事（1932年7月～10月より抜粋）

（原文では日付、記載項目名はポルトガル語表記であるが、ここでは便宜上、日本語で略記した。この時期の「農場日誌」（「総合日誌」）には曜日の記載はないが、参考のため曜日も付加した。また、下線部は、原文書では赤インクによる記入部分である。以下、曜日を含め〔 〕は全て著者による注記である）。

7月10日〔日〕

本部：日曜 一般休業

本曉サンパウロ市ニ革命突發交通通信機関断絶セリ

7月11日〔月〕

本部：反政府派 Rio 聯邦政府ニ対シ開戦準備中ノ由サンパウロハ
既ニ革命派ニ帰シ平穩交通機関恢復セルモ通信自由ナラズ

7月12日〔火〕

注記：9日ヨリ15日間 moratoria [モラトリアム] 施行八月卅一日迄ノ支払ハ
各15日間支拂延期ノ事トナル

7月15日〔金〕

注記：第一回 moratoria [モラトリアム] 明ケトナリタルモ再ビ20日迄延期
Pinda [農場] ヨリ通信アリ

7月20日〔水〕

注記：Burro [驢馬] 3頭牡馬2頭カンピーナス畜農會議所ノ依頼ニヨリ
寄附決定

7月21日〔木〕

本部：非常時ニ於ケル対策各事業ニ涉リ着手セリ

注記：Burro [驢馬] 3頭馬2頭聖州軍ニ寄贈ノ為メ本日早朝池田
場員出市引渡済（尚農場 ~~caminião Forde~~ 台貸与セリ）
寄贈馬確メノ為メ軍人及外一名前來場、後荷物自動
車借受及物品寄附欲誘ノ為メ軍人一名外二名來場
貸与ノコトトシ

荷物自動車以外Milho [玉蜀黍] 十俵 Pinga [酒] 200 Litro 寄贈ノ
事ニ決定セリ

7月22日 [金]

本部：Oswaldo Bueno 外一名来場 出征軍人後援ノ為メ
農場内 colono [契約労働者] ヨリモ品物寄附方依頼ヲ受ク
注記：聖州出征軍人後援寄附用 Milho [玉蜀黍] 脱穀作業中

7月23日 [土]

その他：出征軍人後援ノ為メ colonia [農場] ヨリ食料品寄附
募集農場事務所一同トシテ肥豚一頭寄附

7月24日 [日]

その他：寄贈品本日手交済

7月26日 [火]

本部：Campinas 赤十字後援團へ寄附

8月23日 [火]

注記：E [s] tado Maior [参謀本部] Jaguary ニ
移轉時間帯運轉ノ為
農場戸外消燈ス

8月30日 [火]

注記：前数日間 Eleuterio, Itapyra 戦線
压迫サレ稍騒ガシカリシガ
昨日ヨリ多少静マル。

8月31日 [水]

本部：本日ヨリ場員夜警実施ノ事トセリ山本堀部後藤三氏
牧畜：戦争不安ノ為メ道路ベリ Pasto [牧草地] 家畜移動
その他：婦女子避難準備ノ為メ São José 本部住宅
掃除
注記：Itapyra 戦線憲護憲軍不利ノ為メ全地帯一帯
動揺ヲ始ム場員一同対策協議決定

9月1日 [木]

本部：戦線大ナル異動ナキ模様ニテ本日ヨリ夜警一時中止

9月2日 [金]

牧畜：Bourbon pasto [牧草地] 一部軍馬用ニ提供
注記：M.M.D.C. [護憲運動] ヨリ Ampolo [Amparo] ニ塹壕設置ノ為メ当场
Camarada [臨時雇労働者] 出動方相談受ケタルモ外国人ノ故ヲ以テ
拒絶セリ但シ Bourbon pasto [牧草地] 一部軍馬用トシ
テ貸与スル事ニ決定セリ

9月5日 [月]

注記：護憲軍モジアナ戦線不利ナルカ如ク Campinas Dr.
Sylvio 氏ヨリモ通知ニ接シタルヲ以テ非常時ニ対シ準
備着手セリ

9月6日 [火]

注記：護憲軍測量部軍人二名農場内道路取調ノ為メ来場

9月8日 [木]

本部：Alvaro、藤原堀部、Jaguary 方面視察 休業 dia santo [祝祭日]

Chapadão (Fazenda [農場]) 飛行場新設中労働者出動方勸

透セラル、当地方護憲軍戦況不利ナルカ如ク

敵軍侵入ノ場合ニ於ケル準備ノ為メ夕食後場員一同参集

協議セリ

総指揮 山本 宮地 (兼本部警備)

本部警備 家木、堀部、溝添

São José 係 Alvaro、藤原、後藤

食料係 仁科 有馬 吉本

本部附近及外廻 労働者係 池田、西村

9月9日 [金]

本部：各役割非常時準備中 (食品及電話線其他)

珈琲：珈琲第二回開花満開

9月10日 [土]

本部：非常時準備中

注記：後9時目下 Jaguary 戦線活動中ノ赤十字員

臨時野戦病院当场設置希望ニテ来場セルモ

空室ナキ故ヲ以テ拒絶セリ

本日ヨリ夜警開始 山本、Alvaro 堀部

9月11日 [日]

本部：夜警 宮地、藤原

注記：今夜 Amparo 占領サル、Coqueiro 方面圧服

サル、

Rio Grande, Mi [na] s, Pará 方面 ~~por~~ 護憲軍

厥起ノ報既ニ□□□□

9月12日 [月]

本部：Alvaro 藤原 Jaguary 戦線視察

本日夜警 池田、有馬

Matto Grosso ノ軍隊ノ支援ヲ得

注記：Jaguary 戦線ハ本日早朝戦闘開始セラレ優勢ナル

ガ如シ

Casa Branca 方面

ニ Ramão Geras 活躍シ

当戦線ニ影響アリタル如シ

9月13日 [火]

注記：西村、家木夜警ノ事

戦線平静ナルガ如シ

或ハ退却セリトモ言フ。

9月14日 [水]

本部：夜警

注記：Pedreira 方面ニ当ツテ砲声 58 発を聞ク。

9月15日 [木]

本部：前 9 時半飛行機飛来 Cafezal [珈琲園] Treangro [Triangulo] ニ爆

弾投下及機関銃ヲ發射セリヲ以テ幸ヒ Treangro [Triangulo] 就

働中ノ Arador [農夫] 及 Cafezal [珈琲園] Bourbon Varreção [落実拾い]

中ノ colono [契約労働者] 直接被害ナカリシモ armoca [almoço 昼食] 後ハ就働中

止ノ事トシ夫々避難準備中農場トシテハ戦線

近く危^マ儉ヲ感スルニ至レルヲ以テ家族ハ一時 Campinas

日本旅館ニ避難ノ事トシ後 2 時自動車ニテ避難セ

シメタリ 場員一同本部ニ止宿スル事トセリ

夜警 宮地 藤原

製材所：停電ノ為メ大掃除

注記：後 11 時塹壕新設（農場カンピナス間）ノ必要

アリ Camarada [臨時雇労働者] 要求サレタルモ労働者全部逃亡

ノ故ヲ以テ拒絶

[以下、9月16日から10月2日まで、用箋の項目名に関係なく戦闘関係記事のみを記入。
農場幹部による検閲サインも記入されなくなっている。]

9月16日 [金] 天気：曇り後雨

非常時対策協議 家木事務カンピナス避難係ト

シテ出市、全後 Alvaro 氏来場出市

休業但 重要書類其他珈琲（皮付）

倉庫内ニ埋蔵 ピンガ全様万事

牧場バーラ [隣接する Barra 牧場] 一部借受肉牛放牧セリ

既ニ農場内 Bourbon colonia [労働者住宅] 及 Bocayuba

植林受負人宅等軍人ノ強要ニヨリ在住シアリ

敵飛行機飛来爆弾数个投下追々接

近シツ、アリ 就働中止

夜警 池田、有馬、

9月17日 [土] 天気：曇

農場教会騎兵宿舎 小学校赤十字ニ貸与ノ

事トナル Alvaro 氏来場

農場上空ニ於テ両軍飛行機空中戦ヲ

行ウ 夜警 池田、有馬両氏

農場一般休業

9月18日 [日] 天気：曇

早朝ピンダ農場支配人ヨリ電話ニテ同場 Sapucaiga

Garatingeita [Guaratingueita] 間塹壕設置ノ為メ労働者出働方

強要サレタル旨如何スベキカ伺越

前10時15分前敵飛行機来襲

~~Jaguary~~ 一帯敵軍主力ナキモノノ如ク

戦況探査スルモ全ク五里霧中要之敵軍主力ハ

Jaguary 方面ニハナク Caburas [Cabras] 方面ニ向ヒツ、アルカ如

シ 農場一般休業

9月19日 [月] 天気：晴

終夜砲声ヲ聴ク前11時敵機襲来 Colono [契約労働者]

Roça [除草作業] 就働中ノ Colono [契約労働者] ニ対シ機関銃發射ス
カンピナス市停車場附近ニ爆弾6個投下

夜警 宮地、藤原

農場一般休業

9月20日 [火] 天気：晴

後2時農場上空ニ於テ飛行機五台空中

戦■■ヲ行ウ Alvaro 氏来場

避難家族別ニ変リナシ

夜警 池田、有馬

農場一般休業

9月21日 [水] 天気：晴

Alvaro 氏来場 聖市総領事館ヨリ両農場被害程度ノ

照会越 当地方戦況ト共ニ返書發

両軍飛行機飛来カンピナス市へ爆弾二個投下

セリ 農場一部就働中

夜警 池田、有馬

9月22日 [木] 天気：晴

銃声比較的近クニ聴ユ

敵飛行機カンピナス市飛行場へ爆弾投下セリ

農場一帯数日前ニ比シ稍々平穩ニ帰シ Bocayuba

Eucalypto [ユーカリ] 受負住宅ニ止宿セル歩兵幹部移動前進

セリ 夜警 堀部、仁科

農場一部就働中

9月23日 [金] 天気：晴後曇

戦線聖州軍ニ不利ニシテ総退却開始セリ 農場奥地

Bocayuba ニ敵彈射撃ヲ受クルニ到リ Rio [河] Atibaia

ヲ挟ミ対峙中、

夜8時20名ノ敗残兵来場夕食ノ強要ヲ受ケ一同

合宿所ニ宿泊セリ、赤十字及騎兵滞在中

9月24日 [土] 天気：晴

軍隊ノ異動早朝ヨリ盛ニシテ戦線農場内

Cafezal [珈琲園] ニ引カレ全ク農場ハ戦場ト化スニ到リ

Colonos [契約労働者] 逐駆シツ、アリ場員一同農場ニ

踏止マル覚悟ナリ、カンピナス市へ避難中ノ家族一同
本朝7時25分聖市ニ避難セシメタリ
同日聖州軍150名来場夜ニ到リ至リ敵軍近キ故
ヲ以テ一同引上グ

9月25日 [日] 天気：晴 日曜日

早朝昨日引上ケタル軍隊及赤十字隊及騎兵隊
来場活動開始セラレ Cafezal [珈琲園] ヨリ Laranjal [柑橘園] ニ
至ル線ヲ第一線トシ敵軍ト対峙シツ、アリ
昼間何等ノ変化ナカリシモ夕方ヨリ大砲及小銃声ヲ
聞キ開戦愈々迫レルガ如シ
敵飛行機来襲 Anhumas 農場塹壕ニ爆弾
投下セルガ如シ
聖市避難家族一同変ナシ 夜警 仁科及西村
Engenho [蔗糖製造所] ニ一部兵士侵入ピンカ少量ヌスミ去
ル Jose Ferreira 宅兵士侵入衣類等
全部盗マル [この記事のみ Engenho の項に記入]

9月26日 [月] 天気：晴

昨日ヨリ滞在中ノ軍隊■■■■歩哨ヲ出シ
敵地調査中敵軍既ニ農場内ニ一部侵入
セルカ如ク緊張シ来レリ
敵飛行機来襲空中偵察ヲ行ウ
農場本部裏庭ニ避難用土塹堀鑿

9月27日 [火] 天気：晴

9時

農場本部附近滞在中ノハ軍隊ハ全部引上
農場ヨリ Campinas ニ向ウ境界ニ警備シ
ツ、11時半リオ軍数名来場12時ヨリ戦
闘開始セラレ農場本部上空小銃大砲丸ノ往復ス
ルモノ多ク後5時頃ニ到リ銃声遠ノケリ
大ナル損害モナク当農場ハリオ軍ノ手中ニ帰セリ
目下尚戦闘係續中、後5時半(記帳)
尚夜中モ引續キ猛烈ナル戦闘展開シ小銃弾機関銃弾
ハ雨ノ如ク飛来加フルニ São Paulo 軍ヨリ發射スル
一種ノ爆弾多数本部附近ニ投下セラレ場員一同
極メテ危^マ儉ナル状態ニ陥リタリ
夜警 宮地、藤原
Pinda [農場] ヨリ電話アリ該地方平静ト言フ
Sylvio 氏ヨリ問合せアリ、弾丸来襲ニ関シ聖州軍
司令官へ注意方依頼ス

9月28日 [水] 天気：晴

早朝昨日ヨリノ戦闘引續^マ係續中、本部附近ニ

盛ナル爆弾ノ猛射ヲアビ前2時止ナク場員一同
 本部裏庭ノ土穴中ニ避難セリ
 爆弾ハ本部附近、農場広場ノ玉蜀倉庫ヲ破壊
 及広場、本部裏 Campo Exp [試験農園]、Colono [契約労働者] 用 pasto [牧草地]
 ソノ多数拾個所ニ弾コソ見ル農場本部モ
 数個所ノ小銃弾コソ見前10時頃ヨリ稍戦闘
 衰微セルガ尚稀レニ砲声ヲ聞ク
 避難土穴保強~~ノ為~~ (薪及土ヲ以テ) 記帳後1時
 目下ノ処場員一同無事、後5時雷雨豪雨ト同時
 ニ猛烈ナル戦闘開始セラレ終夜爆弾
 小銃丸飛来シ土穴中ニ一夜ヲ明セリ
 São Paulo 軍ニ放火ニヨリ Pasto colono [契約労働者用牧草地] 一
 部燃焼セルモ幸ヒ来雨ニ会ヒ消火セリ

9月29日 [木] 天気：晴後曇雨 10 耗

日中モ時々爆弾、小銃丸ノ見舞ヲ受クルモ
 猛烈ナル戦闘開始セラル、ニ至ラス場員一同
 休息中、夜ニ至リ Rio 側時々發射セルモ
 São Paulo 側應戦ノ模様ナク終止セリ

9月30日 [金] 天気：晴

本朝両軍24時間停戦命令ニヨリ両軍
 指揮官 Pasto [牧草地] ~~colono~~ニテ Anhumas ニテ全員
 記念撮影ヲ行ウ Rio 軍幹部ノ来場ヲ
 受ク 幸ヒ農場一同無事
 Colono [契約労働者] 牝牛6頭及豚数頭射殺サル
 農場騾馬一頭脚部銃丸ニテ負傷セリ
 (記帳) 11時半 後1時半講和不調ノ為メ3時ヨリ
 再度戦闘開始スベシトノ Rio 軍指揮官ノ注意ニヨリ
 場員一同プロニゼ小作人部落空屋ニ避難セル農場本部附近銃声
 ナク取調ヘノ結果 São Paulo 軍既ニ後退セリト
 ノ事ニテ一同後9時帰場セリ
 宮地、藤原後始末ノ為メプロニゼ宿泊
 São Paulo 軍ノ放火ニヨリ Pasto [牧草地] Beado
 一部燃焼セルモ大事ニ至ラス消火セリ
電話不通トナル

10月1日 [土] 天気：晴

宮地藤原前10時帰場
 Rio 軍主部隊ハ農場境界ニ前進騎兵一部
 機械置場ニ止宿中 赤十字止宿 ソノ後ノ報告ニヨレ
 ハ Rio 軍既ニ Campinas 占領入市セリ
 後 Alvaro 場員来場
 夜ハ場員一同ピンカニテ祝盃ヲ挙ク

附近農場ハ全部 Rio 軍及 São Paulo 軍ノ為メニ破
壊セラレタルモ本場ハ大ナル損害モ受ケサリシ
不幸中ノ幸ナリ

10月2日 [日] 天気：晴

日曜日

São Paulo Rio 軍ニ占領サレタリトノ風聞アリ
或ハ確實ナラン

São Paulo 避難家族ヨリノ通知ナシ

[以下、通常の「農場日誌」の記録にもどる]

10月3日 [月]

本部：本日ヨリ平常通り各仕事着手

São Paulo Campinas 間電話不通 汽車不通

農場 Campinas 間電話開通

牧畜：各 Pasto cerca [牧草地の柵] 修繕中

その他：州道交通恢復自働車（軍人）ノ往復盛ナリ

Dr.Silvio 氏ヨリ見舞電話受

注記：州道行進中ノ Rio 軍騎兵 Bracatinga 造林ノ一部ニ

放火甘蔗園ベリニソヒ燃焼 Sitio de [Leoncio de] Carvalho 雑木

林焼失幸ニ早急消火ニ努メタルヲ以テ甘蔗園ニ入火

セズ消火セリ

10月4日 [火]

本部：宮地、堀部ピンダ農場へ自働車ニテ出発午后三時。
汽車（本日ヨリ開通）

珈琲：各所ニ涉リ珈琲園ノ塹壕埋メ。

牧畜：牛群整理、Cerca [柵] 修繕

注記：電話長距離開通ス（ピンダヲ除ク）

領事館、サントス駐在員、聖市家族へ電話通知ス。

牛式頭ヲ殺シ労働者ニ分配ス。

10月5日 [水]

本部：本部片付け終ル。 Alvaro 場員帰場

本部ノミ電気来ル。

修繕：Colonia [労働者住宅] 其他銃丸損傷家屋其他修繕

牧畜：牛豚群整理中、Cerca [柵] 修繕

10月6日 [木]

修繕：戦禍修繕

牧畜：Cerca [柵] 直シ続継

牛群集メ。豚群整理。

注記：Pasto [牧草地] Bourbon ニ発火大事ニ至ラズシテ消止ム（電線発火）

自働車手入運轉開始ス。

Colonia [労働者住宅] 電燈修繕

Retiro 川縁ニ軍人死屍ヲ發見ス。

10月7日 [金]

本部：聖市へ避難中ノ家族連本日午後三時帰場

Alvaro 場員出市。(農場自働車初出市)

修繕：戦禍修繕

牧畜：Cerca [柵] 修繕

牛群、豚群整理

注記：電話線修繕ノ為メ職工来場。

10月8日 [土]

本部：宮地次席、堀部氏 Pinda ヨリ帰任

修繕：戦禍修繕 (家根)

牧畜：Cerca [柵] 直シ

牛群整理

注記：Atibaia 農場物品盗出者ヲ搜シニ農場ニ来ル

10月9日 [月]

珈琲：第三回開花中 (全園ニ渉ル)

10月10日 [月]

修繕：戦損ケ所修繕中

牧畜：牛群整理 Pasto cerca [牧草地の柵] 修繕中

10月11日 [火]

本部：Santos 由リ君塚様来場

São Paulo 軍ノ将校 (Tenente Ferrera 氏) 来場

牧畜：Cerca [柵] 修繕

10月12日 [水]

牧畜：Cerca [柵] 修繕中 (Pasto [牧草地] Olaria)

注記：更ニ 15 日迄 Feriado [休日] 宣布サル

10月13日 [木]

牧畜：Pasto [牧草地] Brejão Cerca [柵] 修繕

10月14日 [金]

牧畜：cerca [柵] pasto [牧草地] Brejão 修繕中

10月15日 [土]

牧畜：cerca [柵] 修繕中

10月17日 [月]

本部：Alvaro 藤原場員 Atibaia 町へ荷物自働車

受取ノ為メ出張

注記：本日ヨリ 60 日間 Moratria

Feriado Nacional [国定休日] ハ 15 日ニテ終ル。

10月18日 [火]

本部：Alvaro 藤原場員本日帰任

10月28日 [金]

注記：聖州軍ニ徴發中ノ荷物自働車本日帰場破損
甚タシク使用ニ耐ヘズ

II 「カンピナス農場月報」1932年8月～10月

写真 Pinda 行 [欄外赤字]

カンピナス農場月報

[印]

八月一千九百三十二年

Fazenda Monte d'Este de Campinas

[署名二名分]

氣 象

- 概 況 月初降雨四回雨量 37mm アリテ植生ニ好影ヲ及ボシタルモ、雨期ノ初期タルベキ中旬ヨリ却ツテ雨無ク僅ニ月末一回 21mm ノ降水ヲ見タルノミニテ初春ノ發育遅延シタリ。
- 気 温 本月最高 90° F 最低 40° F
- 降 水 本月中降雨回数五回、雨量五十八耗。前年十月以降通計 1471m.m.

建 設

- 柑橘コロニア 第一棟工事中 進捗程度 60%

修 繕

- 自働車々庫模様替 工事中 進捗程度 90%

珈 琲

- 生 育 状 況 上旬生育良好ナリシ処 新梢生育時タル本月中旬以降降雨無ク而モ寒風吹き為ニ落葉多ク稍植生不良ニ陥ル。
- 開 花 Amarello 区ヲ主トシテ第一回開花アリ、天然乾燥ノ為メ結果率極メテ低シ。
- 収 穫 本月ニ入り Terra Roxa 区 Bourbom 区ヲ終了シ十七日本年度珈琲収穫ヲ完了ス。例年ニ比シ一ヶ月早シ。生果収量 10.592 俵。
- 乾 燥 陽光乾燥ヲ主トシテ進捗中
- 調 製 機械並ニ手造進捗中
本月中調製高 541 俵 期首ヨリ通計 1.311 俵
調製進捗程度 40%
- 發 送 時局ノ為メ依然送發見合中
- 販 賣 サントス珈琲取引休止中ニ付販賣無シ
- 害 虫 駆 除 ウガンダ蜂全園放飼作業中 各区駆蟻中。
Amarello 区残果摘採中

○除 草 十九日ヨリ Bocayuba 区 Botafogo Novo 区 Triang [u] lo 区第四回 (f.1)
[印]

除草開始

○補 植 Amarello 区 Bocayuba 区 Botafogo Novo 区 Triang [u] lo 区 Botafogo
区補植中。

○コロノ余作地 三十一日分配ス。

牧 畜

○繁 殖 牛 本月中出産：カラクー種一頭 雑種二頭 計三頭
斃死：カラクー種犢一頭 セブー種犢一頭 計二頭
賣却：カラクー牝一頭
月末保有頭数 274 頭

○肥 育 牛 本月中斃死：一頭 売却：一頭 月末保有頭数 660 頭

○養 豚 本月中出産：三頭 斃死：一頭 販賣一頭 月末保有頭数 115 頭

○畜 群 移 動 時局漸次逼迫ニ連レ畜群ヲ農場奥牧場へ移動ヲ。
行フ飼養ニ悪影響甚シ。

○商 内 肥牛購入希望者モアレドモ時局考慮商内一切中止中

○糞 量 調 査 堆肥製造ニ関スル正確ナル数字算定ノ為メ冬
期排糞量調査ヲ施行ス。

植 林

○既 植 区 補植用植穴堀、油桐区除草、殺蟻

○新 植 区 Bocayuba 新植予定地整地中、

種 苗

○母 本 園 除草施行。間作フェジヨンデポルコ収穫
九日ヲ中心ニ柑橘母本大部開花ス
接穂採取

○ボンテアルタ苗圃 柑橘及アバカテ接木 本月中柑橘苗木発送 692 本

○ボカユーバ苗圃 植林苗木養成。 本月中フェジヨンマッタマツト発送 6 本

○ラブラトリオ 農用薬剤製造。殺蟻機実験中。

甘 蔗

○甘 蔗 畑 作業無シ。

○ピンガ醸造 休止中。

○玉蜀黍製粉 作業中。 (f.2)
[印]

小 作

○小 作 者 玉蜀黍収納月初終了。次年度耕作準備ニ着手ス。

肥料製造

- 堆 肥 敷草搬入。
- 特 許 竈 玉蜀黍其他利用作業。

製材所

- 原材引込 農場内ニ散在ノ原材搬入中

煉瓦製造所

- 煉 瓦 焼 月末迄作業。後休止

土地改良

- 再生林伐去 Capoeira “Bocayuba” 伐去、薪材伐出搬出中。

本 部

- 隔月例支拂 本月ハ支拂月ニ當ルモ時局ニ鑑ミ中止。
- 来 訪 者 (一日) 大原武夫氏 (三日) 害虫検査官
(四日) 岩部忠夫氏 (二十二日) ブラ拓近藤、加藤両氏

雑 件

- サンパウロ護憲運動 前月九日ニ突發セル該記運動ハ本日ニ至ルモ終局ヲ見ズ、豫メ共同策動ニ出ズ可ク何等カ連絡アリト見ラレタル Rio Grande do Sul, Minas Geraes 両州立タズ聖州孤立ニテ奮闘、州南境 Itararé 戦線ニテ聖州軍 Bury 附近迄退却セル外北部中央線戦線ハ能ク Cruzeiro 附近ニテ固守シ本場ニ最モ近キミナス州境西部戦線ハ双方共強力ノ駐兵ナク比較的安穩ニ経過シテ中旬ヲ終リタリ。此ノ間農場ニ於テハ畜類徴發ヲ未然ニ防グ対策、ガソリン欠乏並ニ車台徴發防止ノ為メ自働車運轉休止、現金取扱ノ極力縮減等ノ外ハ殆ンド平常通り作業ヲ續継シ居タリ。然ルニ二十日頃ヨリ聯邦軍ハカンピナス市ヲ占領シテ聖州
ノ死命ヲ制セントノ意図ヲ持ツテ西部戦線強襲ヲ開始シ、Ouro-fino ヨリ Eleuterio ヲ奪取スルニ及ビ聖州軍西部戦線司令部ハ Jaguaray (モジアナ本線分岐点、農場ヨリ北方八キロメートル) ニ後退セリ。此ガ為メ農場内ヲ通ズル州道ニ添ヒ軍事運動漸ク活撥トナリ農場ハ夜間戶外消燈スル事トセリ
月末ニ至リ Itapira 占領セラレ退却兵ハ一時カンピナス迄テ押寄せ農場附近モ騒然タルモノアリ。場員集合対策ヲ定メ夜勤制ヲ敷キテ此ニ備ヘタルモ

(f.3)
[印]

昼間作業ハ殆ンド平常通り此ヲ繼續シツ、本日ヲ終ル。

聖市農産物市況

或種ノ商品ハ既ニ欠乏ヲ告ゲ来レルガ如キモ小賣公定相場ハ強制セラレツ、アリテ物價騰貴無シ。市場相場建タズ。

(f.4)

千九百卅二年八月中従業員欠勤及休暇表

Fazenda Monte d'Este de Campinas

姓名	病欠勤	事故欠勤	給与休暇	備考
/	/	/	/	/

(f.5)
[印]

八月々報附録

伯国主要農産物輸出高表

千九百三十二年上半期分（自一月至六月）

附 過去四ヶ年全期比較 [表省略]

(f.6)

写 Pinda 行 [欄外赤字]

カンピナス農場月報

九月一千九百卅二年

Fazenda Monte d'Este de Campinas 山本 [印]

氣 象

- 概要 要 本月ハ乾、雨期ノ変換期ニテ時々小雨ヲ見ル可キ [二名分の署名]
筈ノ処本月ニ入りテヨリ却ツテ降雨無ク、強風吹キ、著敷シタ乾燥ノ状ヲ呈シタリ、氣候順調ト言フ可ラズ。
- 気温 本月中最高 94° F (13 日) 最低 54° F (24 日)
- 雨量 本月中降雨一回 (28 日) 雨量 10mm
自千九百三十一年十月至千九卅二年九月雨量計 1.481mm

建 設

- 柑橘コロニア 第一棟工事進行中ノ処中旬時局逼迫ニテ中止進捗程度 90%
- 粗糖工場 ピンガ醸造採算割ノ為メ甘蔗ヲ粗糖製造ニ利用ノ目的ヲ以テ附近小農家ヨリ煮沸釜ニケヲ古物購入ピンガ醸造所ヲ少シク増築シテ此ヲ据ヘル事トシ六日工事ニ着手ス。

修 繕

○自働車々庫模様替 自働車々庫及独身住宅模様替中ノ処五日竣工ス。

珈 琲

- 生育状況 降雨不足ノ為メ新梢發育不良。従テ次年度大豊産ハ期待シ得ラレズ。
- 開 花 全園ニ涉リ第二回開花（九日）ヲ見タルモ乾燥ノ為メ結果率ハ低シト認メラル。
- 収 穫 本収穫ハ前月十七日終了シタルモ引續キ地上散果再収穫ヲ施行、Bourbom 区 Atibaia 区ヲ残シテ時局ノ為メ作業休止ス。
- 乾 燥 再収穫果陽光乾燥作業
- 調 製 引續キ機械精造中ノ処時局ニ因リ上旬ヨリ休止
本月中調製出来高 247 俵 期首ヨリ通計 1.558 俵
- 發 送 依然見送中。
- 販 賣 依然商内皆無。

(f.1)
[印]

- 除 草 Triang [u] lo 区ノ雑草 Sapé [ブラジルチガヤ] 多キ部分耕起 Experiencia 区除草
- 補 植 Paulo 区補植手入、Formado 区、Terra Roxa 区補植作業、
- 害虫駆除 Amarello 区樹上残果再収穫中ノ処三日終了五日害虫検査官ノ検査済ミ。全時ニ全園ニ涉リ山崩シ作業開始指令ヲ受ク。
ウガンダ蜂放飼作業繼續中。
ウガンダ蜂放飼ニ必要ナル収穫後地上並ニ樹上残果数調査実施中、追テ結果ハ報告スル事アルベシ。
- コロノ余作地 中旬ヨリ農場作業困難ニ陥リタル為メ各自余作地随意ニ整地中。

牧 畜

- 繁殖牛部 本月中生産 カラク種一頭 雜種一頭 月末保有頭数 275 頭
- 肥育牛部 本月中販賣 二頭 月末保有頭数 658 頭
- 養 豚 部 本月中販賣二頭 喪失 2 頭 斃死一頭 月末保有頭数 110 頭
- 時局ト牧畜 時局ノ為メ商内見合セ中、
畜群ハ全部 São Jose 区奥牧場ヨリ Fazenda [農場] Barra 牧場一部ヲ借り追込ム、繁殖牛、肥育牛共悪影響ヲ蒙ル事夥シ。
月末騎兵斥候牧場内横行ノ為メ畜柵ノ切断被害多シ。

柑 橘

- 既 植 区 殺蟻、道路手入等

○新植区 三日新植予定地残部火入ス、引續キ耕起中
五日新植予定地、植穴測定開始ス。

植 林

○既植区 ユーカリ区 (Bocayuba) 補植穴堀
○新植区 Bocayuba 新植予定地整地十五日終了。
中旬ヨリ作業中止ス。

種 苗

○母本園 常務 (f.2)
[印]
○ボンテアルタ苗圃 接木其他常務 時局ノ為メ苗木發送ナシ。
○ボカユーバ苗圃 植林苗木養成 其他常務 ヌ
○ラブラトリオ 農用薬剤製造 殺蟻器試験等

甘 蔗

○甘蔗畑 作業無シ。
○ピング醸造 休止中。
○玉蜀黍製粉 中旬迄作業。

小 作

○小作者 新植付準備中。

玉 蜀 黍

○播種 播種準備整地中 (Bocayuba)

製 材 所

○製材 上旬作業 十五日動力送電中止ニ依リ大掃除施行。

煉瓦製造所

○煉瓦焼 休業中。

土 地 改 良

○再生林伐採 Capoeira [再生林] “Bocayuba” 薪材切出シラ中止シ玉蜀黍播種
整地中ノ処中旬時局ノ為メ中止中。

本 部

○場員往来 十六日家木事務、Alvaro 場員カンピナス出張
○来訪者 服部要平氏

雜 件

○聖州護憲運動

前月末 Itapira ヲ占領セラレタル後ハ聖州軍ハ Mogy-Mirin ヲモ放棄シテカマンドカイタ川ノ左岸ニ添ヒ防禦線ヲ張り農場迄ノ距離八基米突トナル。

二日ニハ此ノ塹壕工事ノ為メ農場労働者派遣方申込アリタルモ辞ヲ設ケテ謝絶ス。

(f.3)

[印]

五日ニハ Dr.Sylvio 氏ヨリモ聖州軍ノ形勢面白カラザルニ付キ注意スベキ旨報知アリ。

八日ニハカンピナス飛行場設備ノ為メ農場労働者派出方要求アリタリモ前回全様拒絶ス。

十日ニハ農場内ニ赤十字隊設置ヲ申込ミ来レルモ拒絶ス。

十一日ニハ Amparo 市占領セラレカマンドカイア川防備線ハ側面ヨリ衝カル、事トナリ、聖州軍ハ再び退キテジャグアリー川左岸ヨリ Pedreira ヲ結ブ線ニ陣地ヲ建テ直ス。

農場ヨリ距離 4 基米突トナル。

十四日ニハ Pedreira 方面ニ砲声ヲ聞クニ至ル。

十五日午前九時聯邦軍飛行機一台農場上空ニ現ハレ折柄州道ヲ通過中ノ牛群ヲ目懸ケテ機関銃及爆彈一ケヲ落シ珈琲園ニ落下爆發ス。労働者珈琲園ニ出働中ナリシモ被害無シ。

是ヨリ農場作業漸ク困難トナル。

斯テ農場ノ戦闘地ト化ス事到底免レ難シト見テ場員家族ヲ全日カンピナスニ避難セシメ場員並ニ本部附近ノ日本人ノミ合計十一名ヲ本部ニ結集農場守護ヲ決ス。本日ヨリ農場作業ノ殆ンド全部ヲ休止ス。

午後 Pedreira 占領セラル。全地ニハ農場へ電気ヲ送電スル発電所在ル事トテ其夜以後送電断タル。

夜農場トカンピナス市トノ中間程ニ塹壕開鑿ノ為メ労働者派出方申込ミ来レルモ前回全様拒絶ス。

十六日ニハ農場作業ヲ殆ンド全部休止シ若シ戦闘アラバ州道ニ添ヒテ行ハル可キ予想ノ下ニ労働者全部ヲサンジョゼー方面へ避難セシム。

在カンピナス場員家族ハ尚聖市迄避難セシムル必要起ル場合ヲ考慮シ家木事務ヲカンピナスニ派出又ピンダ、サントス、サンパウロヘノ連絡係トシテ Alvaro 場員ヲカンピナス市ニ駐在セシムル事トス。

重要書類其他ハ夫々戦禍ヲ免ル可キ手当ヲ行フ。

事態極メテ逼迫シ最早是以上拒絶ノ余地無シト見テ

此ノ日ブルボン区ノ畜舎ヲ通信隊ニ学校舎ヲ赤十字隊ニ教会ヲ騎兵隊ニ使用方承諾ス。

(f.4)

[印]

十七日ニハ聖州軍ハジャグアリー川ノ防禦線モ放棄シタルガ
如ク此ノ日両軍飛行機ハ農場上空ニテ空中戦ヲ演ズ。

十八日ニハ中央線戦線モ守ヲ失シピンダ附近動揺ノ
趣安田支配人ヨリ電話通知アリ、対策意見交換ス。

十九日ニハ銃声ヲ聞クニ至ル。

労働者ハ小康状態ヲ利用シ余地作ニ出働中ノモノ
アリシガ飛行機ノ射撃ヲ受ケ以後耕地ニ出ズルモノ
無シ。本日ヨリカンピナス市中ニ爆彈投下開始サル。

二十一日 聖市総領事ヨリ被害状況ニ付キ照會アリ。

二十二日 砲声銃声極メテ近クニ聞ユ。

二十三日 前夜中ヨリ聖州軍不利ニ陥リタルモノノ如クカル
ロスゴームス駅モ占領サレアチバイア川ヲ挟ンデ対陣ス。

農場内 Bocayuba 区ニ砲彈落下スルニ至ル。

二十四日 聖州軍再ビ退却農場珈琲園ニ陣ヲ張ル。

此ノ間一心亭ノ欄間ニ一砲彈命中セルモ少破損ニテ
済ム。本部ニハ約二百名ノ一隊来リ駐屯ス。本部ベランダ
ノミヲ幹部ニ貸与他ノ部分ニハ一歩モ入レシメズ。

此ノ日場員家族ハ聖市ニ退却セシメタリ。

二十五日 聯邦軍ハ攻撃ヲ開始シタンキーニヨ駅占領サル。

二十六日 珈琲園ニ陣ヲ張レル一隊退却シ本部ニ據ル
一隊最前線トナル。

本部ハ遂ニ砲火ノ巷トナルヲ知り本部後庭ニ避難用土
窟ヲ開鑿ス。

二十七日 本部ニ據レル一隊午後九時退却、本部ノ前方
一基米突ナル Pasto [牧草地] Anhumas NO.1 ノ高地ニ據ル。コ、ニ
本部ハ全ク両軍ノ間ニ介在ス。本部広場ニハブラジル
並ニ日本国旗ヲ揚ゲ中立ヲ標示ス。

午前十一時本部ニ聯邦軍斥候現ハレ、次テ聯邦軍ハ
珈琲園 Bourbom 区、Terra Roxa 区、Formado 区、Amarello 区
Matto [森] Ponte Alta ノ牧場境ニ據リ午後両陣地ノ間ニ戦
闘開始本部上空ハ銃丸ノ雨トナリ折々本部建物ニ
命中ス。聯邦軍発射ノ 75mm 野砲ハ命中確實ニテ
本部上空ヲ通過シ聖州軍中ニ落下スルモ聖州軍発射ノ
駁撃砲ハ聯邦軍陣地ニ届カズ本部附近ニ落下始メ

(f.5)

[印]

危険迫ル。射撃應酬終夜

電話幸ニ通ジ Pinda 農場無事ヲ知ル。

二十八日 戦闘前日全様。駁撃砲ノ効果ニ鑑ミ
避難用土窟補強工事ヲ施ス。夜中久シ振ノ雷雨
アリ、射撃、砲撃又激甚凄壯。電話不通トナル。

二十九日 戦闘日中前日全様。夜ニ入り聖州軍ハ沈黙ヲ守ル。

三十日 双方ノ間ニ和議進行中ノ由ニテ休戦ス然ルニ午后再ビ交戦状態ニ入りタルモ聖州軍遂ニ退却シ聯邦軍前進シ農場内ニ両軍ヲ見ザルニ至ル。

聖州軍退却ニ当リ牧場ニ放火ス。

農場遂ニ戦場状態ヨリ辛ジテ脱出シ得テ本月ヲ終ル。

以上。

聖市農産物相場表

市場相場建タズ

強制公定物價表勵行セラレテ小賣相場

騰貴無キ事前月ノ通り。

(f.6)

[印]

千九百卅二年九月中従業者欠勤及休暇表

姓名	事故欠勤	病氣欠勤	給与休暇	備考
/	/	/	/	/

[印]

(f.7)

(図 8)

写 Pinda 行 [欄外赤字]

カンピナス農場月報

[サイン二名分]

拾月一千九百卅二年

Fazenda Monte d'Este de Campinas 山本 [印]

気 象

概 況 上旬、中旬降雨温度順調、前月中ノ乾燥状態ヨリ救ハレ植生盛ントナル。下旬乾燥、高温一般ニ春期作業ヲ遅ラシメタリ。

温 度 本月中最高 96° F (28 日) 最低 57° F (10 日)

降 雨 本月中降雨回数七回 降雨量 110 耗。

九月ヨリ通計 120 耗

24 NOV. 1932 [スタンプ印]



図 8

建 設

柑橘コロニア 第 1 棟七日完成 (写真参照)

第 2 棟 第 3 棟工事中

粗糖工場 前月中ヨリ工事中ノ処十七日完成

修繕改良

珈琲殻散水設備 珈琲精選ニ依リ生ズル珈琲殻ハ珈琲園ヘ戻シ肥料トスルモノナルガ其ノ醗酵腐敗ハ極メテ徐々タルモノナリ。

此ヲ促進スル為メ余水ヲ利用シ散水装置ヲ設クル為メ
 中旬之ガ小工事ニ着手月末略竣工ス
戦災修理 玉蜀黍倉庫（家根砲弾被害中位）豚舎（家根砲弾
 被害軽微）労働者住宅（壁砲弾被害中位）乾燥場（砲
 弾被害軽微）其他建物家根銃丸被害修繕其他。

珈 琲

生育状況 本月中降雨ニ因リ樹勢大ニ恢復ス。
開 花 九日全園ニ涉リ美事ナル開花アリ。雨後ノ開花トテ前
 数回ノ開花ト趣ヲ異ニシ着果良好ナルガ如シ
 更ニ月末全園ニ涉リ小許ノ開花ヲ見タリ。
除 草 Experiencia 区五日終了。
 十日ヨリ全園ニ涉リ第四回（Expalmação 山崩シ）除草開始ス
 Triang [u] lo 区 Sapé [ブラジルチガヤ] 繁茂箇所ヲ耕返作業十五日終了ス (f.1)
補 植 各区ニ涉リ施工中。
施 肥 Terra Roxa 区ニ堆肥骨粉配合肥料施用開始（三日）
 緑肥 Feijão de Porco 播種開始（Triang [u] lo 区、Amarello 区
 Botafogo Novo 区終了ス）
 Morro de Pedra 利用ノ為メ緑肥 Mucuna [ハッシュウマメ] 播種中。
調 製 七日精選再開。
害虫防除 ウガンダ蜂放飼作業中。
發 送 時局安定ニ依リ第一回珈琲發送ヲ行フ
 27日 Serie “V” 375 俵（São Paulo 宛）
 31日 Serie “R” 375 俵（Santos 宛）
戦災跡片付 Amarello 区、Formado 区、Terra Roxa 区、Bourbon 区、Atibaia 区
 内ニ掘ラレタル塹壕埋ヲ三日ヨリ六日ニ終ル。

牧 畜

保健状態 時局中総畜類ヲ混合小面積ニ放牧セルモ幸ニ保健
 状態悪化ヲ見ザリキ。中旬迄デニ夫々旧放牧地ニ復旧ス。
繁殖牛部 本月中生産9頭 賣却1頭 斃死1頭 月末保有281頭
 20日農場生産犢牡41頭去勢並ニ炭疽病予防注射
 施行ス。
肥育牛部 本月中賣却3頭 月末保有655頭
養 豚 部 本月中生産12頭 斃死3頭 月末保有119頭
牧 場 火 入 Pasto [牧草地] Brejão 例年ノ如ク火入ス
戦災修理 畜柵切断箇所修理十日迄ニ大体終了ス。

柑 橘

作業活況 時局平静ニ帰シ雨期ニ入ツテ植付廻リ漸ク繁忙期
 トナル。

既植区 生育状況良好、殺蟻、贅芽搔キ、道路手入等。
新植区 コロノ間作物播種中
コロノ余作地 植穴引續キ測定、耕起、
 本年耕起シ植付セザル予定ノ部分ニ玉蜀黍播種中
 火入、播種準備中。 (f.2)

植 林

作業繁忙 植付期ニ入り準備繁忙。
既植区 1932年植付 Bocayuba ユーカリ区除草、補植、殺蟻、
新植区 植付予定地除草中ノ処二十四日火入、引續キ焼
 跡整理中。油桐一部植付
 請負人補植、植穴測定中
植林コロノ 間作物播種中、

種 苗

母本園 接穂採取、除草、殺蟻等。
ポンテアルタ苗圃 接木作業、苗木手入。
 十日ヨリ本年度植付予定柑橘苗木竹籠ニ移植開始ス。
 本月中柑橘苗木發送 247本 通計 2,013本
ボカユーバ苗圃 植林苗木育成、アシバリヘンブ播種地整地
 本月中マッタマツ苗發送 28本 通計 278本
ラブラトリオ 殺蟻器実験、農用薬剤製造等

甘 蔗

甘蔗畑 十九日粗糖試造ノ為メ収穫開始
ピンガ醸造 休止中
粗糖製造 二十日ヨリ作業開始毎日 60Kgr. 製造、製品ハ場内ニテ
 賣捌中

玉 蜀 黍

播 種 作付地除草中ノ処十五日終了全日防火線切開始
 二十四日火入ス。二十五日ヨリ播種開始ス。

小 作

小 作 者 一様ニ播種中 (米、玉蜀黍、フェジョン等)

製 材 所

製 材 七日作業開始、建築材、柑橘添木等 (f.3)

煉瓦製造所

煉 瓦 製 造 二十五日ヨリ作業開始

調 査 原料土改良調査中

肥料製造

堆 肥 干草伐及運搬
特 許 竈 作業中

本 部

作業一般 三日ヨリ殆ンド平常通作業開始ス。
場員来往 四日宮地次席堀部練習員ピンダ農場へ出張八日帰任。
二十日安田ピンダ農場支配人今村事務来場二十二日退場。
二十一日宮地次席サンパウロ市へ出張即日帰場
場員家族 聖市へ避難中ノ処七日帰場
来場者 十一日サントス君塚首席来場十三日離場
二十六日 Dr.Sylvio de Moraes Salles 来場
二十七日野崎外務省留学生来場
隔月例支拂 時局ノ為メ延期中ナリシ五、六月分支拂二十二日施行ス

雑 件

聖州護憲運動 九月卅日夜農場ハ漸ク両軍ノ間ニ介在状態ヨリ免レ
得タルモ更ニ聯邦軍陣地トナリテ聖州軍ハ既ニ準備シ
在リタルカンピナス手前ノ塹壕ニ據リ頑強ニ抵抗ヲ續
ケラレシニハ農場ノ苦難一方ナル可ク案ジタル所一日早
朝ノ情報ニ依レバ聖州軍農場内戦闘ヲ最後トシテ
総崩レトナリト聞ク。正午ニハカンピナス市占領セラレタル事
確實トナリ更ニ聖州軍ノ屈服ニ由リ聖市モ聯邦軍ノ手
ニ帰シ軍事行動終ルト情報アリ愁眉ヲ開ク。
労働者ハ續々帰宅シ午後 Alvaro 場員カンピナスヨリ強
行来場情勢攪ム。場内平穩。州道ヲ軍隊通過多シ。
二日ハ諸整理ニ費シ三日ヨリ平常通作業開始ス。此ノ
日電話線修繕カンピナス迄開通ス。
四日ピンダ農場実視ノ為メ宮地次席堀部練習員全地向
ケ強行出發ス。午后長距離電話開通シサントス、サンパウ
ロニ夫々通話ス。食糧不足、避難者疲労ニ因リ (f.4)
牛二頭ヲ労働者ニ給与ス。
五日 Alvaro 場員帰場、電燈復旧工事成リ送電始ム。
ピンダ電話初メテ通ジ無事ヲ知ル。
七日聖市へ避難中ナリシ場員家族帰場、八日宮地次
席一行帰場。
ステ戦災修理ヲ除キ全ク平常通作業進行ス。
牧場発火 三日州道添 Leoncio de Carvalho 氏所有牧場ニ兵士放
火場内ニ延焼スル事無ク消シ止メタルモ Botafogo 区珈
琲樹数十歩火ニ煽ラレ落葉ス。

六日 Pasto [牧草地] Bourbom ニ切断墜落中ナリシ電気線ヨリ発火
 牧場ニ延焼セルモ大事ニ到ラズ消止ム。
 戦禍無事経過御礼ミサ聖祭十六日農場主催廿三日労働者主催ニテ挙行ス。

ミサ聖祭

以上。

聖市農産物市況 [表省略]

備考、附圖壺葉、写真壺葉 [添付なし]

(f.5)

千九百卅二年拾月中従業員欠勤及休暇表

姓名	事故欠勤	病氣欠勤	給与休暇	山本 備考	[印]
—	—	—	—	—	(f.6)

Ⅲ 「ピンダ農場月報」1932年8月～10月

(サンパウロ総領事内山岩太郎「カンピーナス、ピンダ方面革命被害調査書」より抜粋)

聖州護憲運動ニ關スル同農場ノ日誌ハ良ク當時ノ模様ヲ描寫シ居ルヲ以テ左ニ轉載ス
 七月中

聖州護憲運ニ基ク軍事行動ノ爲メ中央線ニ沿フ「サンパウロ」州「リオ・デ・ジャネイロ」
 兩州境「ケイルス」驛附近ヲ中心トシテ兩軍對峙スルコト、ナリ運動勃發日タル七月九日
 ノ翌日ニハ既ニ中央線全般ニ亘リ鐵道並ニ自働車等ノ交通機關ハ軍隊輸送ノ爲メ専用セラ
 ル、コト、ナリ一般交通ハ杜絶セリ、此ノ際農場備付「フォード」型乗用自働車一台徵發
 セラレタリ、而テ右戰線ハ月末ニ至ル迄變化ナク對峙状態ヲ繼續セル爲メ諸交通機關モ
 追々復舊シ「カンピーナス」農場トモ電話並ニ書信ニテ連絡保タレ殆ント平常通り作業シ
 本月ヲ終リタリ此ノ間二十二日農場馬匹五頭ヲ徵發セラレタルカ内二頭ハ不合格ニテ返付
 シ越セリ

八月中

七日更ニ肥育用牛五頭ノ寄附ヲ要請サレタリ (合計十頭寄附ス) 戰況ハ對峙状態ニテ大ナル
 變化ナキモノ、如シ

九月中

聖州ノ護憲運動ニ關シテハ形勢有利又ハ五分五分トノミ信セラレタル處本月ニ入り敗戦退
 却ノ經路ヲ辿リ爲メニ農場亦一時不安状態ヲ經過セリ、概要次ノ如シ

九月八日 郡軍政官ヨリ塹壕隊人夫募集ノ通知アリ翌日農場労働者ノ内希望者十七名出役
 ス

九月十三日 避難民ノ輸送ニヨリ州道及鐵道ノ動態急増ス

九月十四日 「ピンダ」市ニハ避難民溢レ軍司令部モ「ピンダ」ニ移轉セリト傳ヘラル

九月十六日 工兵隊ヨリ塹壕開掘下見聞及人夫宿決定ノ爲メ豫備交渉員農場ニ來訪ス

九月十八日 工兵隊技師及人夫等着場「サブカイス」

自十八日一至

二十五日 軍ノ希望ヲ客^{ママ}レ倉庫ヲ開ケテ労働者數百人ノ宿所ニ充テ本部事務所ヲ開ケテ技師八名ノ宿舍ニ提供シ技師團ニハ炊事及乗馬ノ貸付等ノ便ヲ計リ聖市民ノ位置ニ於ケル奉仕ニ心掛ク一方万ノ場合ニ備フル爲メ辨護士「ドトール・グスターボ」ニ依頼シ損害賠償ニ關スル研究及手續ヲ進ム、二十一日ヨリ大砲及機關銃ノ音ヲ聞ク外「トラック」自動車將校、技師、人夫群出入盛ニシテ農場亦戰場ノ一部ノ觀アリ「グワラチンゲータ」市ハ空中ヨリ爆撃サレツ、アリ、農場従業員ノ多クハ婦女子ヲ避難セシメ男子ノミ働キツ、アリ 日伯兩國旗ヲ準備ス

九月二十五日 農場東北境地ニ塹壕開掘ヲ終リタル一團ハ全部退場、砲声ハ聞ユルモ農場ハ靜肅ニ歸ス別ニ「テ、・ケーラ」製粉所側ニ道路修理隊到着

九月二十六日「カンピーナス」トノ電話不通、「サンペードロ」ヨリ「テ、・ケーラ」ニ出ル道路修理中ナリ

九月二十八日 諸事情落付ク、「カンピーナス」電話通ス

九月二十九日 休戦説傳ハル

九月三十日 事務室ヲ復舊ス、以上ノ如ク一時不安状態ニ陥リタルモ幸ニシテ農場ニハ一壕モ開掘サレズ一彈ノ飛來スルナク諸作業一日モ休業ヲ要セスシテ繼續スルヲ得タリ

十月中概況

十月三日迄ニハ「ピンダ」市ハ完全ニ聯邦軍ノ管下ニ歸シ市民ノ多クハ一時家屋及商店ヲ閉鎖シタルモ軍隊ノ勸告ニ依リ開店シ次第ニ秩序回復ス、農場ハ一、二日間鐵條網材料撤収隊避難民及逃亡兵等ノ通過ヲ見タル外異狀ナク三日ヨリ全ク平靜ニ歸ス

被徴發自動車ハ二十日聖市ニ於テ受領部分品及附屬品ノ若干ヲ失ヒタルモ「モートル」其他主要部ニ故障ナク此ノ損料三百八十五「ミルレース」ト被徴發馬三頭代ハ政府ヨリ支拂ヲ受クヘキ證書ヲ受領シアリ 外ニ「カンポスト・ジョルドン」方面ニ在リテ退却シ遅レタル聖洲学生義勇兵三名四日ヨリ七日迄「テ、・ケーラ」ニ保護セリ

註

- 1 柳田利夫「山本喜譽司の『ブラジル人観』—『農場デ見ター九三二年護憲運動記』を通じて—」(『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』2、2008.1、pp.53 - 75)
- 2 山本喜譽司は1931年12月6日に農場を出発、単身日本へ一時帰国し、ほぼ半年後の1932年6月4日に農場に戻っている。(1931年12月6日付および1932年6月4日付「農場日誌」)この時期は、1931年9月18日の柳条湖事件以降、後に「十五年戦争」とも呼ばれることになる、中国との宣戦布告のない実質的な戦争状態へと日本が歩み出した時期であった。祖国を遠く離れたブラジルの地で、日常活動の記録であるはずの「農場日誌」にも、祖国の置かれた状況についての書き込みがこの時期から次第に散見されるようになっている。(「日本奉天占領ス」1931年9月20日付、「日支問題、英財政共良化セズ」1931年9月25日付、「日支紛争愈々逼迫セリ」1932年2月4日付)
- 3 カンピーナス東山農場が戦場と化していた9月21日の「農場日誌」には、総領事館からの被害程度報告照会に応じて、農場での戦闘状態と被害状況を認めた返書を総領事館宛送付したことが記録されている。在サンパウロ日本総領事内山若太郎は、護憲革命終熄後の1932年12月12日付で、「カンピーナス、ピンダ方面革命被害調査書」を内田康哉外務大臣宛送付している。その中で内山は、カンピーナス方面について「同市ノ近郊二十基米ノ距離ニハ三菱系東山農事株式会社経営ノ所謂東山農場アリ。在耕「コロノ」約六百人、内本邦人家族十一家族アリ。同耕地ハ九月

二十六日以後約四日間ニ亘リ聖州並ニ聯邦軍交戦ノ禍中ニ陥リタルカ、幸ニ死傷者ヲ出サス。當時ノ模様ハ別紙山本農場主任ノ手記ニ詳述ノ如シ」とし、前述の山本喜譽司の手記を添付している。内山は続いてピンダモニャンガーバ方面についても、「〔ピンダモニャンガーバ〕市近郊ニハ三菱系東山農場アリ。右耕地ハ面積二千五百〔アルケール〕餘、〔コロノ〕六百家族アリ。既ニ第三戦塹壕予定地トシテ数百名ノ人足入場シ、一時非常ノ混雑ヲ見タルモ、幸ニシテ革命終了シタル為メ、其損害ハ僅少ニテスメリ。聖州護憲運動ニ関スル同農場ノ日誌ハ、良ク當時ノ模様ヲ描写シ居ルヲ以テ左ニ転載ス」として、以下、ピンダ農場の「日誌」を直接引用している。（外務省外交史料館：「伯国内政干係雑纂 内乱干係 外国人及船舶被害干係」A6.4.0.4-1-2）この「日誌」については史料翻刻Ⅲおよび、注（13）を参照のこと。

- 4 1932年8月分を嚆矢に、途中数年分を欠くものの、1976年8月分までが現在まで確認されている。この「農場月報」の写しは、ピンダ農場にも送付されていた。なお、「農場月報」の記載形式の変遷や作成方法の変化については、別稿で改めて論じる予定である。
- 5 「農場月報」では、「農場日誌」の記録をもとに過去一月の農場作業・活動の総括的な報告である本文に続き、農場そのものの活動ではないが、直接間接に農場への影響が考えられる事柄についての報告である「雑件」、農場職員の「欠勤及休暇表」、「聖市農産物相場表」、「伯国主要農産物輸出高表」などが、その他の「関係図」、「写真」などを添付して送付されている。護憲革命運動期の「農場月報」雑件には、同運動の趨勢と農場が蒙った被害について詳細な記事が見られる。その多くは「農場日誌」の記録に基づいているが、「農場日誌」では確認できず、他の何等かの記録に依っている記事も少なくない。なお、東山農場に現存する「農場月報」には、当時添付・送付された図や写真類は残されていない。
- 6 「農場日誌」「部門日報」には、簿冊にまとめられていない大量の断簡が未整理のまま仮保存されている。
- 7 農場の休日である日曜日の「農場日誌」には農場幹部による検閲の署名ないし捺印が省略されていること、幹部職員が離場して不在中の日誌には該当する職員の検閲サイン・捺印が見られないことなどから、「農場日誌」は同日中に作成かつ幹部職員の検閲を受けることを基本としていたものと考えられる。またここで紹介する護憲革命期の「農場日誌」の一部には、刻々と推移する状況に従い、記録した時間を明記しているものすら見ることができる。なお、一九三一年から三六年まで本部の会計助手を勤めていた後藤留吉の回想によれば、農場内にある農場本部事務所では「農場部の職員が仕事をおえて現場から戻って来て、その日の日報を提出されるのを待って、一日分を整理しおえてはじめて終業となるのである。普通午後七時から八時までかか」ったという。後藤留吉『雑草の如く生きて』改訂版、カンピーナス1997年、私家版、p.108
- 8 農場の各部門では、毎日の活動記録を「部門日誌簿」に記録していたと思われるが、現在までのところ「珈琲部日誌簿」の一部が確認されているだけである。後述するように、「農場日誌」に記録のない事柄が、「農場月報」に記録されていることから、このよな「部門日誌簿」ないし、その他の記録類の存在が想像される。
- 9 1935年9月25日～12月31日分の「農場日誌」簿冊に、「総合日誌」の書式修正のための原案と思われる手書き文書が挿入されている。しかし、やはり一枚ものの「総合日誌」では拡大する事業内容の把握には不十分であったため、この原案が実際に採用されることはなかったと思われる。（表3の書式6参照）
- 10 初期には印刷が間に合わず全て手書きの「部門日誌」が作成されていたが、程なく印刷された専門の用紙が準備された。

- 11 1928年から1930年までの現存する最も古い「農場日誌」簿冊は、大幅な「農場日誌」作成方法の変更が実施された時期に、当時現存する「総合日誌」を製本し直し、改めて「農場日誌」という表題をつけ簿冊として綴じ直されたものと考えられる。1930年3月1日から4日までの日誌は1930年3月1日～6月10日分までの合綴した簿冊と重複していることもこの間の事情を想像させる。また「農場日誌」という表記のあるラベルも1928年当時の帳簿類に貼付されていたものとは異なっている。
- 12 この時期の「農場日誌」簿冊では各「部門日報」が一日ごとにまとめられているが、1939年6月、7月分の「農産加工会社日報」は、「農場日誌」簿冊の最後に一月分がまとめて綴じられている。以後1939年10月分までの「農産加工会社日報」が「農場日誌」簿冊に合綴されている。
- 13 総領事内山岩太郎が書翰の中でピンダ農場の「日誌」として引用しているものは、その書式からおそらく「農場日誌」ではなく、「農場月報」の「雑件」部分と考えられる。ピンダ農場からサンパウロの総領事館に「農場月報」そのものが送付されたのか、その「雑件」部分の要約のようなものが送付されたのかは判断できないが、現在までのところピンダ農場については、「農場日誌」「農場月報」ともに全く現存が確認されていない。
- 14 東山農場の一部門として発足した酒造工場は、その後、カンピーナス農産加工会社として、独立した組織と見做され経営されていった。なお、単体の「農産加工会社日誌」Diario da Indústria Agrícola Campineira Limitadaについては、現在までに1943年6月7日～24日、1944年1月12日～3月4日、1949年1月1日～12月31日付のもの都合436日分が整理・登録されている他、未整理文書中にも1959年分までのものの存在を確認することができる。
- 15 カンピーナス東山農場の農場長で後にカーザ東山の総支配人となった山本喜馨司は、三菱入社後、岩手県小岩井農場で半年余り実地研修を受け、最初の赴任地中国から帰国してブラジルに赴く直前にも再度同農場を訪れている。またブラジルから一次帰国の際もほぼ例外なく同農場を訪問しているなど、山本と小岩井農場の関係には浅からぬものがある。現在、小岩井農場展示資料室には同農場の「農場日誌」が展示されているが、国内外に展開していた東山農事の活動を考える上で、現存するカンピーナス東山農場と小岩井農場の「農場日誌」を初めとする史料群の比較調査にも大きな成果が期待できると思われる。

東山農場史料の所蔵者、東山農場 Fazenda Tozan do Brasil Ltda. 取締役社長岩崎透氏には、貴重な史料群の整理・調査に携わる機会を与えていただいたばかりでなく、物心両面にわたり多大の便宜とご協力とをいただいた。厚く御礼申し上げたいと思う。

また、同農場取締役塚本恭子さん、文化担当 Gregório Haddad さん、史料整理作業に協力いただいたカンピーナス大学の学生諸君にも、この場を借り心よりの謝意を表させていただきたいと思う。

“Diario da Fazenda Monte d’Este” y el movimiento constitucionalista de 1932

Toshio Yanagida (Keio University)

Entre una amplia variedad de documentos históricos que actualmente se conservan en la hacienda Tozan de Campinas, São Paulo, indudablemente el “Diario da Fazenda” es uno de los de mayor valor histórico. Desde los primeros años de su fundación, en la sede de la hacienda se completaba un formulario denominado “Diario Geral”, en el que se resumían las informaciones diarias entregadas por cada una de las secciones del campo, café, ganadería, forestación, etc. Con el transcurso del tiempo y conforme al desarrollo de las actividades agrícolas, resultó bastante difícil resumir todos los movimientos del día en solo una hoja, por lo que se adoptó una nueva forma de registro llamado “Diario da fazenda”, que consistía en seis o siete jornales independientes, o “Diario da secção”, correspondientes a cada sector productivo de la hacienda. Sin embargo, después de unos años de prueba, al advertir la conveniencia de apuntar todas las noticias de la hacienda en una sola hoja diaria, se volvió a emplear el sistema de “*diario geral*”, esta vez con el título de “Diario da Fazenda”.

Además del “Diario da Fazenda”, cada fin de mes se preparaba un informe titulado “Nojo Geppo”, en el que se comunicaban a la casa matriz en Tokio las actividades del mes transcurrido, con datos no solamente del “Diario da Fazenda” sino también de otros registros que se elaboraban en la sede paulista. Estas dos fuentes contienen datos de invaluable información para la investigación histórica de la inmigración japonesa en São Paulo.

En este trabajo, presentamos una recopilación de noticias referentes al movimiento constitucionalista de São Paulo en 1932, según aparecen en los registros del “Diario de Fazenda” y el “Nojo Geppo”. Su análisis nos permitirá profundizar nuestra comprensión sobre la postura de la hacienda Tozan y de la colonia japonesa en el estado de São Paulo al enfrentarse con dicho acontecimiento de la historia política y militar paulista.

Keywords: São Paulo, movimiento constitucionalista, Diario da Fazenda, Informe mensual

執筆者一覧 Authors

石川友紀（琉球大学・名誉教授）
Tomonori Ishikawa (University of the Ryukyus)

水野剛也（東洋大学・准教授）
Takeya Mizuno (Toyo University)

小澤智子（武蔵野美術大学・専任講師）
Tomoko Ozawa (Musashino Art University)

増田直子（日本女子大学・非常勤講師）
Naoko Masuda (Japan Women's University)

柳澤幾美（名古屋外国語大学他・非常勤講師）
Ikumi T. Yanagisawa (Nagoya University of Foreign Studies)

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）
Toshio Yanagida (Keio University)

JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 3

平成 20 年度

発 行：国際協力機構横浜国際センター
Japanese Overseas Migration Museum
海外移住資料館

発行年月：2009 年 3 月

問い合わせ先

JICA 横浜 海外移住資料館
〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 赤レンガ国際館
Tel 045-663-3257 / Fax 045-211-1781
Web:<http://www.jomm.jp/> E-mail:info@jomm.jp

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum *JICA Yokohama*

Vol. 3
2008

Articles —————

A Historical General Survey of the Immigration Studies in Japan after the 1990s
Tomonori ISHIKAWA

The Japanese-Language Press in the United States and LARA:
The Seattle *Hokubei Hochi*'s Coverage of Relief in Post-War Japan, 1946-1947
Takeya MIZUNO

Nisei Interpreters/Translators of the U.S. Military
Tomoko OZAWA

Research Notes —————

The Ties between Japanese Americans and Japan:
MIS Nisei Who Were Stationed in Occupied Japan
Naoko MASUDA

Oral History Notes —————

Oral Histories of "Picture Brides" :
From the Issei Oral History Project, Japanese American Archival Collection, at
California State University, Sacramento
Ikumi T.YANAGISAWA

Research Document Reprints —————

"Diario da Fazenda Monte d'Este" y el movimiento constitucionalista de 1932
Toshio YANAGIDA

